

188. 82-Mi 75ウ  
1200500728309

82  
75  
⑨

事故本  
欠ページ  
P217~232  
1993. 6. 25



始





エト7E58

188.82  
M+75

勇猛禪の鈴木正三

宮嶋蓬州著







188.82

M<sub>1</sub> 75

ウ

勇猛禪の鈴木正三

宮  
嶋  
蓬  
州





## 序

鈴木正三老人の名を始めて知つたのは、何年以前の事か忘れてしまつた。私の青年時代にも心學が社會の要求に應じて喚び醒されたことがあつた。恐らくその頃の事であらう。鈴木正三こそ心學の祖であるとか何かに書いてあつたのが頭の隅に残つてゐたのである。事實正三老人の語を弟子慧忠が書き留めた、驢鞍橋の中には、その後の心學者が常に用ひてゐる所の、我れなし、我れ立て、等の言葉が隨所に見えるのである。その道の人から見たらこれ等の類はまだいくらかもあるであらう。

然し心學といふ言葉は、正三時代に已にあつたやうである。當時の人は熊澤蕃山をも心學者として取扱つてゐたと見えて、あるとき老人の前で蕃山を心學者として誇るも、それに對して——いや／＼四十歳にして一國の師となるほどの人故、勝れたる所あるに相違ない——と認めてゐる、心學は法の花にして佛法は實である。心學の榮えて來たのはやがて佛法の興隆する前兆である、とも云つてゐる。

老人の見解によれば、心學はしつけを教ゆるが故に入り易く、禪門は心の開くる事を主



とするが故に遂げ難いと云ふのである。佛法の教學、儒學、老莊の學に對しても、たゞこの心の開くる所なきを相違點にしてゐるのである。

仁王禪、勇猛禪を説いた正三の名を知つたのは更にその後の事である。仁王禪と云ふ言葉は一見好奇の對象となる、如何なる教であるか知りたいと思ひながら機縁なくして過してしまつた。然るに五年程前のこと、石原俊明氏は何の意圖に出でたのか、私に正三老人への參究をすゝめられたのであつた。當時、平林寺の庭を掃く以外に用事のなかつた私はすゝめられるまゝに參究に取りかゝつた。心學の祖である事や仁王禪の祖述者であることが私の心を動かしたのであつた。

驢鞍橋に接するに及び、私は全く老人に心服してしまつたのである。極めて神經の鋭敏な藝術的素質は豊かであり、然も武藝に勝れた戰場往來の古兵ながら當時の武士としては珍しく學問のあつた正三老人が、一旦佛門に入つてからはたゞ土となれと教へ且つ身を以て行つてゐるのである。禪家に於て土坊主といふことは、全く無爲無能のぼんくらを示してゐるのであるが、老人は進んでその土坊主となれと何人にも説いてゐるのである。名利は勿論一切を擲つて土となり切れといふのである。これより強い教へはないのである。

その後私は正三老人を書くに及んで、土といふ文字に出會ふと慄然として顧みて恥しく、筆の進まないのを常とした。

然も正三老人はこの土となるには、仁王の機を受けて勇猛大威勢を振り起こせ、と云ふのである。老人はとりすました獨善者が嫌ひである。即ち二乘小果の利己主義だ。寧ろ無頼の徒たりとも身を捨て、世の爲め人の爲めをはかる者をとる。故に老人の土とは、一切自己を纏縛する物を斷つて、世の爲めに働けといふのである。老人はその説く如くに自ら眞に名利を擲ち、土の生活となりきつて世を教化したのであつた。

鍋島の葉隠れが——武士道といふは死ぬ事と見つけたり——の語を吐く以前に——義といふはぐつと死ぬ事なり——と道破してゐる。その間に何等かの脈絡があつたかなかつたは知らないが、白隠禪師に到つて、關東らつば者の勇猛の氣はたしかに老人より受け繼がれてゐるのである。老人の末期數日前、會下の一僧の問に對して、——正三は死ぬとなり——と一語を吐かれたのみと弟子慧忠は記してゐる。人は活きながら死ぬ事によつてのみ自在を得るのである。この大死によつて、自在無礙に世に處し機に臨んで働き出づる端的を、老人は切れ端の現れと表現してゐる。



現在非常時にも非常なる秋に際して、危機に際しての自在の働きは萬人の望んでゐる所である。然しそれはまた巨細な機構や制度や訓練の中にのみあるのでなくして、更にその根柢を爲す所の其奥を培ふことになければならないのである。佛法とは、時の常と非常を問はず、人生の最奥に徹する道なのである。

終りに臨み、正三老人への参究によつて、殆ど狂氣に近かつた私の心身に幾分のゆとりを生じ、求道の本筋に若干たりとも立戻る動機を興へられた石原氏に、深く感謝の意を呈す。

昭和十八年十月

著者

目次

風貌	三
目標	三
破生	四
修行の正邪	五
刹那	六
死に習ふ心	七
佛法世法一如	九
勇猛心	一〇
三寶	九
浮ぶ心、沈む心	五
怨靈成佛	四
鈴木正三略傳	八



僧問ふ、

師の法は義一と承る、

義は如何が守らんや。

師、はつたと瞋んで曰く、

義と云ふは、ぐつと死ぬ事也。



風貌

師の古傍輩何某殿曰く、正三は若き時より僧好、寺好にて如何なる僧にても僧にてさへあれば近付給ふ。始め権現様に仕給が少し奉公の暇有こと有ければ、家を息男に譲り下津間多寶院、關本最乗寺杯に引込みて僧に交り玉う。亦、南泉寺大愚和尚の渡にも寮舎を構て久く居給ひ、其後亦再世に出、台徳院様に仕へ、便ち關ヶ原陣同大阪兩陣に忠功を作つて終に出家し給也。

去時我も同組にて大阪御番に當ることあり、高木主水所にて頭振舞あり、互に亂酒になり打解け、跡を頼むぞ、先を頼むぞ、と道中宿々の約束まで云合し、亂れたる座に成りて不果、鈴木殿は常に人に混ぜず、打上つて柱に打懸り、すみの目使つてゐる人也。其日も是の如くしてゐ給ひけるが、つゝと座中に出で、扱てく各々はねばい事を仰せあるもの哉、道中跡先の事迄今約束あるとも争でか當んや、分別の仕置用に立ぬもの也。何が大事の御番に參る身が、我れ人生で參らんず、門を出るよりづんと命を捨て死切つて出で、其





時々随つて事を作ん迄よ、と云給へば、頭を始め皆な尤もと受られたり、一座の人々胸つゝ切れて心安く成たると云れたる、と也。

鈴木正三の現し身とその風貌を偲ぶべく『驢鞍橋』の中の一節を茲に引いた。正三に關しては、正三道人四相、耳底記、三河人物志、等がある由であるが、不幸にして私はまだ接する事が出来ないでゐる。然し正三の弟子惠中の輯録した『驢鞍橋』、これは正三が六十歳を過ぎて江戸に出て、僧俗を接化してゐる當時の言葉を集めた物であるが、此の中に正三の眞面目は突々として現はれてゐるし、そこから過去の生活も種々に推測出来るやうに思はれる。

今此處に引いた一節は、大阪の役も終り、正三は高木主水 正配下として、江戸で秀忠に仕へてゐた頃と思はれる。それから後、間もなく正三は勝手に出家してしまつたのである。だから此時も正三の心の底には已に、——萬一曲事と思召さば、御成敗あれと罷出で腹切らんと思ひ定めて——出家したほどの覺悟は決定してゐたものと見ても間違あるまい。まして、二十歳前後の關ヶ原の初陣以來、戰場に身を曝した事も數多い事であらう。その度毎に捨身の道を一念とした彼は、胴腹を撞き抜かれて死なん、死なんと鍛錬して來たのである。

る。

正三の云ふ所の死とは、その當面した事象に對して全生命を打込んで行く事である。彼にあつては當面した事以外に何物もないのである。大阪に向つて發つて云はれれば發つ。一步踏出したら一步である。如何なる事に出會ふか凡夫の身では判らない。宿を定めておいた所で、跡先を話し合つておいた所で、それ等の事は何にもならない。餘計な用心は寧ろ邪魔である。唯一歩一歩を踏みしめて行く、それより以外には何もないのである。彼は又終生分別を厭つた人である。勿論、佛法は思慮分別を以て知解するものに非ずと説かれてある。然し日常の行爲の上に飽迄それを實行して、分別の仕置を排ける事は仲々困難である。同時に又我々の分別の前に仇敵は仲々現はれない。分別の及ばない所に災難や敵が現はれて來るのである。我々の生活はたゞ一息一息だ。大切なのは無限に變化するその一息一息に對する覺悟である。正三はそれを——づんと命を捨て、死切つて出で、其時々随つて事を作ん迄は——と云ふ。前後裁斷である。事があつても裁斷であり、事がなくても裁斷である。そこに無限に變化し得る自由があるのである。——此處で世間の所謂用意周到と、禪の捨身と何れが眞實に於て周到であるかを考へる。



計らひと云ふものは多くの場合寔に何ともならないものである。併しながら我々は、我々の生に執着する限り計らひに頼るのである。つまりけち臭い理智である。我々は我々がこの世に生を享けた當初に於て、已に計らひを絶してゐるものである事は、何人も知つてゐる事である。けれども我々が生きんが爲には、この計らひに頼らなければならぬと考へる事は、つまり本能的な警戒心であり、どこまで行つても自己に纏りつゝいた所のものである。すべての理智が第一に此處から出發してゐるのである。そして種々に論じ、究め盡して、最後に、理智は理智の達し難い點に到つて、計らひを擲てと命令する。そして理智は止つてしまふ。我々は多くの場合理智の與へた、擲てと云ふ言葉に安心して、再び理智に戻つて来る。そして再び色々々と計畫し豫斷するのである。

正三は此の種の理智を最も嫌つた。故に彼は常に、ただ死に眼をつけて眼をたじろかすな、と唱へ通し教へ通した。死は前後を裁斷してゐる。事に當れば事それのみである。士も農も商も工も、學問も藝術も、事そのものになり切る所の、簡潔な死の一字を以て當面する事を説いた。従つて彼の意味する死は消極的なものでない。消極的な死、無事、無爲等の言葉に依着して、たゞ空々と暮すものを彼は拔がら禪として最も嫌忌した。此の點に於て正三は、正しく白隱の先蹤を爲す人と思はれる。がそれは後に到つて自ら觸れる事になるであらう。

が私は、禪の極り文句であるこんな抽象的な事を書くつもりではなかつた。鈴木正三を語る冒頭に此の一節を引いたのは、前にも云つた如く、彼の現し身をこれに依つて想像することが出来るからである。——鈴木殿は常に人に混ぜず、打上つて柱に打懸りきつとスミノ目使つて居る人也——と云ふ一句を讀むと、彼の風貌があり／＼と眼に浮んで来る。勿論、これはその人々の主觀によつて變化する事であらうが、私には、四十を越えた白哲で眼の切れ長な武士が、ぬすまひ正しく、柱に凭れて瞑目してゐる様が浮んで来る。周圍の酒席は已に亂れてゐる。かゝる際に、かうした態度をする人々は我々の常に見かける所だが、その多くはたゞ周圍の亂雜を厭ふ許りで、彼は之に代る何物かを他に求めながら、然も此の亂雜の人々を輕侮してゐるのである。そこにいやに取りすました所があり、周圍の反感を買ふことが多いのである。

然し正三は、たゞ與へられた場所には與へらるゝが儘に端然と處してゐるだけである。彼には他に對する好惡の念がない。これは正三が他の所で、——自分は今迄人の云ふ事を



氣にした事がない。勤番となればたゞ勤番だけを守る事に勤めたゞけである。従つて自分の心は、あれのこれのと餘計な苦勞をする事がなかつたゞけに、勤めは勤めとして充分果しながら、心には常に隙があいてゐた——と云つてゐることより知り得る。隙とはうかつの空虚ではない、つまり餘裕である。それ故に、彼の此の屹然とした態度の中にはどこかに餘裕があつて、周囲の反感を買はなかつたものと思はれる。それは、彼がこれ等の人々が餘りに道中、宿の事ばかりを繰り返し語つて果てのないのを見て、——さて／＼各はねばひ事を仰せあるもの哉、——と未練を耻とする武士に對して辛辣な一句を浴せてから——何が大事の御番に參る身が我れ人生で參らんず、——と事に當る者の所信を述べ、進んで——門を出るよりづんと命を捨て死切つて出で、其時々隨て事を作んまでよ——と道中覺悟の程を説いたのに對して、席にあつた主水正を初め皆な尤と受けた許りか、一座の人々は胸つゝ切れて心安くなりたりと云つたと云ふのを見ても判る。

正三の此の言葉は洵に強く有難き言葉である。——づんと命を捨て死切つて出で、其時時に隨つて事を作んまでよ——我々の修行の生活も此に盡てゐるのである。がそれ丈に世間にあつては當然であり又當然でもなくなつて來る。旅に出る者、戰塵の收つてまだ幾許

もない而も交通不便の當時、江戸から大阪へは全く水盃に價したものである。道中の用心はお互の胸にある。宿の事、水變の事までも念頭に上り注意し合ひ、助け合ふ氣の起るのは當然である。然し武士として君命を帯びて一步を踏み出す限り、宿も道中も跡先も水變りも、一切が君命の中にある。何の顧慮する所もないのである。已に前後は裁斷されてゐる。死にきつて念々の一步々々を踏みしめて行くより他に道はないのである。なまじな身邊の計らひ、宿の取りきめ、跡先の順序等、忠義の爲にすると云ふであらう所のそれ等の分別は、反つて時に事態を紛糾させる基となる。分別仕置はものの用には立たないのだ。づんと命を捨て、行く許りである。之は武士の平常の心懸として當然である。然し、人は當然の事を當然として指摘されると逆に反感を抱き易い。

判り切つた事を餘計な御世話を云ふな、と云ふ心になる。殊にそれを云ふ者の境地がそこまで到達してゐないで、生物知りの辯巧に至つては、嘲笑の的である。然し此の場合、いつもキツトスミの目を使つてゐる人混りしない正三が、つゝと座中に進み出で、此一言を發したとき、人々は胸の開いた想をしたと云ふのであるから、當時正三の境地は相當の域に達してゐたと思はれるのである。況てその周囲の人々は、組頭であり、彼の平素の生



活を知る同輩である事を想ふ時、その日常が一層偲ばれて来る。變な話であるが、私は正三が此の柱に打懸けた姿を思ひ浮べると、それに聯つて、中里介山の描いた机龍之介の姿が浮んで来るのを防ぎ得ない。之は無論私の煩惱のなす業である。そして未徹の苦惱を劍に托して人の血を吸つた龍之介の周圍には、むせぶ様な妖氣を感じ、已れを捨て、一意莫妄想と死を見つめた正三の端坐には、香りなき高き香氣の上るのを感じるのである。

正三はその後間もなく自ら剃髮出家した。その當時の状態を、彼自身の語る所によれば——我四十餘のとき頻りに世間いやに成ける間、御穿鑿あらば無理に世間いやに候間、如是罷成る。曲事と思召は御成敗あれと罷出、腹切んと思定め不圖剃たり。番頭や御老中に九大夫こそ機違に罷成たりと御申上げ頼奉と云ければ、いたはしや彼の御老中の、扱々いな事めされたり、人の事を能こそ取なすものなれ、氣の違はぬ人を氣違とは取成れてこそ、と仰せ有しが、時を見、御機嫌を窺ひ夜咄の序でに鈴木九大夫（正三俗名）こそ不圖道心を起し候と申上られければ、合徳院様如何思召たるか、元より御慈悲にて、夫は道心では無、隠居ぢや迄よと仰出されたり。彼老中悦び我を喚、何と有んかと思ひ加様なる氣遣したる事なし、然るに、如是の忝き御意あらんや、急ぎ繼目を申させよ、と

有に依て俄に今の九大夫を御禮申させたり——と云つてゐる。

之で見ても正三の出家は、西行或は熊谷の如く、不平不満の事あつたとか、俄に無常を感ずる事あつて發心出家したのではない事が判る。然し正三自身の語る所によれば——我四歳の時同く四歳になる従兄弟死す。我此時、さて死したがどつちへ行つたか、何となつたぞとひとと疑起りたり、と。又他の場所で——正三は只因果にて剃りたり、定て正三は出家になる因果こそ有つらん。無體に剃りたくて剃りたる也——と云つてゐる。正三の出家には理窟はないのである。

四歳の時従兄弟の死で生死の一大事に疑着を生じた時に、無論何等の理窟のあるべきがない如く、四十歳を過ぎて、致仕して出家したのにも他の原因があつたわけではなく、たゞ止み難き要求に出たものであらう。それだけに彼の出家は最も純粹であり熱烈であつた。彼の古傍輩が語る如く、又その出家以前にも『盲杖』の著書のある如く、彼の求道的生活は四歳の疑着を可視的出發點として、絶えず繼續し且つ熱烈であつたに違ひない。正確な史實でないが、正三はその諸弟を慈しんだが故に、長男である自分は家を出て高橋庄の七十騎士某の家を嗣いだとも傳へられてゐるが、後に到つては矢張り鈴木を姓としてゐる



るの如何なる理由か不明である。

兎も角、彼は三河國高橋庄矢並村（或は加茂郡足助庄と云ふ）で、天正七年に生れたのであるから、恰度信長が本能寺に死す四年前である。日本は恰度室町の暗黒時代に培れた民力が、赴くべき道を明にしはじめた黎明の時であつた。次で豊臣に次ぐ徳川氏の天下掌握、正三は此の新興の機運熾な時代に生れ、新興の勢力を統一した徳川氏に屬してゐたのであるから、その生活や時代的氣運の上からは、世を悲觀すべき何物をもうけないわけである。従つて正三の求道的態度には、平安朝以來の佛教に附物である所の、取り分け中途入道者に決定してゐる厭世悲觀の影は見られない。寧ろ積極的な求道心こそが彼をして出家の道に驅り立てたと見られるのである。勿論世俗的な立場から見れば、四歳にして生死の一大事に疑着したとか、武士でありながら寺好みであり、非番となれば家事は人に委ねて參禪辨道に暮したといふ様な事は、世を厭ふやうにも見えるであらう。

然し判り切つた話であるが、人間が眞實を求むるといふ事は世を厭ひ生を嫌忌する事ではない。生を熱愛するが故に眞實を欲するのである。自己が眞實を求むる限り、社會に對してもこれを要求する。嫌忌するところは、それが邪惡と認められる限りに於てである。

併しながらその邪惡も、多くの場合は、自己の持つ惡徳を他の中に發見して反撥するのである。自分に全くないものは他の中にも見る事は出来ない。それ故に多數の人の性格を描き分ける作家はその作品の成功は羨むべき限りではあるが、彼の内面の生活は、それほど多くの苦惱への當面である。又佛教でも、煩惱の多い事は、必しも嫌忌せず、寧ろ豊穡な土壤に譬へられてゐる場合がある。が、何れにしても他の内に見得る惡徳は要するに己れの反映である。如來無縁の大悲は、衆生煩惱の一々を罰しない。話がそれだが正三は他の惡徳を指摘しない人である。惡き事は皆な己れにあると云つてゐる。

正三の屬してゐた高橋騎士の一隊は關ヶ原の役で拔群の功があつた爲に、凱旋の後、特に上番の事を許されて原地に歸されたのである。此の點に於て、正三の求道生活は洵に恵まれてゐたのである。彼は暇ある毎に諸方に遍參したらしい。『驢鞍橋に』本秀和尚なる人の話として、

——師（正三）は近代の佛法の中興なり。其の先終に誰でも修行と云ふ沙汰したる人無し。此の前宇都宮物外和尚の所にて明關、大愚、愚道（堂）、三人講釋を聞居給ふに、師、俗の時至り此の三人の衆に向ひて、録を見るにどの録にも、大悟、悟道、省悟、修行、杯



と云ふ事あり、是れ各の様に講釋を聞覚え、また人に講釋して聞せた迄にて埒明事なりや、古人達も左様にめされたりや、と節々尋給ふ。爰に於て、何も行當り心附て坐禪を專らとして修行の沙汰をし出されたり。また雲居和尚は其の頃加藤式部殿の歸依僧たり、或時大愚和尚式部殿へ見舞に到り玉ふ、參會の度毎に雲居和尚を、御堂坊々々と喚給ふ。雲居和尚、狂言も一口こそと云うて大に嘖給ふ。大愚和尚云く、いや狂言に非ず、堂坊と云はれ度も無んば佛道修行し給へ、或は儒書を講じ詩を作り歌をよみ、俗家に頭をかしげ廻らば堂坊に非ずや、と雲居和尚大に非を知り終に道に入給ふ。此の外にも道者に名有るも皆此の後の事也。根本は師に仍つて起る也、修行すると云ふ事は久ら斷て有りたると見えたり。——とある。これより先き、大愚、愚堂、雲居等の一人々は慶長十一年に天下叢林の歴訪を企て、諸國遍歴に出で、後別れてその中、愚堂等二三の人が宇都宮の物外和尚の會下に參じたのであるから、此の話はその時の事である。

正三は、修行に對して無類と云ふほどの精進と自信を持つてゐて、その語話の中にも、古の中峯國師、大慧禪師等の態度をまだなまぬると批評してゐるほどである。従つて青年時代、禪に心身を打込んでゐた當時には之程の言葉はあつたであらう。愚堂以下諸師

遍參の時は、愚堂が一番年長で三十歳前後、次で雲居は六歳ほど若く、大愚は更に二つほど下で、各血氣熾んな當時と思はれる。正三も亦二十七八歳でもあつたらうか、禪堂流に云へば、生藤もねぢ切るほどの力の漲つた時代である。物外和尚の下で、修行共に検討した事であらう。今日で云へば理論と實行との研究である。その當時、實地の修行が果して絶えてゐたものかどうか私は知らない。然し語録祖録の受賣りをして、自分がその境地にあるやうな顔附をする人々には今日と雖もしばし出會ふ所である。面白い事には、さういふ人が古人の語を引き、或は又現代の傑れた僧の事等を語る時には全く言葉も態度も變るのである。然もそれが古人の語や傑れた點を尊敬した結果ではなくして、恰度自分が同格である様に思はせようと努めるのがまさしくと現はれてゐるのである。求道一徹の正三には大悟、悟道、省悟などの至要の文句に對しても、之等の一人々の態度の煮え切らぬのが齒がゆくなつて來たのであらう。

愚堂和尚が妙心の庸山和尚の許に到つたのは三十五歳と云ふから、それから數年の後であらう。庸山に栞見して、二三の語を呈したが契はず——そんな了見で俺の所によく來たな——と踏倒されて發憤、夏の夜に竹林の中に坐つて我を忘れ、全身にたかつた蚊がグミ



の實のやうになつたのも知らなかつた、と云ふのは此の時である。庸山の此の惡辣の手腕を見れば、當時修行の事が全く絶えてゐたとは思はれない。然し青年の知識慾の旺盛なるまゝに、理論鬭争に耽る傾はあつたかも知れない。正三はそれに對して幾度か攻撃したものであらう。遍參の時も、雲居は大愚等と分れて宇都宮には行かなかつた。後に加藤式部の家で大愚に出會つて、修行疎かなのを戒められたのも、矢張大愚等が正三の言によつて修行專一に努めた爲ではないかとも思はれる。更に正三の言に依つて、愚堂和尚の發憤を事實とすれば、愚堂下に至道無難禪師あり、無難の下に正受老人が出で、正受老人は白隱禪師を打出して、白隱は禪道中興の大業を爲したのであるから、正三は正にその先驅者なのである。

正三の求道出家に厭世悲觀の影の尠い事は前にも書いた。それと共に勇猛の機を高調する所は、そのまゝ脈々として白隱にも傳はつてゐる。が、私はまた時代を共にして、同じ傾向に出た至道無難禪師の事を考へる。正三は已に前にも引いた如く、その出家の動機は極めて純粹で、求道の一途にひた向であつたが爲と私には思はれる。出家した當時は罷り違へば切腹と覺悟して剃つてしまつた程であるから、得度の師の事は語つてゐない。累を

及ぼす事を懼れて得度の師を秘したのか、全然なかつたのかそれも判らない。然し正三が老中に剃髮出家した事を申出で、將軍のお訊ねあつたら九太夫は氣違になつたと答へて頂きたい、と云つたのに對して彼の老中は、——人の事はよくこそ云ひたいが、狂人でもなものを、氣が狂つたとは云はれまい——と呟いてゐる。正三の方で反つてイタハシヤ、と老中を氣毒がつてゐるのである。その後、老中は秀忠の機嫌を見計つて、正三出家の事を云ふと、今度は秀忠が、——いや、それは出家ではあるまい。頭を丸めて隠居したまでだ——と道心の語をそらせてゐる。當時主家の許しを得ずして出家すれば家は絶えたものかも知れないが、秀忠のこの言葉に對する老中の悦んだ有様も此の文中にありくと現はれてゐるではないか。——全くどうなるかと思つてこれ程心配した事はない。然しよかつた、此れ程有難い御意はない。早く跡目相續の者を急いで出さない——それで鈴木の家は立つたのである。老中の取成す態度、秀忠の言葉に見ても、正三は周圍に好意を持たれてゐたのである。

無難禪師も同じやうである。語り傳へられる所を聞いても、特別に悲觀的な無常を感じずるやうな外的條件はないやうである。美濃關ヶ原驛主、合川刑部親明と稱したさうである。



何としても、今日で云へば大きな旅館の主入であつたのが、業風の吹き廻しであらう、いつとはなく道心の起つて切なるに堪へなくなつて來たのである。私の聞いた話では、その頃の親明は無類の大酒家だつたといふ事である。それ以前から家の者も愚堂和尚に親くしてゐたが、或時愚堂和尚がその旅館に泊られたので、家人は和尚にどうか親明に酒をやるめるやうに忠告してくれと云ふたので、その晩和尚は親明を自分の部屋に喚んで、今夜は俺が相手になるからいくらでも酒をのめ、と盛んに飲ませた。さうして翌朝出發の時になると、親明は駕籠の後ろについて和尚を送つて行つた。彼はどこまでもついて行つた。夕方宿につくと親明がある。然し愚堂和尚も黙つてゐる。翌日も亦ついて行く。そして遂に江戸まで來てしまつた、といふことだ。その時親明は和尚から劫外といふ居士號を附せられて、居士のまゝ和尚に従つて修行に努め、四十歳の時家に歸り、娘に養子を迎へて、初めて出家の本懐を達したのである。無難禪師は正三老人より十六七歳年下であるが、同じ愚堂下の人となつてゐる。正三が江戸で熾に接化してゐる當時は、無難も江戸にあつたのであらうが、兩者の間には何の交渉もなかつたやうである。然し、無難禪師の出家の動機も、ただ純粹に出家したい要求に迫られたと云ふ以外には、何事も傳へられてゐない。そ

れ以前の中年の入道者の多くは、厭世悲觀の原因によるか、或はさうでなければ、高位の人々の上座に坐れるは出家ばかりといふ榮達の野心に驅られた人が多いやうである。後者の事は、例の伊達正宗の下駄を懷で暖めたのを、正宗に誤解されて發憤して、一平民にして大名の上に坐れるやうになるのは僧正となる以外にない、と云ふので支那に渡つて修行した瑞巖寺の何禪師かの物語が、虚實の點は知らないが、平民の位階的榮達の方法は唯だ僧正になる事のみあつた事の證左とはなると思ふ。

然し正三老人も、無難禪師も共に云ひ合はせたやうに寺院に住職しなかつた。二人とも一庵の主として世を送り、正三老人の如きは末期は神田の弟の家に到り、八疊程の離れであらう小座敷を見て、よき死場所あるを見附けたりと云つて入り込んだのである。無難禪師は至道庵の小庵に一生を終り、共に寺にも法階にも何の望も持たなかつた。たゞ求道の一念に終始した人である。

寔に此の時代は面白い時代である。時代の面貌を鳥瞰的に知る事の出来ない私などは、寧ろ不思議に感ぜらるるほど、教界は複雑してゐたやうである。寛永元年といへば、正三の出家する少し以前であり、無難禪師が愚堂和尚のあとを追つて江戸に下るよりも六



七年前と思はれる。此當時、徳峰老人の書いた『めざまし草』の一節に、

——此の頃のうき世わたりの若法師、受戒のさたはさもあらで、うら紫の小袖きて、こつまうしろへ引まわし、絞文金砂の平帯して、きぬの衣身にまとひ、染わけたびと紫紐、紅うらの丸頭巾、黄纈纈のきんちやくに、蒔繪梨地の印籠さげ、からのやまとの緒どめして、身なり足ふみふりかゝり、人にかはれるこそおかしけれ、是はさもなし、行跡のたうとき譽ありけるも、いかなる寺の貫首にも、あをがれんとはかり事とぞ聞ゆれば、佛けのひかり、いたづらに名利の雲の立おほいて法の師とたのむべくもなし、もとより父母の命にて、心ならず出家したる某は、何の道心おこるべき、たゞ世に多きものとは、名利度世の悪知識、因果撥無の悪法師、こと更在家のなま禪法、小知は菩提の妨にて、不得心なるを宗として、道にたがひ法にそむけり、たゞ世にはやる物とては、愛宕白山それいもん、緩怠名聞すきたばこ、雑説とよく聞取學文、邪正もしらぬすみ衣、とにもかくにも徳つかんとぞいのりける。

道心はもとよりのなしそら聖

珠數のつるにと浮世祈れり

これは辻善之助博士が近世佛敎衰微之由來の中に引かれたもので、類似の物はまだ他にいくらかもあるが、正三老人の『二人比丘尼』の中からも引かれてあるのである。

——むかしはどう心有る人は、てらに入て、ちしきのおしへをうけ給ひしが、今は昔にかはり、少しもどう心有る人は、てらをいでらるゝなり、其ゆゑは、ちしきに道心なく、あつまる僧も心ざしなくして、おそろしき心なる故なり、心ざし有る人のまじわるべきやうあらざれば、寺を出づるはことほりなり、かたぐの如く、世をすつる人も、しゆつりの道を思ひ給はず、さるほどにざせんくふうといふ事は夢にもしらず、少しなりとも物をしる人にまさらん心をはげます、しかるあひだ、ついに名利のきつなをはなれず候、——

少しわき道であるが私は辻博士のお蔭で以上の文章を引用したのであるが、此處で辻博士は正三の文の終り——物をしる人にまさらん心はげます——とあるに對して——はげます——ではないかと疑問を添へてをられるのに心を引かれたのである。正三老人は學文とか知識とかいふものを相當に排斥し、物知顔を嫌忌した人である。彼にあつては、今日の科學的知識は士農工商中の工の部類に入つたもので、精神文化の學などは餘り認めず、



學文と云へば儒佛老であり、殊に此の場合は佛教の教學を指したものであり、之れ等の知識の獲得は、物知りになるばかりで修行の上では寧ろ妨げになる増上慢のふるまひとして、斥けてゐるものと私は思ふのである。今日ならば科學的の知識に對しても、精神文化の學に對しても、それに従ふ限り、果し眼になつて究めよ、それが求道と一致する、と云つたであらうと思はれる。此の學問（文）は正三の用字と云ひ、物を知ると云ふ語の内容も外延も正三當時とは全く變化した今日にあつても、學問と云ふと一途に輕蔑してかゝる傾向が禪家者の中にある事は否めない。殆んど先天に近い習癖の如くでもある。それが爲に學問と云へば何も彼もごつちやにして時代に對する觀察も全く見當違となる場合もあるのである。それと同時に學問を尊敬される辻博士は、かゝる場合も矢張斯くも解釋されるものかと思つたのであつた。

斯る時代に時を同じうして世に出た正三、無難の二人が、共に大寺に住せず名利を求めず、常に民衆と共に求道の途に進んだ事は、此の新時代の精神が潑刺とした眞實の宗教を求めた具顯化と思はれる。洵に宗教は職業的な人々の手に專屬するものでなく、人間の心の中に萌える、熱烈な要求によつて發生するものだからである。

正三在世時代の佛教界の一面には、以上のやうな腐敗した現象の甚しいものもあつたであらう。がその一面には、又、愚堂、大愚、雲居、澤庵、一絲等の一人々が禪界にも輩出した。法熾なれば魔熾と云ふ現象といふべきであらうか、社會の複雑さは人間性の複雑の反映である。これより先の時代、室町末期から信長、秀吉を通じての宗教界の波瀾重疊は到底私如き歴史的知識の乏しいものでは、その前後の連絡、原因、關係等に就て何を云ふ事も出来ない。然し當時は、一向一揆、日蓮宗騒動、比叡山の焼失、根來攻撃など、時代の推移と共に揉みに揉んで、坩堝の中に投込まれてゐたかとも思はれる程である。新しい武器の輸入は、攻城野戰の方法の變化と共に人心を攪拌した。無常觀にすらも或るスピードの加へられた感じである。

之と共にキリスト教が傳來した。簡易な教理と實踐的な傳道の方法が、人心を收攬して新宗教へ驅り立て、行く。複雑多端な時代に處した佛教者には安逸は許されなかつた。新しき時代に對する認識、理解、新宗教に對する態度と研究、等々の苦惱も無慮あつたに違ひない。それは宗論に際しての決定的態度などにも現はれてゐるが、大阪落城、キリシタン禁制になつて、ほつと一息ついた社會と共に、宗教界も弛緩したものであらう。



然し、それは宗教をたゞ生活の方便とする人々の上に現はれたゞけの事である。彼等にあつては宗教そのものはどうでもよく、社會の歩調に従つて行く所に彼等の生活があつたか  
らの事である。我々は此の時代にあつては、しばしば戦場の生残りの武士の憤慨をも聞くのである。

本質を貫くものは、表面の變化の多様とは無關心に、自己の慾求に向つて進んで行く。  
正三、無難の如く、求道心の強い人々は、此の目まぐるしい變化との交渉の煩しく、寧ろ有害無益である事をよく見抜いて、掣肘を受くる事の少い一庵主に身を處したのでないかとも思はれるのである。殊に此の二人の人の道に入る動機には、消極的な、厭世悲觀の影の全くない事を前に言つた。彼等は斯くして、道に對する熾烈な探求に進んだものであらう。

それで正三は、自分が剃髮して出家したのはたゞ因果でやつたばかりだと言つてゐる。要するに、成りたくて堪まらないからなつたゞけである。後年ある旗本の息子が來て剃髮したいと云ふのに對して、正三は、奉公大事にせよと説いてゐる。此一段は正三の人爲りをぶちまけてゐる。青年は剃髮したいと云ふが、彼の態度は何だか對他的で、甚だ煮え切

らないのである。

それに對して正三は、自分は出家して已に八十近くなるが何の變つた所もなく、今に此の糞袋が惜しいのだ、と云ひ、更に進んで、

——其の方も今より出家して、八十まで修して見られよ、何の變も無き物ぞ。然る間、剃つても機違、剃らでも機違と思つてすらは剃りめされよ。剃つたら能らんと思ふてすらは大きに差ふべし、何の替はりたる事も有るべからず。差替る事あらば天狗か機違たるべし——と云ふ。青年は少時考へ込んでゐたが、

——自分は、今は端的にかうと思ひ込んでゐるのですが、然し將來、もしも出家を仕遂げる事が出来なかつたら變なものになつてまひますな——と云ふのである。

——どうも先刻から云ふ事を聞いてゐると、何一つ思ひ切れた所がない。後になつて還俗したら足輕にでも何でもなつたらよいではないか。將來何になつたら誰が何と云ふだらうなどといふ了簡が、已に思ひ切れてゐない證據だ——と突放してしまふのである。そして正三は、前に引いた自分の出家した當時の事を語つて聞かせたのである。——だから自分は、後になつて何をしたら人に何と云はれやうかなど考へた事は無い。——と云



ふ。即ち止み難き要求を貫徹したまでである。

然し出家してからの正三は求法の行脚に身を任せて、野に臥し山に寝て、衣食の事も詰められるだけ詰めた。又一時は律僧となつて戒律を厳守した。三河國千鳥山に籠つて戒律を行じた當時は、たゞ麥の粥と麥飯だけで過したこともある。即ち素麥である。斯くして永年風雨に身を曝し、糲食で追ひ詰めて來た爲に、過勞、營養不良、求道的焦燥の結果として、遂に重病に胃されてしまつた。藥瞑眩せざればその病癒えずといふが、人間の心の病に對して佛法修行が藥であるならば、この病は瞑眩状態に當るのであらう。

多くの醫者にかゝつて見たが、何ともならない。正三は自ら此の時を——數多の醫者盡く放す。我も一定死に究めけり。位詰に成り、何とも活らるべきやうなかりければ——と云つてゐる。心身共に動きのとれぬ境地まで自己を追詰めた結果である。遂には近くの親類共も皆聚ると云ふ重態に陥つたが——此の時、集つた人の中の正三の弟は醫者であつたが——彼はその症状を見て、此の病には藥の必要はない、食養生だけでよい——と云つたのである。食養生とは肉食をする事であつた。つまり榮養療法であるが、僧である兄に對して彼は此の時まで遠慮してゐたのであらう。それを聞くと正三は、

——何故早く云はなかつたか。養生ならば死人をも食ふべし——と肉食して二年程後にすと本復した、と語つてゐる。癒つては藥も用がないので、その後はまた潔齋してゐるが、當時、人々から非難攻撃された事は並大抵ではなかつた。——普通ならば自分はその時危く死んでゐるのであるが、耻知らずの正三なればこそ生命を養ひ立て、恢復して今日まで存命、修行も大略仕上げる事が出來たのだ。他人の口の端を心にかけてゐて何が出來るか——と、正三は親切に此の青年を諭してゐる。

正三にあつては、戒律嚴守も修行であり、肉食も修行である。臨濟は——古よりの先輩は到る處人信せず、遞出せられて始めて知る是貴き事を、若し到處に人盡く肯は、什麼を作にか堪ん。所以に獅子一吼すれば野干腦裂す——とも云つてゐる。決烈の志氣の前には世俗的の批判などは全くどうでもよいのであるが、此の逆用は、往々にして更に鼻持のならないものを持ち來すものである。臨濟にして、正三にして、始めて云ひ切る所のもの我々は學ばなければならぬ。

出家後の正三が、如何に彼が從前抱いてゐた求道に對して身命を擲つて欲求の満足に努めたかは、以上で推察する事が出來る。正三は大法とも云はなければ、眞理の探求とも云



はない。悟りを求むるとも云はない。ただ土になつて坐禪するばかりだ、と云ふ。そして正三は死ぬのがいやさに佛法に入つた臆病佛法であるとも云つてゐる。然し七十七歳にして愈々末期の近づいて来た時、弟子が病を問うたのに對して笑ひながら、——正三は三十年前に死して置いた——と答へてゐるのは、此の當時の心境を語つてゐるものとも思はれる。そして彼が四十歳を過ぎるまで、當時の厳格な主従關係の束縛に堪へ、然も彼の主家たる徳川氏が天下を掌握しなかつたならば、彼の出家の本懐も實現せられなかつたかも知れないと思はれるが、此の難關を突破してからの彼の猛烈な奮進ぶりは驚嘆に價すると共に、自己の生命も打忘れて求道の一途に没入した満足の程も想察されるのである。

出家以前の正三が、關ヶ原の役や大阪の陣でどんな働きをしたか。刀槍を執つての態度などが判れば別種の興味を添える事が出来るかも知れないが、それ等の事は更に判らない。然し正三自身も屢々、戰場に於て死に切る事は自分も略達したと思ふと言つてもゐるし、時には、胴中を撞き抜かれて死なん、死なんと進んだとか、敵の一太刀に切りられんと身を投出した瞬間には、已に自ら構へて敵を切つてゐた、とも云つてゐる程であるから、戰場の働も相當猛烈であつたらうと想察される。

然し出家後の正三は、——吾法は臆病佛法——と云つてゐる。そして正三の言句に接して行く中には、眞實それが臆病佛法と云ふ事の正しさを教へられる。大法と云ひ眞理と云ひ、第一義諦と云つた所で、生死の一大事を究め切らない限りは、すべて言句の遊戲である。人はまともにこの一大事に相對して、徹惛に究め去らうとする時に、已れに現はれるものの臆病である事を知る。蓮如上人の驚き易き心、と云ふもこれであらう。禪堂の入室に一種不思議の戰慄を感じるのも、根源を茲に發する所以であらう。

正三は世間に於ては勇士であつた。また彼の説く禪は勇猛の機を第一に押立てゝゐる。然も彼は自家の臆病を憚ることなく告白する。そこに正三が、多くの師家と態度を異にする所がある。たゞ自由に眞摯に終生心の道を求めるのみ、粉飾のあととは更でない。

正三が出家後の猛修行も、病によつて一段落をつけたのであらう。彼の舎弟三郎九郎が、石の平に伽藍を建立して與へた。正三は主家徳川の恩を思ふて恩眞寺と名づけた。彼は何でも飾りつくらふ事が嫌である。物の名の事などに對しても『徒然草』を引合に出して多くの勿體ぶつた名をつける事を笑つてゐる。恩に感ずるが故に恩眞寺である。此の頃には彼の許にも教へを乞ふ人々が出入し初めてゐた様であるが、自分自身の修行も益々努



めてゐた事は勿論である。石の平からどれ程の道程の所か知らないが、愚堂和尚のゐる寺へ行く途中、一切無念でゐようと思へば無念でもゐられた、と語つてゐる。一寸一分も自己檢討を忘れない態度が現れてゐる。が、此間の行跡も委くは判らない。天草の亂の後は弟三郎九郎が代官となつたので、正三自身も天草に行き、キリシタンの事を研究し、又その土地には寺庵を建立し、『破キリシタン』を著して、地方の教化にも努めた事を知るだけである。

正三の眞の教化は、六十歳を過ぎてから石の平を引拂つて江戸に出てから後が最も振つた事と思はれる。自體正三自身は學問を好まぬと云ひ、性に適せぬと云うてゐるが、當時の武士としては、經文は元より謡曲、物語類まで相當讀んでゐたやうである。更にその著『破キリシタン』の中には、印度教論派の理論まで引き來て論じてゐる所を見ると、彼の讀書の程も推察される。已に在俗時代にも『盲杖』の著がある。之は明輩に儒者があつて、佛道は世法に背くと云つたのに對し反駁したものだ、と弟子惠中が述べてゐる。『二人比丘尼』は悲母の爲に書かれたとあるが、勇猛の機を第一とする仁王禪を説いた正三の筆になるのかと疑ふ程優しい文章である。今日にあつて我々には男子だけが成佛して、女子

は成佛できないと云ふ様な説は、已に論ずるにも及ばない事であるが、徳川初期の禪家の人として、女人成佛を眞向から取扱つてゐる所もよいと思ふが、何にしても堅苦しい禪を打碎いて、婦女子にも普及させようとした所に、當時の布教の新形式が見られ、ずつと以前、正三こそ心學の先驅者だと云つた人のあつた事も思出されるのである。

此の書物には、之れから後も餘り觸れる事もないであらうから、その中の三四行を此所に引いて置く。之れは新婚の夢まだ圓かでない中に、夫が戰場に出て討死し、遺骨のありかも判らないので、その妻が夫の死場所を探ねて行く途中の一節である。

扱もつまの最期の處は此邊にやあるらん、かしこにてやあるらんと、廣き野はらにたゞすみ侍れば、秋かぜひやゝかに音づれて、遠の里里きり籠て、もの淋しき野へのけしき、悲そふる折ふし、一村雨のふりすぎて道の小ざゝも靡きあひ、かへらんかたも覺ほえず、心も絶はて獨たゞすむ草むらに、まねく尾花も恨めしければ――

正三にはこの他にまだ謡曲もある。また謡曲の批評もある。山姥の後シテの出に、――  
あらものすこの深谷や――と云うて出て來るのは悪い。山姥に、深谷のすこいと云ふ事あらんや、と云ふのである。又、クセに、



山引の山姥が山めぐりするぞ苦しき——と云ふのもいけない、と云ふのである。——山姥の山めぐり苦しかるべき道理なし、山めぐりするぞ妙なる——と云ひたい、と云つてゐる。斯て彼は謡曲卒塔婆小町の原作に對しても彼獨特の立場から不満を抱き、能の演出法に對しても切實な批判をしてゐるが、遂に自ら改作しておもかげ小町としたのを後に松平和泉守が見て、和泉守は更に觀世左近太夫に見せて、御前能の時分にやらせて見ようと云つたと云ふ事である。——冒頭の一節を引いておく。

ヲモカゲ小町、

山はあさきにかくれがのく深きや心なるらんワキ詞是は高野山より出たる僧にて候、我此度都にのぼらばやと思候、サシ夫前佛は既になり後佛は未だ世に出でず、夢の中間に生れ来て何を現と思ふべき、實に受け難き人身を受け逢ひ難き如來の教法を學びて解脱の道に趣くといへども、幻化を悟るの外はなし、世の中を何にたとへん朝ぼらけ、漕行舟のあとの波立居空き旅の空、行くも歸るも夢なれやさめぬ心を嘆くなり——

前の『二人比丘尼』と云ひ、此の謡曲の筆つきなどから推しても、正三は文章の修練にも相當苦心した様であるから、この他にもまだ何かあるのであらうと思はれるが、今は判

らない。然し彼は文章以外の藝術に對しても相當深い鑑識眼を具へてゐたやうである。そして、此所から正三獨特の佛像の機を移せと云ふ修行法が生れてくる。彼が初心の人には先づ仁王禪を爲せ、と云つたのは、また獨特の理論があるのであるが、ある日、正三の下に參じた人々が、勇猛心と云ふものは仲々受ける事が出来ないもの、と云ふと、正三は俄にきつと口を結んで、吽字の仁王の形を爲して、——どうだ、この機が移るか——と云ひ、更に口を開き、大手を擴げて阿字仁王の姿を示して、——此機が移るか——と云つた。

二十年位前であつたか、感情移入説と云ふ藝術論が唱へられた事があつたが、正三は佛像に對したならば佛像の中に秘む機を自己に移すべく努力せよ、と常に提唱してゐるのである。勿論、佛像の中に籠る氣魄をひしくと受け込むには、こちらの感受の條件がそれだけ具はつてゐなければならぬ、目的はそこにある。従つて彼の説く所は一般の藝術鑑識の態度とも違ふ。要するに直ちに内に秘む所の内奥に肉迫しろと云ふのである。がこれは又藝術に對する鑑賞の極致ともなる事ではあるまいか。

正三はこの時も諸人の前で、仁王の姿をして見せてから、——自分が曾つて河内の國で



見た阿字の仁王像は、中に氣魄が満ちて、見る人は誰にもその機分が移るやうに思はれた。もつとも一方の吽字の仁王も見事な物であつたが、その外のものはこのを見て大方へゴ仁王ばかりである——と云つた。さうして今度は、敵に打ち懸るやうに、身體をジリジリとねぢ廻す形を示して、——かういふ佛像が鎌倉覺恩寺の十二神の中にあつた。實によい威勢で、自分にはこれが一番相應する。そこで自分は之を以て、果し眼の禪を云ひ出して人に説くのである——と、果し眼の由來を説いてゐる。次で、

——一般に佛像ならば、羅漢像等に到る迄心を据ゑてよくこの機を観るべきだ。佛像である限り機の抜けたものゝある道理はない。皆な眼の据つた活きた形ばかりの筈である。毘沙門が天邪鬼を踏付けておられるのは自己を睨みつけて守る位であるし、寺院の庫裡にある章駄天がきつと詰つた形も洵にその場所の本尊らしい姿である——

と正三は表現の心に接する事を教へてゐる。が終に——自分は太抵の佛像は觀る事が出来るのだが、大黒ばかりはさして面白く思へない。これもきつと何か理由のある事だらう——と述懐してゐる。さうだらうな、と思はれる所である。

また或る時語るのに、

——萬事の中、物事を成す上に工夫をすべきで、食事の時は食事、語る時は語る上に工夫して、一切の行ふ所を工夫と一枚になり切るのを、工夫の中に萬事を活すと云ふ。が此工夫も、佛像に現れてゐるほどに自分の根底から仕附けなければ、自在となる事は出来な。聞く所によると、肥前の國温泉の本尊は四面菩薩であるといふが、これこそ四方八方に機の充渡つた位である。十一面觀音といふのもこの意味であるし、如來の端然として在すのは、已に機が十方に圓滿擴充してゐる現れである。總じて機が一方へ傾けばその方へばかり引れて脇があく。自分も三寶荒神位までは體驗したが、四面菩薩の境地は知る事が出来ないのも無理にも後へは機をくばられない——と率直に語つてゐる。此の一節は『正法眼藏觀音の卷』の——道德觀音は、前後の聞聲、まさにおほしといへども、雲巖道吾にしかず、觀音を參學せしとおもはば、雲巖道吾のいまの道を參究すべし——を想起させる。正三は臨濟に屬する人でありながら、ある書物には曹洞と記されてゐる程、道元禪師を敬慕した人である。従つて、正法眼藏も無心得てゐるべきである。そして古人の言句を借りて自己を示す人であつたならば、恐らく此の觀音の卷は依つて以て利用されるに充分である。然し正三は、自己の現在を現在として以外に語つてゐない。



彫刻への鑑識を想つて傍道にそれたが、正三はまた、發聲する事を好む。敢て音楽とは云はない。然し彼は、武士には、謡曲を機を張り詰めてうたへ、自ら己れを忘れる時が來るとしばしば語り、またある婦人が來て後生の用心を問ふと、——小歌を歌つて後生を願ふがよいであらう、——と先づ歌はせて、——どうもそのあはれな聲や綺麗な節まはしをするのがいけない。もつと胴中から聲を張出してあぶなげなく歌ふがよいのだ。いつもさうしてゐれば、自然に禪定の機を覚えて、やがて歌はない時その機となつてゐられるやうになる——と教へた。云ふまでもなく、艶のある聲の艶を捨て、上手な節廻しの上手を捨てる事が第一の難事である。斯る急所を壓へて、理窟も何もなく、すらくくと相手次第に修行の道に入らせる所は、無論正三の達道の力によるのであるが、正三の美術・音楽に對する鑑識の力のあつた、感受性の鋭さがよく働いてゐると思はれる。

慶安元年の夏、正三は七十歳を越えて江戸に出て、牛込天徳院の傍に草庵を結び住した、とある。此の草庵は能谷のある信者が寄進したものであるが、爾來七年程、多数の人を度生した言行を弟子惠中が書留めて置いたのが『驢鞍橋』の一書である。『驢鞍橋』の文體は全く獨特で、簡潔、素朴、而も力の籠つた、正三その人を目の前に見るやうな筆致

である。殊にその文章の末を、何々ト也、と結んである場合の、ト也とは、と云はれたとか、との事であつた。と云ふ説明語なのだが、それが、正三その人の語る心と一つになつて、何れが主意か説明か判らない想を抱かせる場合がある。正三が末期に近く、その弟子の法を問ふた者に對して、正三は死ぬと也——とたゞ一句答へたとあるが、之は無論、一生を通じて死に終始した正三末期の獅子吼を放たれたのを、と也と簡單に記してゐるのであるが、正三は死ぬと也、死ぬと也、と繰返してゐる中に、と也も正三の言葉の中に溶入つてしまふ感じを與へられてしまふのである。惠中と云ふ人は正三に没入し、正三は惠中の中に生きてゐたのでもあらう。

草庵は了心庵と名つけられた。了心とは、草庵を獻じた居士の法名である。此處に住してからの生活も無論枯淡を極めたものである。日常の事は何も書いてないが、たゞ一日、俄に死者の出家に行き、さまざまの供養を享けた後に、——一日徒に飲食したり、閻魔王に腹を打破れんずよ、——と傍の者に述懐したと記されてあるのによつても日常の生活は偲ばれる。江戸に出てから後は佛像を見て歩いた事もなく、能狂言見物の事も記されてゐない。たゞく度生に終始した如くである。



## 目 標

『驢鞍橋』劈頭は第一話として、

師一日示して曰く、近年佛法に勇猛堅固の大威勢有ると云ふ事を唱へ失へり。只柔和に成り、殊勝に成り、無慾に成り、人能くはなれども、怨靈と成る様の機を修し出す人無し、何れも勇猛心を修し出し佛法の怨靈と成べしと也。――

惠中は自ら、私の覚え書也――自己の指南の爲に亂りに留る也――と云つてゐるが、そのつもりで書き留めて置いたにしても、纏めて一書とする時には矢張整理して多少の順序を作つたものであらう。茲に正三佛法の中核が示されてある。正三は自ら我が佛法は臆病佛法也と云つた事は前にも引いた。正三の終生修業の目的は、只々眞に死に切る事であつた。ある夜弟子との物語りに、自分の修行の過程を追憶して、あれこれ、と語る中凡そ六十段ほど數へられたと云ふから、古來の文句を用ふれば、大悟十八回、小悟數を知らずと云うてもよいであらう。然しこの大悟十八回も、今日では大徳の修行を説明する通り言葉となつてゐるやうである。此點、江部鴨村氏の華嚴經講說の中の事が、矢張り當るの

かも知れないが、私などは、眞に十八回を十八回として長く信じてゐたものである。

兎に角、正三の修行は終生を通じて眞に死に切る事であつた。或時彼は、渺々たる滄海の一粟我性の須臾なるを知る、と云ふ句に心を打れたのが修行の始とも云つてゐる。正三の表現によれば、此句の意が彼の心に乗つたのであり、その時はその時丈の心地の開發である。が恐らく生れながらに彼は法を求めべく出来てゐたのであらう。そして六十一歳の八月二十七日の明ければ二十八日の曉に、はらりと生死を離れ、慥に本性に契うたと云つてゐるから、正に大死に徹したのである。然し正三にあつては、それ程の事では満足出来なかつた。彼は頸を切られても平然たり得た此の心境を一時的の現象として擲つて、更に又死に取つて返して強く修行した。死に徹したと思はれた此の境地も、臆て虚事となつて、今に正三と云ふ糞袋は秘藏也、と云つてゐるのである。

正三にあつては、此の大悟の境地が念々刻々に變る事なく、凡ゆる事物の上に現はれなければ満足出来なかつたのであらう。即ち正念の相續である。飯山の正受老人も、正念相續の爲には狼の出る場所にまで出て自己を試みた。洵にこれこそ、禪を修する者の唯一の眼目である。私の如き人間は、單に上つて坐つても、妄想にばかり惱まされて苦痛に堪へ



ない。ある時老師の前に出て、どうも正念相續が出来なくて困ります。と云つた所が、  
——何を生意氣な、正念相續なんて大それた事を云ふな——と、ひどく打たれた事があつた。私の考へでは、先づまあ、少し心氣の澄んだ所が正念であつたのだ。未熟な人間は、未熟な解釋しか出来ないものである。

此の時の正三の境地は、無論我々の窺ひ知る所ではない。或場合の彼は、自ら一生の修行は略仕終ふせたと云つてゐる。が眞の佛の境地と云ふ事は到底、一生、二生の問題でないと云ふのが正三の信念である。八千度の往來を重ねても、いや凡夫ならば何千億度の往來を重ねても、修行に修行を積んで眞實ハラリと我を離れ切らない限りは、臆病が残つてゐるのである。そして臆病なるが故に修行する。臆病を克服する爲には、大勇猛心を振ひ起さなければならぬ。柔和になり、殊勝になり、とは、臆病への妥協である。そしてこれ等の柔和や殊勝は、眞實の柔和でも殊勝でもないのである。それは寧ろ正三の唱へる、果し眼の中からこそ、眞の柔和も殊勝も生れて來る事は、後に到つて彼の説く浮ぶ心、沈む心の當體に接すれば納得が出來ると思はれる。正三は進んで、——佛法の怨靈となるべし——と云つてゐる。修行者に對しては洵に鋭い言葉である。

佛法の怨靈となる——佛法の怨靈となる——根底に於て無執著な佛法の怨靈となれるか、なれないかと云ふやうな問題ではない。洵に我々は、佛法の怨靈になればよいのである。嵯峨天龍寺には、松村松年かの描いた、正成公怨靈の幅がある。繪の出來不出來も機のこと、此の際の問題でない。たゞ滅私奉公の怨靈をその繪に對して幾度か考へた事を想起するのである。然らば佛法の怨靈となるべき修行の方法は、——第二話に曰く、

佛道修行は佛像を根本にして修すべし、佛像と云ふは初心の人如來像に眼を著けて如來坐禪は及ぶべからず。只二王不動の像等に眼を著けて二王坐禪を作すべし。先づ二王は佛法の入口、不動は佛の始と覺えたり。然ればこそ二王は門に立ち、不動は十三佛の始めに在ります。彼の機を受ずんば煩惱に負くべし。只一頭に強き心を用ふるの外なし。然るに今時佛法廢れ果て、すべ悪く成りて活た機を用ふる者なし、皆死漢許り也。佛道には活漢とて活た機を用ふる事也。是を知ず、殊勝になり柔和になり沈み入りて佛法と思へり。或は悟りたる杯とさもなき事を鼻に上げ、狂ひありく者多し。只我は殊勝げな事をも悟りげた事をも知らず、十二時中浮ぶ心を以て萬事に勝事許り用ふる也。何れも二王不動の堅固の機を受、修し行じて惡業煩惱を滅すべしと自ら眼をすへ、拳を握り齒ぎしりして曰く、キツ



ト張懸つて守る時何にても面を出す者なし。始終此の勇猛の機一つを以て修行は成就する也。別に入事なし。何たる行業にてもヌケガラに成りてせば用に立つべからず、強く眼を著けて禪定の機を修すべしと也。

正三は古人の語句を藉りて説く事が嫌である。彼の言句は徹頭徹尾、自家の胸襟から流出する。此の一段も、惠中の強靱な文章によつて、初心の者に呼びかける物凄い權幕が現はれてゐるが、——自ら眼をすへ拳を握り齒ぎしりして——と正三がぐつと示したその態度には、どうしてもかうしても、かくやらせなければならぬ信念の溢れに烈しく打たれるものがある。正三は更に進んで、

此の勇猛の機一つを以て修行は成就する也——と繰返し勇猛の機を高調してゐるのである。『驢鞍橋』劈頭の——近年佛法に勇猛堅固の大威勢有るといふ事を唱へ失へり——の一句に續いての此の勇猛の機と云ふ言葉は、特に正三老人が七十の老軀を提げて三州石平山から江戸に出て、徧く人心に植ゑつけんとした所の一句であつたのである。

一方時代は寛文から元祿へかけての戦後の泰平、そこには徳川の利己的政策も加はつてゐたであらうが、所謂文化爛熟の現出への途上であつた。宗教界も、亦、此の趨勢に従つ

て、僧侶が如何に墮落したかは、前に掲げた若僧の風俗に見ても明らかである。且つ又、キリスト教の外柔内剛の教化の感染もあつたであらう。宗教は又、武士・堂上の人々のものでなく、眞に民衆のものたらんとする時でもあつた。たゞ此の時代の風潮に追隨する僧侶達が柔和となり、殊勝氣を装つた事も想見される。根本第一義の探求は疎かとなり、徒らに習俗の甘心を買はんとするに急で、佛教墮落の氣運の萌されたるを認める時、正三の唱へる勇猛心の三字は、彼自身にあつては全く内面的な、第一義探求への唯一の方法を示すものであつたとは云へ、我々には、何か當時の外廓に對する警醒の響がそれに伴ふ感じがするのである。

私は正三の唱へる勇猛の機に就て考察するに當つて、それを唱へた當時の彼の生活やその態度を想察して見たいのである。佛法に勇猛堅固の大威勢を失つた事を憂へる正三は、彼の許に來る求道者に對しても、亦自己自身に對しても、只管に、土となつて修行しろ、我が禪は土禪なりと云つてゐる。正三の謂ふ所の土とは、全く土そのもので、一切の裝飾もなく、佛法者らしき振舞もなく、たゞ土となり切つて行く事である。

佛教に説く大地は堅固不動である。然も淨穢一切のものを包含して取捨しない。そして



一切を成育してその成果に執着しないのである。正三の態度も亦斯くの如くであつた。彼は若年にして求道の心切であつた。戦場にあつては、胴中を突き抜かれて死なん死なん、と鍛錬した。それだけに、彼の持つ勇氣は感受性の強き結果であり、我武者羅の勇氣ではないのである。故に正三自身も、死する事を何とも思はぬ人は業の強き人なり、と云つてゐる。死は何人も一番いやなものである。一番いやなものを、いやなものとして痛感して克服して行く所に、眞に生死超脱の意味が現はれて來るのである。古來の英雄豪傑と云はれた人々は、恐らく人一倍の感受性を具へてゐた人々と思ふ、頭山満翁なども、若くして自決を欲して後參禪した。南洲も薩摩灣に飛込んだのである。信長は、下天の中にくらぶれば、と諺ひ、死なうは一じやう、と眼を据ゑたのである。蓮如上人が、佛教を好む人は驚き易きなり、ととなへた意味は之に他ならないと思はれる。されば正三も勇猛の機を唱へる佛法を、我が佛法は臆病佛法なり、ととなへてゐるのである。正三が如何に感受性の鋭い、神經の強い人であつたかは、彼の著書を見れば明らかに窺はれる。豊臣亡びて徳川興隆したとは云へ、彼の前半生は明らかに兵馬倥傯の時代であつたのである。その中にあつて、經典、祖録、物語、隨筆、謠曲等をも讀破してゐる。それ

は彼の數ある著書に、各々その著の目的に隨つて、特殊の表現法を用ひてゐる事でも明かである。初心の出家に、求道の者の段階を示す『釐の草分』に、佛道修行に趣く人は、淺きより深きに入り、釐の草を分けて頂上に登るべし、修業未熟にして、向上に至る事難し。と云ふ風に如何にも禪者らしき筆使ひであり、士農工商に道を説いた『四民徳用』は、士農工商の各階層に因縁によつてその階層に生活する事を辨へさせ、佛法世法の二つに非ざる事を諄々と説いてゐるのである。『二人比丘尼因果物語』は已に前にも掲げた如く、一つは優に哀れを催す姿であり、一つは何人にも判り易き、俗に碎けた文章である。正三の文學的才能は、専らそれに携はれば、優に一家を爲し得たであらうとも思はれる。然るに江戸に出てからの正三の言説には、それ等の學も才も感受性も鋭い神經も、一切影を潜めてしまつてゐる。正三は自ら云ふ如く好き佛法者と云はれる事が嫌ひである。然しそれは強て街ふ所の偽悪でもない。たゞ彼は一切の名聞利養を斥けて、土となり切つてゐたのである。然も彼は、その土となり切るにも勇猛心を以て行へと云ふ。そしてその行つて成り得た限りに於て、人々の個性が、各自の職位、藝能の上に發露して遍き事を彼



は冀求するのである。それが正三の所謂、佛法世法の二つなき點であり、現れては活きた機を用ふる活漢になるのである。

再び正三の態度に戻つて云ふが、彼のその理智、才能、鋭い神經を打捨て、了心庵の一室に黙々として坐り、彼の前に現れる有象無象に對して、一見してその心を洞察し、而も何の飾りもヘンテツもない言葉を以て教化してゐる態度を思ふと、眞に土その物の感じを受けて慄然とするのである。

彼は、全く己を捨て、名聞利養を捨て、捨てたとも云はぬ人である。南洲は、金もいらぬ、名もいらぬ、命もいらぬ人ならぬ、と云つたが、正三はいらぬとも云はないのである。彼は全くいらぬ人になり切つてしまつてゐるのである。

鈴木正三を書かうと思ひ、時々筆を止めて瞑目して正三の此の態度に思ひ入ると、呼吸の忙しくなる事を感じるのである。何と説明も出来ないが、己に一切を抛ち盡した人の姿に、何とも力及ばぬ感じが、ひしくと身に迫るのである。これは恐らく私の心身に深く喰ひ入つてゐる名聞利養と煩惱妄想が、離脱を厭ふ悲しみであるとも思はれる。

ツアラツストラは、此の山上の空氣は餘りに冷かに厳しければ、汝等呼吸する事能はさ

るべし、と云ふやうな事を云つてゐた。誠に哲人の世界の空氣は、我々風下の者には呼吸すべく餘りに厳しく冷かに感じられる。然しその呼吸に堪へ得た時に、初めて歴史に於ける聖餐に列る事が出来るのである。然しその正三も、彼自身としては自己の境地に慚らざる限りを常に嘆息してゐるのである。その點は、古來の禪家の人々が、大死一番、大我爆發、大活現成して、ゆるぎなき地位に到達してゐるかの口吻を發してゐるのは甚だ類を異にしてゐるのである。

勿論如何なる傑れた人と雖も、彼自身としては彼自身への不満を持つのが當然である。それがなければ傑人ではないであらう。正三も我が一生の修行は大方仕終せたと云ふと共に、生々に世々を代へてもせめては普化ほどの境地になりたい、と自己を鞭打つてゐる。そこに正三の無限の向上がある。佛法に行止りはないのである。萬里一條鐵である。然も正三は、彼自身は己に土と成り切り、己は抛ち切つてゐるのであるが、たゞ此の土と成り切る佛法を以つて、社會を淨化し國家を興隆せしめたい、といふ烈々たる大念願を胸に抱いてゐたのである。そこに正三の土禪の獨異の面目があり、佛法の怨靈となり化けて出てなりとも、との無縁の執着があり、勇猛の機に益々光を放つて來るのである。



## 破生死

然らばその勇猛の機は如何にして起す事を得るか、と云ふのに對して、正三は『博山禪警語』の提唱に於て要を示してゐる。

『博山禪警語』には、

『工夫を做すには最初に箇の破生死の心を發する事堅硬にして、世界身心悉く是れ假縁にして、實の主宰者無しと看破せん事を要す。若し本具底の大理を發明せざるときは、生死の心破せず。生死の心既に破せず、無常の殺鬼念々停まらず、却て如何が排遣せん。此の一念を持つて門を敲く瓦子と作して、烈火炎中に坐在して出るを求るが如くに相似たらば、亂に一步を行ずる事を得ず。一步を停止する事を得ず、別に一念を生ずる事を得ず、別人の救を望む事を得ず、げ麼の時に當つて只だ須く猛火を顧みず、人の救を望まず、別念を生ぜず、肯つて暫止せず、往き前んで直ちに奔るべし、奔り得て出でば是れ好手ならん。

工夫を做すは貴むらくは疑情を起すにあり。何をか疑情と云ふ。もし生の何より來ると知らざれば、來處を疑はざるを得ず。死して何くに去ると知らざれば、去處を疑はざるを得ず。生死の關竅破せざれば、疑情頓に發して、眉睫上に結在して放すれども亦下らず、追へども亦去らず』

禪警の文章はまだ續くのであるが、正三は此の書は讀物に非ず、如是を用ひよと云ふのであるから、之れ以上立入る事は無用だ、と云つてゐる。

そして、修行と云ふのは此の破生死の心を起す事一つである。たゞ此の心一つ、それは丁度、ぼうくと燃える火に圍まれて、驀直に突破して出るを求むる如き心を以て、切に念々行ふばかりだ。と云つてゐる。——誠に我々は常住此の煩惱妄想の猛火に身を圍まれて悲鳴を擧げてゐるのである。然しそれも、眞實生死の問題に當面しなければ、煩惱が身を苦しめる猛火である事は判らないのである。寧ろ煩惱を愛撫し執著してゐるのである。然し一度び生死の問題を心中に堅く立て、當面すれば、當然止み難き疑情が起つて來る。何れより來て何れに去るか、知慮分別の解釋の及び難い疑情が胸中に介在して、はたいても落ちず、追つても逃げない。——此の胸の中にじつとさし張つてゐる機、此の機一つを



以て修行し修行して行くべきである。と正三は説いてゐる。

そして此の疑情、最初は生死の當體を究めんと欲して生死に當面するのであるが、やがてはそれが胸中に介在してじつとさし張つたものとなつてしまふ。それがやがて仰いで天を見ても天を見ず、俯して大地に向つても大地を見ず、通身一箇の疑情となり切つた所を、疑團と云ふのである。斯く成り果てゝは、我が已に心身を擧げての疑團である。逃げても退くも、追ふも捨てるも出来ない境地である。未だ徹底して生死そのものになり切つてゐるのではないが、生死その物によつて我が心身は満たされ切つてゐるのである。形なき生死の一念の一念に満たされば、敢て作爲して解決を努めると云ふよりも、自ら生死の一念にぶつからざるを得なくなつて来て、心は生死に張り切る形なき闘争である。

正三は、此の心一度び起らずして、何を以て自性に契んや、我れは此の心を、勇猛の機と名く。——と云ひ、此の機を得れば何たる事に逢つても種を失はず、萬事に自由也、と説いてゐる。

我々から云へば反省の反省である。我々が一度び眼を内に向けた時、初めてそこに現れるものは、我々の持つ煩惱であり妄想である。誠に烈火炎中に在るが如くに、煩惱の炎は

燃え安念の煙は燻つてゐる。が、却つて如何が排遣せんや、此の煩惱妄想これ何物ぞ、と相對して進めば、遂には生死の根元と相對するに到るのである。即ち、未だ生死に徹した境地ではないが、寸時も生死を離れぬ境地である。形なき對象ではあるが一分一秒も心を離れず、生死と當面して張り切つた境地である。

博山は、その狀を形容して、要緊の失物を覓むるが如くに、と云つてゐるが、ある僧が、失ひ物を覓むるが如くにと云へば即ち疑團に執著する事ではないか、と問うたのに對して、正三は、疑團は虚空無體也、と答へてゐる。

茲に我々は、常に謂ふ所の生死と、眞實生死に當面しての疑團との相違を明かに見る事を得るのである。我々が日常、僅少の物をも得て喜び失つて憂ひ、會つて樂み別れて悲んでゐるのが、即ち生死に執著してゐるのである。我々は又、事に當つて無心に行ふ事は仲出來ない。が白隠禪師は又、動中の工夫とは珠數玉を貫く絲の如くあれと云ふのではない、反つて一つ一つの珠に處しては珠になつて行け、と云ふのだとも説いてゐる。

正三は分別仕置無用と云ふ。對所した物その物に當つて、その物に即して行けと云ふのである。



然るに我々は、生に處しては死を想ひ、死を想ふては生に執してゐるのである。事實我は、何か用事が出来てくれれば坐禪をしなければならんと思ひ、坐禪をすれば何かと生計が心に懸かる。即ち、生に處しては死を想ひ、死を想うては生を執著顧慮してゐるのである。つまり生きてはつきり生くるのでもなく、死して徹底死に切るでもなき半死半生の状態なのである。即ち顛倒無想であり、古人の所謂、生や全機現、死や全機現の對蹠的な存在である所のこれが、生死に執著した當體なのだ。

然し眞實生死の二字をとつて、深く究め去り究め来れば、元來生死に形はないのであるから、たゞ通身これ一箇の疑團とならざるを得なくなつて来るべきは當然の歸結である。

正三以後、白隠、東嶺の二禪師も、常に大疑團を起すべき事の肝要を、口の酸くなるほど説いてゐるが、疑團の當體に對しては、何の示す所もないのである。或ひは之を説くのは老婆親切として斥けたものかも知れない。然し私は正三老人によつて、これが疑團であつたのだ、と教へられた事を喜ぶ者である。結局自己の未熟を暴すだけに終るであらうが、現實の私がかあればこれ亦止むを得ない所である。大疑團とは虚空無體と心に決定して進むだけである。

勇猛の機とは、此處に生じた端的である。従つて世間の所謂勇ましさと、猛々しさとも、全く類を異にしてゐる。その根底は己に打ち克つ所にあるが、所謂克己とも異つてゐるのである。此の勇猛の心を體として、物に打ち勝つ所を浮ぶ心と説き、更に此の浮ぶ心を以て萬事に勝つ事ばかりに用ひるのだ、と正三は述べてゐる。之れは全く正三が唱へ出した所の眞に獨特の説明の方法である。

『四民徳用』の中に示された此の二つの心の姿を引いて見る。

——修行の道千差萬別なりと云へども、肝要は唯だ身を思ふ念を退治するの外なし。苦の根源は、己れ己れを思ふ一念なり。此の如きなりと知るは理なり。此の理を知つて力を出し、眞實勇猛の心を以て此の一念を滅却するは、偏に義のなす所なり。理なき人は生死のきづなを切る事あたはず。強く眼を着くるべし。然れば凡夫心に、物に勝つて浮ぶ心あり、物に負けて沈む心あり。浮ぶ心を用ひるは佛界に入る門なり、沈む心を用ひるは獄中に入る道なり。専ら出離の願力を以て晝夜浮ぶ心を守るべし。

物に勝つて浮ぶ心の類、勇猛の心を體とす。

一、生死を守る心 二、恩を知る心 三、一陣に進む心 四、因果の理を知る心 五、



幻化無常を觀する心 六、此の身の不淨を感じる心 七、光陰を惜む心 八、三寶を信仰する心 九、此の身を主君に抛つ心 十、自己を守る心 十一、捨身を守る心 十二、自己の非を知る心 十三、貴人主君の前に居する心 十四、仁義を守る心 十五、佛語祖語に眼を着する心 十六、慈悲正直の心 十七、一大事因縁を思ふ心、

此の如くの心は、勇猛堅固の心より出る故に、諸々の執着を離れ、物に勝つて浮ぶ心なり。(下略)

物に負けて沈む心の類、

- 一、己れを守つて心をぬかす油斷の心 二、遊山活計歡樂の心 三、義理を知らざる心 四、因果の理を知らざる心 五、無常幻化を知らざる心 六、名聞利養を思ふ心 七、花美奢心 八、狐疑不信の心 九、物にすぎ好み一切着の心 十、怯弱にして勇のなき心、 十一、慳貪無慈悲の心、十二、他は是非を思ふ心 十三、我執自慢の心 十四、愛念嫉妬の心 十五、恩を知らざる心 十六、誑誑誑曲の心 十七、生死を忘るゝ心、 又喜怒憂思悲恐驚の七情より萬病發るといへり。此の心は黒闇の中より出る心にして、品々限りなしといへども、右の旨を以て察すべし。

正三自身も、品々限りなし云々と云つてゐる如く、浮ぶ心も沈む心もこれに盡きてゐるのではないが、之によつて大方は知る事が出来るのである。要するに浮ぶ心とは、諸の執着を離れ、物に勝つて浮ぶ所を指すのであり、沈む心とは之に反して、物に執着するに盡きるのである。

然し、普通の状態で、浮ぶ心、沈む心と云ふ言葉を心に浮べてこれに對すると、全く反對な感じを受けはしないだらうか。正三自身も、最初は物に勝つて浮ぶ心とばかり書いたのであるが、錯り用ふる人あるが故に勇猛を體とす、と後から書添へたと云つてゐる位である。

誠に我々の云ふ浮ぶ心、浮きくした氣持などは、快樂の上に生ずる所を指すのである。最も難のない例を引いて見れば、人々は野球のボールがカツと鳴つて飛ぶ瞬間を朗かだと喜んでゐる。然し眞實それが朗かであり彼の心もボールと共に一切の執着を離れて、中天高く飛翔したかどうか。少し考へれば、寧ろ放心に近い物を感じるのである。一般の人は之を浮んだ心と感じてゐるのである。

また反對に、禪堂に籠つて單に上り、默然として坐つてゐれば、打沈んだ態度と云ふで



あらう、批判の眼の焦點が、全く顛倒してゐるのである。此所に佛教の生活價値に對する轉換があり、正三は着實にそれを實行に移さうと試みてゐるのである。

已に禪にあつては、人情を絶する、と云ふ事をしばく云ふ。博山はこれを中正勁挺と説き、正三は自己を守る位、と云つてゐるが、要するに張り詰めた勇猛心の持續である。そしてそれは、俳諧の寂とも違へば、文學の低徊でもなき峻嚴の境地である。事實我々は、生死にしかと當面して、此の煩惱と一息、一息に別るゝ状態になると、最後には、自己の捨離せんとした煩惱に別れを告ぐる苦惱に堪へ難きを覺えて、愕然とする事もしばしばである。それほどに、煩惱のきづなは強く、斷ち切つて始めて到達する生死の疑團、即ち虚空無體の境は、峻嚴極りなきものである。それ故にこそ、この無體を體得した人の前には、我々は止み難き畏怖をすら感ずるのかも知れないのである。

大地は黙々として一切を生育するが、又よく一切を破壊する。水も火も風も同じである。その根源に到つては、我々の人情の甘さを入れない。たゞ因縁の到來のまゝに動靜するばかりである。此の人情の介在を許さぬ所に當面する事を我々は恐れるのだ。そしてその中間に妥協する所に眞實の恩愛ならざる恩愛が生れ、遂には偽裝されたる恩愛までもが

現れて來るのである。

禪は亂世に勃興すると云はれる。然し禪は亂世を好むものではない。寧ろ常に幽寂を求めてゐるのがその本質である。然し亂世に當つて禪を求めると云ふ心は、人々が遂にそのぎりぐりの、動かし難く、動顛せざる何物かを把握しようとして云ふ努力の現はれである。人の命の頼りなさを、亂世ほどに示すものはない。

現在にあつても、ドイツ軍進撃の跡を視察した記者は、道の傍の木の枝にフランス兵の身體が半分ぶら下つてゐたと報告してゐる。此の死せる兵士も、生前は如何に深き心を人生探求への道に潜めた者であつたかどうかは判らない。たゞ人間の勝手な想念とは無關心に働く業力が、人情も假借もなく彼を半分に吹き飛ばしたゞけである。此所に到つて言句の出る所を知らず、出でても間に合はないのである。たゞ生死そのものを究め去らない限り、安定の地位は得られないのだ。

そこで人々は種々に探求する。生死の關頭に立つて自在たらん事を欲する。周圍に迫る死の恐怖が彼を驅り立て、心身を擧げて生死に當面させるのである。眞實を云へば、我は戦争があつてもなくつても、念々に刻々に、生死を反覆してゐるのであるが、たゞ我



我はそれに心附かなかつたゞけである。そして多くの人々の死を見聞する事によつて、始めて己に立ち還つたのである。此所に到つては、正三の説く沈む心である所の、己を忘れて心をぬかす油断の心や、遊山活計歡樂の心や、花美奢心は存在を許されなくなつて來るのである。そこには、生死を守る心、恩を知る心、一陣に進む心、幻化無常を觀する心、光陰を惜む心、此の身を主君に抛つ心等とがなければならなくなつて來るのである。然しこれは、物に勝つて浮ぶ心と云つても單なる手段ではないのである。斯くなり切る事が唯一の目的であり、そこに佛法の勇猛堅固の大威勢が現成されるのである。

今、皇國は未曾有の難關に撞着してをり、世界の大轉換期に當面してゐる秋である。國民は一切の困苦缺乏に堪へ忍んで興亞の聖業を貫遂しなければならぬ、と我々は常に聞かされる。そしてそれには、聖業成就の曉には國土安定し平和出現して、と云ふ迄はよいが、現在の困苦缺乏が一時に解放されて、物資豐滿の世界に悠々と遊樂し得る事を望むが如き響のあるのは、誠にどうも變である。

東西の歴史を通じての、戦後の人心の弛緩、所謂文化の爛熟、飽滿の積廢を期待しない限り、現在は手段でなく現在の中に目的があるべきである。

それは丁度、修行の雲水が僧堂にある期間ゐる中は、貧寒たる衣食に甘んじ、嚴冬に火氣を斷ち、三伏に網代笠に蒸されながらも餘儀なく修業に携はるが、それは或る期間の後資格を得れば一箇寺の住職にもなられ、或はまた貫主管長にもなれて、一般普通の社會の生活者よりは豊富な生活を營み得るが故に、此の期間の枯淡簡素を忍ぶのだ、と云ふのと同じ道筋となる。僧堂の簡素の生活は、後に來るべき飽滿の生活を期待して行ふものは斷じてないのである。

あの簡素の生活に徹し、作務托鉢の勞務を行じ盡して、己にそれ等が忍苦の念を離れた境地を望むが故に行するのである。が然し、事實は多く反對の現象を呈してゐる。百丈の一日作さざればは餘りにも有名であるが……

道元禪師は、自家の生活の枯淡は云ふまでもなく、酌底残水に物恩の教へを殘し、楊岐、大梅、雪峰の行履を常に讚へ、機峰一邊の人の如く云はるゝ巖頭は谿間に蔬菜を拾ひ、正三老人も病のための藥餌は餘儀なく行つたが、爾來潔齋、生活の簡素のほどは、説話の筋々にも無言の中に現はれてゐて、『因果物語』の序を書いた何人とも知れぬ後人の筆によつて證明されてゐるのである。



正三は、又いたく古人の普化を渴仰し、せめて幾度か世を代へても普化ほどの機にはな  
りたしと、度々洩らしてゐるのであるが、普化の機峰の鋭さは、臨濟を小便小僧とよび、  
その面前で食膳を踏倒して、佛法に何の亂暴の沙汰がある、と臨濟に舌をまかしめたほど  
であるが、平素は町に食を乞ひ、院に歸つては堂前で生野菜を嚙んでゐた、と云ふほどの  
おとなしさである。

すべて之等の人々は、已に六欲の世界を超越して自在の境地に在るのであるが、我々が  
浮ぶ心を以て物に勝つ事を學ぶのも目的は此所にあるのであるし、僧堂簡素の生活も、忍  
んで簡素に打克つて、簡素の中に自在であるべきが爲めなのである。即ち、或る期間を通  
じて忍ぶべきではなくして、現在に最善の道が示されてゐるのである。

飽くなき物欲の追求のある所に物質の過剰が生じ、過剰は市場の争奪となり、投資とな  
り、恐慌となり、社會不安となり、國際戦争となるの過程は、已に幾度か繰返されてゐ  
る。已に日本が國家的捨身の態度となり、私心を擲つて聖業に邁進するのが現在の姿であ  
る限り、現在の生活こそ最もよき生活であり、難關克服の大道こそ將來にあつても今日に  
變らず強調さるべきである。之れに對する誤は、現在にあつて現れても、將來は正に失は

るべきである。それは丁度、修行未熟の雲水が僧堂にある中こそ誤を犯しても、すでに  
指導の地位にある人は、一切を日常に現成して誤のなかるべきは、古人が之を證してゐ  
るのである。

正三出家の當時から、爾後教化の時代を通して、世は正に戦後の泰平に酔ひ、所謂文化  
の爛熟した時であつた。そこに現はれた藝術は、後代からは爛熟した文化に咲く華などと  
云はれてゐるが、近頃に到つて如是閑氏などは、此の文化の本質に對して懷疑の態度を示  
してゐるのである。

然し、正三に云はせれば、これぞ、已を忘れて心をぬかす油斷の心、と云ふであらう。  
我々箇々の短き生代の中に於ても、此の誤りは幾度か繰返す。たゞ賢明な人のみあつて、  
一代を通じて浮ぶ心を以て物に勝ちつゝ解脱の道に邁進する。今日物質が缺乏してゐると  
云はれながらも、我々は聖業に携はりつゝあるのである。外界の混亂が平定した後は、そ  
の力を擧げて、より高き精神文化の建設へ努力すべきではあるまいか。たゞそのみが、  
我々の持つ唯一の目的なのである。解脱の道に邁進した古人は、個我を没して全體に歸す  
べき道を已に我々に示してゐる。それ故に我々は、それ等の人々を古佛と仰ぎ、佛祖の高



恩に感謝して、その道に従ふべく努めてゐるのである。黄檗の禮拜に深く心を打たるゝ所以である。誠に人間が自由の天地に翱翔すると云ふ事は、他からの束縛を解くのではなくして、自己自らの縛めを解いて法界に歸入する所に現成される事を、佛祖によつて示されたからである。

そして國民擧つて此の浮ぶ心の現成に努むる所に、國家としての浮ぶ心が顯現され、ただそれのみに依つて、聖業の本志は貫徹さるべきであらう。前大戦當時のドイツのピラには、静寂の底から湧く勇氣（適確な記憶でない）と云ふ言葉があつたと云ふ事が、先頃何かに書かれてあつたが、安禪場裏に向つて坐斷せざれば、這裡に到つて茫然たる事あらん、とは禪家の言である。何れも浮ぶ心の働きを示してゐるのである。

正三は此の、物に勝つて浮ぶ心、別の言葉で言へば勇猛の機一つを養ふ事を以て、一代の教化を押し通した。然も彼自身は、たゞ土と成り切らん努力に終始してゐる。而もその土の底から化けて出てなると、怨讐となつても、佛法を以て世を治めんとする烈々たる氣魄が、迸り出てゐるのである。單一無二の言を以て押した所は、俱胝一指頭の禪の如く、土と成り切る端的に、一世教化の大願を包蔵してゐる所に、單純の示す無限の變化が

見られるのである。勿論正三の教化の方法は、今日から見れば、認識不足の點もある。然したゞその氣魄が、彼をして仁王禪を唱へ出さしめ、心學の鼻祖とも云はるゝ働きを隠々の中に培はしめたものであらう。我々は彼の教化の方法を見たいと思ふ。

正三は勇猛堅固の大威勢を専念高調した事は已に説いた。高調といふよりも、彼自身が勇猛堅固の大威勢の中に生き切つた、といふ方が正しいかも知れない。然らばこの勇猛堅固の大威勢は何によつて養はれるか、と云ふ間に對して彼は、活機、浮ぶ心を以て萬事に勝つ事、仁王の堅固の機を以て修す、等々と語つてゐる。

機といふ言句が、古來禪家によつて如何に尊ばれて來たかは改めて説明する迄もない。世尊拈華、迦葉微笑、洞山麻三斤、も機といへば云へるかも知れない。が、我々の斯く云ふは、結局憶測である。機そのものとはまるで無干渉に、たゞ之んなものだらう、と思ふだけである。擊石火、閃電光の如くだの、聲前の一句だの、斯の如き語句に親しみ甘え、之れを口ずさむ事によつて機に觸れ、或ひは機を體得したやうに錯覺して陶醉する事もしばしばである。

私自身もさうであり、又斯の如き人にもしばしば接する。曾て倉田百三君の述懐に、座



談會などして、熱心に語り合つてゐると、その中に、あゝさういふ事は修證義にありますな、などと簡単に片付けて、本人も判り切つた顔をする人が往々ある、と書かれたのを読んで、實に自ら顧ると共に、誠に變ないやあな氣持にもなつたのであつた。何にしてもやり切れないのは此の種の物識である。禪が難入のものであるといふと、古人の言句によつて、片付けてしまはうとするのである。其の人の人生は斯く簡単に片附くかも知れないが、更にいけないのは、一言一句の體得味得に精根を盡す者を冷笑する如き態度に出るのは、終にはその修行者の前途を阻む結果にすら陥らしむるに到る事である。

機、とははずみであるか、心氣滿ちて發せざる位を云ふのか、發する途端を云ふのか、解釋は色々にあつて、古來語り傳へられた所も多いであらう。然し正三にあつては、彼自身精根を盡して體得した所の前人未踏の境地なのである。それ故に彼は、自己の所信が、果して古人の見解に合致するかどうか知れないとしばしば語つてゐる。佛像に接しては佛像の機を受けよ、といふが如きも、古人は云つたかどうか判らない。併しながら自分にあつては、之れが最もかなつてゐると斷言する。又、大勇猛といふ事に對しても、彼の晩年、即ち遷化の一年前の或夜一僧が來て、この頃支那から渡來した『諸經日誦』といふ

書物があつて日々の勤行に唱ふる由であるが、その中に八十八の佛名があり、大強精進勇猛佛、精進軍佛、精進喜佛などといふ御名がありますと物語つた。正三は此の時已に臥床に入つてゐたのであらう。師聞あえず起上つて、と慧中は記してゐる。そして、

『さて、不思議な佛名哉。自分はかねくかゝる佛名あるべき筈と信じてゐたが、或は佛はお説きにならなかつたのか、もしくは自分の修行の道が違つたのかと思ふ事もあつたが、兎にも角にも此の筋で進むより他になしと無理にも修して今に及んで來たが、今この佛名によつていよく御佛に親くなつた。此の佛こそ我法の證據に出でましたのだ』

と語つた。その後正三の下に出入する人々がその名號を請ふと、以前彌陀の名號を書く場合には斷じて書判を肯じなかつた正三が、『此の御佛の證據にとなら、自分は慥かに證據にならう』と進んで書判もすれば、或は中央に南無大強精進勇猛佛と書いてから、精進軍佛も精進喜佛も何れも自分の心得た所である、と云ひながら、左右に書き添へて與へたと云ふ事である。正三が此の佛名に接した際の法悦が如何に甚深であつたか、我々にも遠く推測される所である。誠に十方三世の諸佛から親く授記された想ひもしたであらう。惠中は此の一段の中に、師大いに悦び給ふ也、と記してゐる。大いに悦ぶと云ふ字のあるのは



『驢鞍橋』全卷を通じてたゞ此所一つだけである。

若き正三が、法を求むる熱心から、如何に内外の典籍を涉獵したかは、彼の前著に徴して明かである。古來の多くの祖師もさうであつた。法然、親鸞の兩上人も幾度か大藏經を閲し、道元禪師もさうであつた。夢窓國師と云ひ白隱禪師と云ひ、悉く學古今に亘つてゐたが、一朝それ等の全部を放棄する機會に撞着したのである。然る後に之等の諸祖は、自在にそれを驅使したのである。が正三に到つてはそれ等を驅使する事すら忘却した感じを與へられる。或時期以後の彼は、一切を放下してたゞ土になる事に終始した。それ故彼は、よき法師、と看做される事すら嫌うてゐる。一切を放下した後の彼は、たゞ自己の機根にかなひ、自己の中から出發するだけのものを以て作用した。だから彼は古人の語録に對しても、

『その多くはまあ、經文祖錄（更に古の）によつて書き残されたものゝやうで、話は判つてゐるが、強く修行したあとゝいふものが滲んでゐない』と片附けてゐる。斯く云ふ彼は甚だ高慢のやうでもあるが、然し自己に對しては、

『言句に徹するといふ事はよい事である。然し自分などは、たゞ死ぬ事、それより外に要

はない。これが一番自分の性になつてゐる』

と、敢て謙讓するでもなく、たゞ自己は自己の機根のまゝをぶちまけてゐる。増上慢にもならなければ卑下もしない。はつきりと自己を見詰め、自己の境地をさらさらと打出して行くのである。かくて正三の禪は全く正三獨特の風貌を呈して来る。時には經文も語録も忘れ果てた趣である。正三は又、念佛をすゝめてゐる。然し彼の唱道する念佛は、後に到つて白隱によつて手酷く攻撃された如き、所謂禪淨一致の二段修行ではないのである。禪淨派の説く所は、禪によつて内を修し、念佛によつて彌陀の救を藉り、虎に翼と云つたやうな何とも煮え切らない、一向專念な所のない變なものである。然し正三の念佛には理窟はない、念佛の事は後にまた觸れるが、彼はたゞ強く念佛を唱へろ、と云ふだけである。念佛を以て煩惱に面出しさせぬ程強く唱へると云ふだけである。或人が正三の念佛に對して、稍攻撃めいた事を云ふと、『わしは放下着、放下着、といふよりも、南無阿彌陀佛、と唱へる方が唱へ好いから南無阿彌陀佛と云ふだけで、どちらにしても放下着だ』と答へてゐる。念佛に嚙りついてゐるのではないのである。それ故に武士には謠を歌へと云ふ。すべてが機を養ふ爲である。



然らば正三の云ふ機とは如何なるものかと云へば、或時彼は身體をねちつてびたりと槍をつけ、じり／＼と詰める勢を示して、

『機といふのはかゝるものだ。武藝者は太刀を取つた時は機が充ちてゐるが、終れば直ちに機が抜ける。佛法修行を爲す者は、此の機を常に抜かさぬやうにする事だ』また、

『修行と云ふは勇猛の機一つだ。此の機を修し出すには眼を据ゑて死習ふより外にない、此の糞袋を仇にしてひた責めに責めるのみ』

『後世を願ふとは、此の糞袋を何とも思はず打捨ること丈け仕習ふよりほかに佛法を知らぬ』と云ふ。

機を養ふとは、要するに一切の執着繫縛を離脱する道である。即ち純一無雜たるの方法である。臨濟は、孤峯獨宿、一食卯齋、長坐不臥、六時行道皆な是れ造業底の人なり。乃至頭目髓腦國城妻子象馬七珍盡く皆な捨施す。是の如く等の思皆な是れ心身を苦しむるが故に還つて苦果を招く。如かず無事にして純一無雜ならんには、と云つてゐる。身心脱落、脱落身心と云ふも純一無雜の事である。又道元禪師は、三祖大師『信心銘』中の至道無難、唯嫌揀擇とは、金翅王鳥は生龍に非ざれば食はず、なりと云つてをられる。

機を養ふ、とは唯だ是れ此の爲めであり、又此の爲めに進む所の唯一の方法である、と正三は説くのである。然しそれはまた初心の修行者にあつては、殊に心して修して行くべき道であるが故に、彼は口を酸くして機會ある毎に之れを説く。と云ふのは、凡そ自ら進んで禪に入る程の者は、何よりも先づ悟りを欲する。大事了畢、大我爆發、無我の境、第一義諦、安樂の法門、等々と云ふが、結局悟りたいのである。現在自己を苦むる所の三毒の繫縛を棄脱して自由の天地に超出したいのである。その時に當つて、たとへ衆生無邊誓願度の利他的目的に出發する大根機の人と雖も、それがために此の小我の棄脱を欲しては精進には矢張り悟を求むる心が彼を推進してゐるのである。況や我々凡下の徒にあつては何より彼より、悟りたくつて堪らないのである。悟りたいが故にこそ苦痛を忍んで、他の一切の我慾を擲たんと努力するのである。我々は佛を求め、法を求め、悟りを求むる處から出發してゐる。此れが無かつたら、恐らく佛法に對して縁なき者として過ぎ去つたであらうと、自己に對してつく／＼考へる所である。

己に悟りを求むる心の誤りである事を知るのは、それよりも遙に後の段階である。佛を尊び、悟を憧憬する心の強い人間には、佛魔一棒に打殺すだの、佛と云ふも口の汚れなど



と云ふ語は、禪的なる一種のアイロニーとしか考へられないのである。つまらない自分の事を云はせて貰へば、私などは佛魔一棒に打殺すの言を、實に長い間、不可思議の語としてしか納得できなかったのである。更に悟を求むる事の誤りを知る、と悟りを否定した瞬間には、已にその否定に何かを期待してゐるのである。故に我々にあつては、否定から否定への連続である。かくするより他に道はないのである。

曾て誰だつたか相當の人が、否定を否定するなぞといふ語は話にならん、と云つたが、否定をも否定するのである。勿論こんな、否定の肯定の、と抽象的語句を弄してゐる時は、禪も佛法も遠く我々を去つてしまつてゐるであらう。それ故に、古人はそれを一句の中に全體を作用せしめた。禪家の語句が一見して矛盾し撞着し、時に或は混亂してゐるかの如くであるのも此れ故と私は考へる。誠に我々の生命は純一であると共に、矛盾撞着混亂の相を呈してゐる。矛盾撞着混亂に徹した時に、初めて純一無雜に當面し得るのではあるまいか。

若き時から、戰場に禪堂に、山中の獨宿に、律僧行脚と修行に修行し抜いた正三の説く所は、一言にして云へば簡単に死に切る事である。彼自身も已に名聞利養を離れ、坐に對

する執着の種々相として現はれる所の五慾も離脱して、六十一歳の時には眞實大死一番大活現成の境地も體得したが、何よりも自己に對して猥りに許さない彼が再び自己にとつて歸して、自己の大死を再検討した時に、そこに彼はまだ捨て切れぬ糞袋を秘藏する己れを發見したのである。

已に色氣も食氣も全く離れ、多くの人間の老年に及ぶば及ぶほど激烈となる所の名聞も利養も失せ切つてゐる事は、彼の生活が悉く之れを證明してゐる。その語る所にも、往年の求道の中に苦へられた知識の影も現れなければ、藝術を好んだ句も残してゐない。曾ては彼の生命であつたであらう武道すら、何のこだはりもなくなつてゐるのである。たゞ全くの土として、眼前に現はれる機に應じて作用してゐるのである。

凡そ紛飾のない言句と云つて、正三の言句ほど紛飾のないものはあるまい。斯くも己れを捨て切つてゐる所の彼が、猶ほ自ら秘藏してゐると云ふ所の糞袋とは何であるか。一切の慾を離れて残る所の生命、それこそ純一無雜のものとして我々は継りつきたいものであるが、彼は斷じて許さない。云ふ事が許されるならば、恐らく自己の生命を意識する事も彼には堪へ切れなかつたのであらう。生きる事も忘れ果てた生そのものの姿、正三はそれ



を古人普化の中に認めてゐたやうである。そして、

『佛境界までは到り得ずとも、世を代へてもせめて普化の境界までは達したい』と述懐し、或時は、

『自分は已に煩惱妄想をキツト睨みつけて面出しさせないやうになつてはゐるが、何としても此の身體が我物になつてゐて眞實の自由を得ない。然しこれも普化の境界を味得したので、まだく修行の足らないと云ふ事が判つたのだ』と普化の境界は味ひ得ても、自己に全顯することを得ず、されどもそれによつて反省させられた事を喜んでゐるのである。

然もこれも正三逝去の一年前である。恐るべき精進努力である。そしてある僧が、

『普化は佛境界にも達した人と承はつてをりますが、どうして教化の沙汰などないのでせうか』と問ふと、

『どうしてどうして、仲々サツサツとした活境界で教化も何もあるやうな機ではない。それは納にはよく判つてゐる』と答へてゐる。

その普化は、臨濟がある日僧堂の爐邊で、河陽、木塔の二長老と話をしながら、

『近頃普化は毎日街に出ては狂人ぢみた眞似をしてゐるさうだが、あれは本來凡なのか聖

なのか』と噂をしてゐる所へ、丁度普化が入つて來た。そこで臨濟がいきなり普化に、

『汝は是れ凡か是れ聖か』と云つた。すると、普化は、

『汝且く云へ、我れは是れ凡か是れ聖か』途端に臨濟が一喝を喰はしたが、普化は三人を指して、

『河陽はまあ新女房、木塔は婆の繰言、臨濟は小便小僧だが、それでも却つて片眼位は開いてゐる』と云つた。そこで臨濟が、

『此の野郎』と怒鳴りつけると、

『此の野郎、此の野郎』と云ひながら、普化はさつさと出て行つてしまつたさうである。或僧が正三に此の話について訊ねると、正三は、

『どうして、どうして、普化ほどの境界から見たら、臨濟は勿論その他のものなどまるで明盲に等しいだらう。大したものだ』と讚嘆してゐるのである。

これほどの境地に達するにも、正三はたゞ勇猛の機を養ふ事を以て一貫してゐる。然もそれは、初心者にあつては取り分け大切である事を主張するのである。が初心者はずたゞ悟りたい故に修行する。所が悟など云ふものは然る簡單に現前するものではないの



である。正三も見性の境地は尊ぶが、それと同時に見性を無上のものとする者を笑ひ、  
「悟りなど事々しく鼻にかけ歩く者あれど、それでもなきものなり」とお悟り自慢をこき下  
して、

「自分は悟りを知らない悟が好きだ」とも云つてゐる位であるから、悟を期待する修行  
は無論排斥する所である。そこで初心の修行者が、悟りを望む所から無理修行を敢てし  
て、それが爲に最も大切な機をすり減らして、その爲にアツカ呆然とした脱殻禪、つまり  
空気を吸い飯を喰ふと云ふだけで、死體同様の存在になつてしまつたり、或はまた熱心な  
修行もその方法を誤つて焦燥する結果、逆上して狂人となることを恐れ憐んでゐるもの  
である。

且つ又、未熟な先輩が己れに何等の力量なくして後進に接する結果、後輩が修行の途上  
少しく特異の状態を呈して來ると、先輩自身に判断の能力なく、猥りにそれを奇特な現象  
として取扱ふのである。『驢鞍橋』の中に一番多く現れてゐる例は、熱心な若き修行者がそ  
の肉身から光を放つといふ事である。これは現實に光を放つのか、或は修行するものが自  
己の中から光を放つ幻覺に陥つた結果なのか判らない。といふのは、現に正三その人の前

には斯る人間が現れて光明を示した事は一度もない。たゞ正三はかゝる話を人傳てに聞く  
毎に、——危い危い、修行の道を誤つた爲めに機をすり減らして光を見るのだ。又、それ  
を奇特の事としてほめたゝへる師匠は何としようもなき人かな、あはれその儘にしておい  
たらその若者は死ぬであらう——と嘆いてゐるが、その後果して若き修行者は、狂氣して  
死んだ、と彼に傳へられてゐるのである。

正三の法友女俊坊といふ律僧の弟子にもかうした者が出たが、其時正三はある方便を教  
へてそれを救つてゐる。が、實に危き限りである。形なき妄念妄想と取組んで夢中になつ  
てゐる中には、自らこちらの心身共に虚脱して、猥りに逆上するばかりである。更に此  
の時恐るべきは、例の臍下丹田、下腹部に力を入れると云ふ事である。秋非常時である近  
頃は、又、可成り無暗に腹の力、或は肚の力が唱へられる。眞實臍下丹田に力が充ちて、  
そこに全くの心身調和を爲し得れば、それは確に効果ある事であらう。白隠禪師が『夜船  
閑話』を説いたのは、恐らく當時の修行者が難透難解の公案に當面して、何とかこれに解  
決を與へたいと苦慮する餘り、分別思慮の解き得る事でない事をも打忘れて、只管にあれ  
やこれやと思念する。已に形なき妄念妄想との戦に、神經は衰へ尖り、肉體は力を失つ



てゐる際に、たゞ限りなき頭腦の勞働を繰り返す結果、逆上自殺等々の人々の出た事を憂へた爲とも想はれるのである。

併しながら、その『夜船閑話』に説く所の内觀、軟蘇の法の如きでも、なほ焦燥の念に驅られつつ行ふ時には、反つて逆上の逆効果を來す事すらあるのである。私の友人の一人はその爲に胃下垂となつて長く苦み、他の一人は全く逆上して、參謀本部の黒い箱から放射する無電が自分の頭にかゝつて來る、と途方もない事を云ひ乍ら歩いてゐる。またある男は、眼をつり上げて斯く語つた。——私はたしかに見性した。某師の室に入つてゐる時、即今如何？と訊かれたから、私は足裏空を履む、と答へた。實際、自分は一切を離れて空に浮ぶ感じだつた。すると流星に老師は、あゝよし／＼、今後は家で家業に勤みながら靜に坐るやうにしなさい、と云はれたと語つたのであつた。愚な私は、件の老師の慈悲心も知らずに、

『それは君幻覺だよ』と云つた。

『幻覺？ バカな、あんななんかに判らないのだ』彼の眼はぎら／＼光つた。然しそれは正三老人の説く果し眼とは全く逆に、凡そ心の安定を失つた者の現すいやな光であつ

た。凡そ人間が心身共に憔悴して狂氣の一步手前ともなれば、必ず特異の風貌を呈するに違ひない。且つ又、それが結果は如何ともあれ原因が法を求めるところにあれば、多少は俗を離れてもゐるであらう。無眼子な先輩は、喜んで法身の光が現れて來たのだなどゝおだて上げて、遂には狂人にまで追ひ込んでしまふのである。

正三はすべて之を、眞實の心なく、勇猛の機を失つた結果と認める。事實我々の日常生活の上に於てすらも、自己の心身の稍衰へてゐる場合には、一步家を踏出しても直ちにためらふ。友人を訪ねようと思つてすら、尙且つ彼の在否を考へて見る。事實何にもならぬ事であるのに、効果なき分別をすら働かせて見るのである。

正三の最も嫌ふ分別仕置とは此に到つて、我々の日常にあつては、先づ機の抜けた結果となつて來るのである。それ故に彼は當時由井正雪の企てが發覺失敗した事を聞くと、

『正雪忠彌などは分別仕置さへすれば、何でも成就すると考へての事であらうが、何がさて、天道に背いて事の成るべきやうがあるべきや』と一笑に附し、又、ある僧が、

『聞く所によれば信長は、軍法は敵にこそ學ばせたいものだと言うてをられたとの事であるし、又、權現様などもむつかしい軍立てなどはなさらず、只だ減多矢鱈に懸つて懸破ら



れたと云ふ事でありませんが、これが無分別と申すものでせうか」と訊ねた事があつた。  
『別に何と云ふ事はない、只だ勝つた機と云ふものだ』と正三は答へてゐる。我々の意識する遠謀深慮も正三の前には一顧の値打もないのである。遠謀深慮を越えた無分別、それは常任寸刻も忘れずに念々刻々、機を養ひ立て、行く所に、顯然として作用するものであり、そしてそれによつてこそ、我々の思慮分別を超えた、生死の一大事も諦め得るに到る事を説いてゐるのである。

今此所には正三が初心者に對した訓誡の言葉を引きいて見る。

——一日示して曰く、初心者は如何にしても眞實の起るやうにすべきである。眞實の起らない先に無理行などをして、強く坐禪などすべからず、無理に根機を出して荒行などすれば性疲れ、機減りて何の役にも立たずに果て終るものである。何人でも覺えのある事が、氣相の悪い時は心合も悪くなるものだ。修行と云ふは機を養ひ立てるに在る。古人は是を長養と云つた。だから決して機をへらすべきではない。近頃、無理な荒行などしたり、又、脱殻同然の坐禪をした結果、病が出たり氣のふれる者が尠くない。だから初心者はたゞ志を進めて眞實を起す事が肝要である——

と正三の所謂、眞實、志、等の事がだん／＼明かになるであらうが、此所でも略推察はつくと思ふ。釋尊もその修行の過程に於ては、無益の苦行に當面して遂に驕然と擲たれた事がある。我々もしば／＼寒中池の水に浸つたり、無理な斷食を行じて反つてたゞ／＼高慢の結果をつかんだ人を見てゐる。然し、お任せ、の一語を曲會して怠墮を無上の方法としてゐる人々は更に多い。眞實の精進は矢張至難の道である。

正三が彼の下に来る人々に、率直に何の飾りもなく語つた言葉は満ちて『驢鞍橋』となつて、千態萬様を示してゐる。辛辣なものあれば、眞實人の肺腑をつくものもあり、武家に農家に婦女子に、彼れたゞ彼の前に現はれたものに應じて説いてゐる。法とも云はず、佛とも云はない。中に一寸愉快なのは、或時因果破りの天邪鬼が現はれると正三は、『自分が人を打てば人も亦自分を打つ、此方が人によくすれば人も此方によくしてくれ。これは眼前の道理だ。其上、三時業報の因果歴然たる事は佛説に明かだが、然るにその佛説をも信じないと云ふお前は、佛様より上の近頃珍らしい人物だな』と云ふと、彼の

天邪鬼は、

『お経を誦んだら口が成佛するでせうか』と本分を發揮する。



『さうよな、先づ口丈でも成佛したが好い。總じて近頃の人間は、勤めは心にあつて實行にないなど云つてゐるが、これが第一の錯ちだ』と答へてゐるなどである。

然し私は、正三の面目を一番よく發揮してゐる二つの話を第一に引いておきたいと思ふ。その第一は先にも一寸引いたが、中に正三の自叙傳とも思はれる節さへある。讀む中に沁々とした感をさへ受けるものである。正三七十五歳の時の五月十九日、と日も明かに記されてゐる。旗本の子息が来て剃髪してくれと願ふと正三は、

『私は元來自分の家職を捨て、法を求めると云ふ事が嫌だ。殊に侍が坊主になるなどと云ふのは、カジケた心だ。修行の爲には奉公に過ぎたものはなく、出家などしたら却つて地獄を作るばかり、奉公即修行の事をよく心得て修行しなさい』と云つたが、已に思入つた若侍は、どうしても聞き入れないで、無理にも剃髪を乞ふのであつた。すると、

『それほどに思ひ込んだものなれば止むを得ない、お前の考へ次第である。自分の處で出家させる事は斷るから、どこへでも行つて出家したら好いであらう。然しあとくになつて決して後悔はしなざるな、それだけは云つておく。第一には御公儀から御穿鑿のあつた場合、何も言分をしてはならぬ事だ。たゞ自分は世間がいやになりましたから此の姿に

なりました。御法に觸れた點がありましたら何卒御成敗下されまし、と云つて出て、腹切る覺悟があるならば剃らるゝが好い。これが先づ一つ』

『次には出家をしても、人間は食つてゐなければならぬし着物も要る。草履鼻紙も使はなければなるまい。そこで年に三兩ほどの金は要るであらう。後先見ずに剃つてしまつてから、まごつてて餓鬼になつては駄目ぢや。と云つて、寺に入つて大切な施物を食つて暮すは義に背く、又、親類縁者がわづかな知行でかすくしに世間を渡る端をへすつて暮すなどは更に卑怯だ。此の點をよく考へて覺悟が出来たら剃るもよからう。何にしても世の中で自分ばかりが人の世話になつて暮す事は間違つてゐる。それより寧ろ此の身を主君に擲つて奉公專一の上に暮すが好いのだが、これをとつくと胸に入れての上で、まだ剃りたければ剃られたら好いだらう。後に到つて決して間違つてゐないぞ』

『所詮、法の爲に身を捨てる上は、何か困難に行き當る事もございませう』若侍はおづおづ云ふ。  
『ふむ、無暗に身を捨てるのを佛法とは申さない。それが成佛ならば人に頼んで首を切つて貰ふも好いであらうし、川に飛込んで死ぬも好いだらう。のう、身を捨てるると云ふ事



は執着を離れるのみだ。好いか、着する機さへ離れればこんな五尺の糞袋あつてもなくても碍りはなくなる。と云つて、猥りに怠けて身體をうませてしまふ事でもなく、度を過ぎた馬鹿働きをして病にかゝる事でもない。たゞ執着を離れる事これ一つ。だが、それでも其方はまだ頭を丸めるだけが、身を捨てる事と思はれるか。わしから見れば、其方の現在の態度では、樂をしたいが爲に坊主になりたいとしか見えない。第一後世を願ふと云ふのも自分の爲の願でないか。身を捨てるといふ程の事を云ふならば何で御奉公を勤めない。自分がいやと思ふ事をするのこそ、本當の身を捨てる事ではないか。況て修行と云ふのは強い心を以て修する事だ。それには寧ろ出家より侍こそ好いのである。侍は主につかへて機に油断がない。又常に大小をたばさみ、すはと云はばと云ふ機が自ら備つてゐる。それを何ぞ、その機をさへ用ゆる事が出来ないで、出家して一層ダラリとなつてしまつたら何の用にも立つまいが』

若侍はだん／＼追詰られて來た。然し彼はなほ、

『ではお訊ね致しますが、僧俗の別なく修行はなんと致したらよろしいのでございませうか』と問ふ。

『修行と云ふは、生死を離るべき願力を強く起し、たとへ無間地獄の底に落入つても此の一念心を失はず、生々世々をかけてもいつかは生死を出んと強く守ることだ。此の心は強きが上にも強くなければならず、飽迄強く守るのを始て信心堅固の人とも修行者とも云ふのだが、どうだ、その方の道心も矢張これか』

『いえそれ程ではございません。何かにつけて心が亂れ騒ぎますので、最初十年ほどの間は江戸を離れてをらうかとも思つてをります』

『何だ、そのやうな了見で道心などは及びもないわ。わしなどは元來淋しいの喧しいのと周圍に亂される事さへ知らなかつた。然し其方も、剃髪したいと云ふからには、今迄これと自分の心に肯つたものがあるであらう、懺悔の爲ぢや、云うて見なさい』

『五蘊皆空の道理を心得ました』

『何、五蘊皆空、それはお前古人の心ではないか。其方などの心でない儘に、古の大聖人の心を仰せおかれたものを持來つて、さも我物のやうに云うて見た所で、何が素凡夫惡凡夫の心の分際で、五蘊皆空を用ゆる事が出来る話か、眞實本來空の當體に達した時にこそそれは初て使はれるものなのぢや。好いか、現在其方の心は何にでもこびりついてゐる



ではないか。喃そこぢや、わしはたゞ一つ教へておく、今迄習ひ來つた一切の佛法妄想を吐出してしまつて、一心に念佛を唱る事ぢや、何ぢや、やれるか』

『はい。然し私は可なり坐禪を致しましたので、少しは光明が眼前に現れるやうになりました。それで無得老に此の事を話しました所、あゝそれこそ法身の光と云ふもの、撓ず進めば滿身に光がみなぎるやうになる、と申されました。それで實は出家してこれを長養したいと存じてをりまするが』

『あゝさても危い所であつた。その光こそ、氣の衰へから出るものぢやに、それを好い事にしてをつたら、やがて狂人にでもなられた事だらう。どうぢや、自分でどこか機の減つたやうな覺えはないか』

『誠に近頃は機が減りました。摺鉢の音を聞いても、胸に響いてたへられません』——嗚呼、我々にも此の覺はある。そして禪の雜誌を見る中には幾度か同じ嘆きを語るに出會つた。僧堂に端坐してゐる時に鳴らされる引磬が如何に鋭く痛く胸をさした事であらうか、然もその原因が判らなかつた。實に正三老人に感謝の拜を爲す所以であるが——』  
『それ見なさい、實にひどい機の減りやうだ。然しまだ好い時であつた。早くその光を捨

てなさい。さてもく無得とか云ふ人は實に危い人ではないか』正三は心から打嘆く。之に接する我々も實に慄然とせずにはをられないのである。

續いて——さても無得とやらんは危き人哉——正三は嘆息する。

『わしもその人の名はかねく聞き及んでゐた。又、此の頃も臨濟家の僧の十八九になる者を、見性の人だと云うて尊びをらるゝ由も聞いてゐる。それ程樂に悟りが開けるものならば、わしなどもはや佛菩薩にもなつてをられたらう。若い折からたゞ己の事のみ心に懸けて、幾度か胸の中は燃ゆるやうに大事起つて八十に近いまで修行して來たが、さつぱりらちの明かんものぢや。先づそれ程の人を尊ぶやうでは、無得佛法も知れたものぢやが、近頃はさうした人が多いのは困つたものよ。考へても見るが好い。たとへ多少の見解があつた所で、若い修行者はわしには尊くも思はれない。佛法修行、それほど容易く成じ得るものでないとわしは確に信じてをる。』

『わしなども、以前「寶物集」を拜見して、諸行無常の四句の文に雪山童子が命を擲ち給ふた因縁をうかゞつた折、諸行無常の一句がてつきりと意に移つた。又、其の後も、六十の年のさる曉の寅の刻（午前四時頃）佛は三界の衆生を一子の如く思召さるゝといふ御



心がひしつと移つた事もあつた。誠に其の時は蟻虻の類を見ても、苦樂のさまが憐れに思はれて、何とかして救つてやる方便もと、骨髓に透つてしみくと思はれた。が、其の意も三日ほど移つてゐて消えてしまつた。然し、慈悲の心の少しは起つたのもそれ以來の事なので、わしは有難く思つてをるのぢや』

『又、見性の位といふものもわしにもないではない。これも翌年六十一の八月二十七日明けて二十八日の曉方、はらりと生死を離れた、本性に契つた。其の時のわしの心はたゞもろ、嬉しうて、なしなし、躍り廻つてばかりゐたい程ぢやつた。眞實頭を切られても微塵執着もなかつたが、さて三十日ほどする中に、どうもこれは自分に似合はぬ事と思ひついた。これはたゞ、一つの機の上に移つたばかりと心得て、こちらからなすと云ふ心も打捨て、又、元の道に取つて返し、たゞ彼の死を胸の中に打ち込んで強く修行したところ、案の定みんな虚ごとぢやつた。その證據には今以て此の正三と云ふ糞袋が何より大事で秘藏してをる始末ぢや。』

普化の境界が、ひしつと意に移つたのはその後の事で、これは凡そ道ならば三町ほども行くほどの間ぢやつたが、確に信じ確かに移つた。その時の心に再び入る事はでき難い

が、これは誠に大きな徳になつてをる。それ以來ぢや、今でもわしは世を代へ生き替つても普化ほどの境界には達したいものぢやと思ふ心が強く起つた。普化は慥かに佛の境界に達した人ぢや。河陽、木塔、臨濟の三長老を、河陽は新女房、木塔は婆の繰言、臨濟は小便僧とこき下してしまつてをられるが、わしは全く尤もぢやと思ふ。普化ほどの人の眼から見たら、どれもこれも明盲ぢや。なあ、こゝぢや、一口に見性と云うても、これほどえらい距りがある。

わしにしても今云ふたやうに、それからそれへと一ヶ所に腰を据えず、見性迄も打捨てては打捨て、本に歸しては修業したが、さて矢張り命が惜しいのぢや。貴公も今から出家して八十迄も修行して見たら、何の變りもないものぢやと云ふ事がよく判るであらう。剃つても狂人、剃らぬも狂人と心に決めて剃るなら剃られるも好い。剃つたら定めし能い事もあるかしらなど、思つて剃られたら、大きなあて違ひといふものぢや。何の變つた事もないもの、もし變る事があるとすれば、それは天狗か狂人ぢや』

正三の青年に對する態度は親切を極めてゐる。禪が老婆親切を忌避するのは冷暖自知すべき修行の上の事である。今人生の方向を決すべき岐路に立つ此の青年に對しては、説い



て倦まざる親切こそ大切なものではあるまいか。

併しながら青年の心は決擇に憊んでゐる。少時づつと考へてゐたやうであるが、

『私も今日此處にかうしてお願ひに出ますまでは出家する覺悟で参りましたが、もし出家してしまつてから、出家を遂げる事が出来なかつたら實に變なものになつてしまひます』と云つた。無得長老に、法身の光などと聞かされて思ひ上つてゐたのを、正三の今の言に、佛法に一切奇特の事なく、修しつめても何の變りもなきものと聞かされ、失望して自己の前途に對して不安を抱きはじめたのか、實に奇妙な愚痴を云ひ出した。然しこれがこの青年の真正正銘の本體なのであらう。敢爲の心なく、安價な虚榮につかまつてゐる青年である。それだから正三は、

『先刻からの言分、何一つとして切れた所がないではないか。後に到つて還俗したらば、足輕にでも何でもなるがよい。あとになつて何かになつたら、他人が何と云ふだらうなどと考へるのが第一切れぬ證據でないか』

と痛罵する。そして、前に正三出家の動機の所に引いた如く、正三自身が得度した當時の心境、即ち間違つたらば腹を切る迄と思ひ定め、老中を通じて秀忠に願ひ出た事、後に

刻苦の餘り身體衰弱し切つた時に、他人の罵言を平然として肉食して漸く身を養つた事を説いて、事に當るに斷乎たる決意なくして何事も成り難しと懇々と訓へてゐるのである。惠中のこの文章で見ると、此の青年は懷疑派と云ふには餘りに頼りなく、たゞ無得長老の法身の光に煽動てられて、未來の高僧を夢見て安價な入道を欲して來た人間のやうでもある。然し正三ほどの人が他にないほど珍しく懇切にかく説き聞かせてゐる所を見れば、純情の溢れてゐる所もあつたのであらう。それに又、正三の如く、己の一切を抛つて己に土にも等しくなり得た人の前に出ては、僅なこちらの虚榮も力も甲斐なきものとなつてしまふものである。

が何にしても、彼が後に到つて還俗したら人から何とか云はれるだらう、と云つた所が一番眞實の氣持であらう。我々は從來しばしば此の逆を見聞した。即ち佛門に入つて修行して力を得たらば、再び俗に還つて世の中の爲に大いに働かう。——と、入る時から己に出る事を考へてゐるのである。僧堂ではしばしば大衆激勵の爲に、飛込んだ力で浮ぶ蛙哉——の句が引かれる。浮ぶか浮ばないかは、傍から見た者の考である。飛込むものは飛込むだけが本當なのではあるまいか。



正三老人は遂に此の小蛙に勝を吐かしたやうにも見られるが、然し誰にも彼にも會釋なく、悪辣の手段と稱して猥りに求法の志を挫くやうな人よりも、正三の此の説話の中には、更に尊い人情を離れたしみなくとしたものを感じるのである。

次に引きたいのは、所謂理論家に屬する人でもあらうか、彼の言は多く現れてゐないが、正三は此の人を評して、理過ぎたる者と云つてゐる所を見ると、先づその種類であらう。

彼は先づ正三の前に出ると、

『かねて御高名を承はつてをりました故に今日罷出ました。何卒然るべき一句を御示し願ひ度く存じます』と云つたのである。と正三は、

『は、あ、一人虚を傳へれば萬人實と傳へる、といふ事がある。世の中にはおどけ者が多いから、誰かそんな人間が、正三こそ實に出来上つた立派な人だ、など云ふと、それからそれへと聞傳へて、さては空でも飛び翔るか、光明でも放つ人かと思つて見物にやつて来るが、御覽の通り何の變つた處もない老人ぢや、みんな興をさまして歸りをる。』

『が、全くわしは何の變りもない土禪門ぢや。たゞ死に度くない許りに、どうぞして殺される事があつても、平氣で頭を差出して自由に死ねるほどになり度いと思ふて修行してを

るだけぢやが、死ぬ事はさて置いて、餓鬼畜生を出来ることも出来ぬ有様ぢや。然しせめて餓鬼畜生を離れたいと思ふ心を持つてをるだけでも、持たぬ者よりは増しかと思つてをる。其方も、道を聞かんと志して來られたなら、たゞ一向の素人に成り切られたがよいのぢや』

『これはひどいお秘しやうで、左様な事を仰せられず、どうぞ禪門端的の一句お示しを、お示しを』と彼者は云ふのであつた。と之れに對して正三は、

『われ佛法のよき事少しも知らず、たゞ我が悪き事を知る事を得た許りである』と答へてから、

『もし眞實我が友となつて出入されるやうになつたら、いつでも自分の持つ餓鬼畜生をさらけ出し、懺悔してお聞かせ申さう。これより外によき事と云ふ事は何も知らぬわしである。卑下して云ふかと思はるゝか知らねど、よき事はおろか無間に沈む方さへ知らぬわしである』と自己を披瀝してから、

『さてさう云ふ其の方は、先程からの態度で見ると佛法を持つてをられるやうである。構はず出して見せなさい』と鋒を轉ずると、



『いえ何も存じませぬ』と彼は隠すのである。恐らく、ニタ／＼笑ひ乍ら答へたであらう風貌が浮んで来るではないか。然し正三は已に看破してゐる。

青年も正三には遂に負けて、

『實は、趙州洗鉢盂の話がある和尚から頂きまして、漸く目鼻のつく所まで参つたと申されてをります』と白状したのである。

『嗚呼、僧は三寶の一つとて、世の人の寶ともならなければならぬ所の僧侶が、反つて誤つた道を授けて人を損ふと云ふに到つては何と云ふたら好い事なのか』

『夫れ言句に徹すると云ふ事も無いではない。然したとひ徹したとした所で、餓鬼畜生の心失せはしない。わしも自ら悟りの見性は少しはあるが、餓鬼畜生の心に對しては何の用にも立たぬものぢや。結局今時の見性したなど云ふ人間は、却つて人間が悪うなつてゐるやうにも見える。其の方もそれつれの悟などは打捨て、只だ土となつて念佛修行をするがよい』

『あなたの仰せの修行とは、どういふ事を意味しますか』

『一言に云へば我を盡す事、即ち修して修して己れを失くする事』

『で、土になれと云はれますのは』

『其の方の胸の中に蓄へてゐる、悟りの脱體のといふ知解妄想を一切打捨て、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と、道理も消し我も消して虚空一枚となる事を土になつて成佛すると云ふ。近頃は何處にも此處にもたゞ佛法を安く授ける人が多い。が、わしは授けるべき物もない。わしの所に來ての得所は、何とも成らぬ物、といふ事これ一つぢや。ようこれを知るように、これ一つだけを授けて進ぜる』

『併しながら、己の事たるや一瞬も差置かるゝものではない。誠に一大事中の一大事なれば、世々生々に於ても種を失はず、いつかは佛果菩提を成就せんと思ふ心は、わしも強く持つてゐる。其の方なども只々念佛申しに成らるゝがよいのぢや——中略——わしの見る所では、其の方の性は誠にあぶない性と思はれる。嗚、先づ人には褒められたがる。褒められ、ば鼻を高くし角をはやして駆け廻る性分ぢや。それぢやから何處へ行つても其の方に會うた人は、其の方の事を褒めるばかりで、わしのやうにこき下して悪くいふ者はあるまい。わしに會うた功德には、構へて人に會うて褒められて、己れを損ひなざるなといふ事ぢや』



これに依つて見ると此の男は、相當の所謂理論家であつたやうである。彼の語つた所が詳細に記されてゐないのが残念であるが、假令ば——あなたの所謂修行の意味は、とか、士とは何ですか——など、盛んにやつたやうである。それ故彼は到る所で、理論的に大に征服して歩いたものでもあるであらう。

併しながら、それら一切の理論も、理論も愚痴も包含し攝收してしまつた所の土の前には、力なく吸収されてしまつた事が窺はれるのである。

正三も他の場所では、我れも眞實ある人には負ける也と云つてゐるが、眞實を欲するが故に理論に赴くか、理論が眞實を持ち來らるか、それ等一切が態度に歸入するのであるかは、誠に複雑な問題である。が今は、第一に引用したものに歸りたい。

前にも書いた如く、正三は剃髮を願ひ出た旗本の青年に對して、實に懇切にその不心得を説いてゐる。彼は當時の武士が剃髮する態度を批評して、近頃の武士が髮を切つて、死人の衣をはいて世を渡ること卑怯千萬とも酷評してゐる。そして如何なる場合にも、主を持つ武士こそ常に機を張り詰めてゐる機會が多いから、寧ろ武士の勤めこそ佛道に入る力多きもので、徒に僧となつて、だらりと機を抜かしてゐる者より如何に勝れてゐるか知

れない、と云ひ、鬨の聲の中にあつて修行せよ、槍ひつそばめて敵に突きかゝる所に機を養へ、と説いてゐるのである。或時はまた、近頃法を求むる人は僧になく、反つて在家に移つた、とも嘆いてゐるのである。

此の事實は我々も、現今眼前に多く見る所である。説教所を廻つて、説教を聴聞して隨喜の涙を流す人々も、禪堂に通參する居士も、等しく進んで法を求むる人であるが、説く方の側の人々は多くはこれ職である。然もその職にして、進んでそれに歸入して、一切没我を欲することなく、求むる所は他にあつたならば、無論正三の謂ふ所の機は抜けて、だらりとするは當然である。かくて法を求むる者は寺門よりも寧ろ在家に移る。況や出征の將士が君國の爲に擲身の覺悟決定してゐる端的に當つては、機の全面に溢れた、驀直その物といふより他に道はないであらう。

## 修行の正邪

そこでしばし正三に、出家する事の可否が問題として提出される。と、正三は因果の



二字を以て之に答へてゐる。これは一見何だかすうい遁辭のやうにも思はれる。世間的に用ひられる因果の二字は應々斯る意味を持つ場合もあるが、正三にあつては、因果は生死を超越してしまつてゐるのである。それ故彼は、『我の刺つたは因果である迄よ』と平然として云ひ得るのである。

もしも正三の前に出た青年も、正三の如くお咎めあらば腹切るまで、と心を決し、自ら髪を切つて弟子たる事を乞ふたのであつたならば、正三は快くこれを許し、彼の爲に與ふ限りの便宜も與へたであらうが、青年の眞の要求は道を求めるよりも他にそれてゐたやうである。故に正三は、身を捨ててゐるならば何ぞ今の奉公を勤めないのか、と、捨身の心得を逆に用ひて、奉公專一の道を説いてゐるのである。無難禪師が愚堂和尚の駕籠あとに従つて、黙つて歩き出した時には、愚堂和尚もとやかくは云はなかつた。已に理非を絶してゐるのである。正三は自ら因果と云ふが客觀的には斷である。

又、正三は、機を用ゆる事に、敵と太刀を交へた一瞬を高調する。然し武藝者は、太刀打を終つた時には機が抜けるが、佛法は此の機の一瞬も抜けぬ所にある、と説いてゐる。彼の言葉に従へば、煩惱妄想を面出しさせぬ即ち純一無雜の當體を指すのである。そして

更に進んでは、戰場に出て死ぬ事の出来る人は澤山ある。然し、命を捨て、死ぬ事は困難である。だから命を捨て、死ぬ事が出来るやうになる修業をせよ、と云ふのである。かくて之等の與件の備つてゐるのが在家であるから、結局、今時の修行は俗がするのである。けれども大眞實の人にしては、出家の人徳大い也。と云ふのが、正三の結論である。

かくて正三が普化を理想とするのも當然の歸結となつて来る。普化を評して、普化こそ佛境界の人と覺えると云ひ、仲々爲人度生の如き次第なく、サツ／＼とした機であると云つてゐる。つまり普化は爲人度生など、云ふ境界すらも離れてゐる。が敢て自ら人を濟度しようの、接化しようのとしなかつた振舞は、反つて正三すらをも化してゐるのである。

此所に到つて眞に無縁の大悲が出現する。自受法樂は自受法樂であるが故に、衆生救濟の縁なきものかどうかの理論よりも、眞實一切を離れてサツ／＼と世を去つた普化の境地に佛境界を認めて、其意の移つたのを喜ぶ正三にこそ、無縁大悲の實踐と具現が見られるのだ。

併しながら、臨濟會下の大衆に混り、食には生の野菜を喰らひ、街に出ては癡狂する所の普化の態度は、一般の眼からは少し變である。たゞ普化の如く眞實跳出した人にあつて



當然の振舞となるのであらうが、その最後が棺の中の體失せて、空中にたゞ鈴の音のみ聞こえた、と云ふ話などは、寧ろ普化の境地を象徴したものとして見るべきであらうと思はれる。普化の鳴らす鈴の音は、今も絶えず空中に響き渡つてゐるべきである。

けれども禪のみに限らず、之等の象徴的の話を日常生活に具現されると信ずる所に、多くの宗教に奇特の事が説かれる。瀧山は午睡から醒めて仰山に洗面の水を貰ひ、香嚴から眼覺しの茶を受けて一段の神通と唱へたが、此の如きは仲々神通と見ない人々がある。蘆の葉の船に乗つて空中に飛上り、光を放たなければ承知しないのである。此の承知なり難き處に不思議を求る心が起り、此の心の起る所に尋常を放れた異様な修行が生れて來るのである。

我々も幾度か此種の猛修行の自慢話には苦められた事がある。或る僧は、臘八氷の張つた池の中に三日三夜浸り通し、遂に息絶えなんとした時にやつと這ひづつて老師の前に出た時に、初めて——よし——と云はれたと云つて得意でゐた。然もそのよし——が、何を意味するよし——なのかは、彼自身も知らないのである。何の爲のよし——なのか、無論此方にも判らない。

斯る種類の人は仲々數多くゐるのである。要するに功を急ぐ心の到來した結果である。己れの從ふ教へでは、無始劫來の三毒と説いてあるものが、三日三夜の氷漬位で溶け去ると思ふのは滑稽である。が、人は苦くなると、奇蹟の出現を欲する弱點を有つてゐる。それが禪の上にあつては要もなき荒修行になつて現れて來る。

正三程の人が、軌道を外れず如法の修行を續けても、餘りに粗衣粗食、雨露風雪に曝されては、遂に致命の状態にまで陥入つてしまふ。釋尊も一度は此の危期に當面し、ニレンゼン河畔の婦人の牛乳によつて生氣を恢復された如く、正三も弟の醫者の示した肉食の食養によつて氣力を恢復したのである。白隠禪師も觀理度に過ぎた際、白幽道人の教へによつて救はれた事は、自ら説いてをられる所である。此等の危期は修行上免れ難き所であるではあらうが、それ故に正三は一層要もなき荒修行、殊に肉身から光を放つと自ら喜ぶ如き狂氣の状態を深く戒めてゐるのである。

正三によつて深く願はせられた所であるが、氣の滅入ると云ふ事は實に恐るべき現象である。此の青年も正三に、摺鉢の物摺る音を聞いても胸に響いて堪えられぬ、と告白してゐる。事實我々も禪堂にあつて、引磬がちーんと鳴ると胸がびくつと痛む感じがして、



飛上るやうに覺えたものである。

自分では臍下丹田に力を籠めて、一息、一息、強く行じてゐるとは思つてゐるのであるが、いけないのは三昧に入りたくなつたり、悟りを求めたい心である。三昧とは意欲を絶して自ら入り得る境地であらう。然るにこちらは何でもたゞ音のしない、物静かな境地を心の中に頻りに求める。その結果は、正三の強調する強く機を張る心とは反對に、たゞ、すう／＼と何もなき所、何もなき所へと憧憬れる。いつしか體の中の機は抜け失せて、誠にアツカ杲然となるのであるが、それも一つの消極的なる恍惚の状態でもある。

斯る際、カタリと物の落ちた音がしても、ビクツと飛上るほど驚くのである。そして自分では斯くも油断なく氣を張りつめてゐるのに、何故にこんなにビク／＼してゐるのかと驚くのである。額のあたりが妙に光る事もある。矢張りよき現象と自ら喜ぶが、おど／＼した状態は一層烈しくなる許りである。

此の状態は世間に出れば孤疑深くなつて決斷の心を失ふ。友人を訪問しようと思つて家を出ては、ゐるかゝないかと無益に案じ、事の將來を悲觀して見たり、散歩の一步を踏出しても、家の前で行かうか行くまいかとためらふやうになつてしまふのである。

分別仕置の嫌ひな正三は、家を出たらば雪ふれば雪も面白い、童の時には雪遊びをしたものをもと思つて出よ、萬事如是无分別に仕習へば、殊の外心の軽くなるもの也。と説いてゐるが、無分別とは結局機の張り詰めた位と云ふ事になつて來る。

即ち勇猛の機とは、終始、我々の生活の一切に關聯して來るのである。仁王の姿を見てその機を受けよ、の、勇猛の機たゞ一つなど、云へば、或は淺薄に寧ろ滑稽に、甚深の佛法を簡單に片付けすぎる如くに見えるかも知れない。

然し佛法とは、これを指いて他にはないのである。我々が修行の初歩に於て猥りに悟りを求め、三昧を欲すると、いつか分別智解にわたつて、已れ自ら造り上げた靜寂でもない靜寂に浸らうとし、又、苦難の前進を厭ふて途中に妥協するやうになるのである。

正三はそれ等一切をかなぐり捨て、機を引つ立て眼を据ゑ、仁王不動惡魔降伏の形像の機を受け、仁王心を守つて惡業煩惱を滅すべし、と云ふ。彼は、無念無想も三昧も湛寂も説かない。寧ろ、佛法を飽迄欲する有念であれ、と云ふ。怨靈にもなれと云ふ。併しなから、佛法全體が有無の沙汰を離れたものである限り、欲して進めば到達する所の境地はそこであらう。大欲をかけ、と云ふ。然し、修行はたゞ勇猛の機のだゞ一途と云ふのであ



る。そこに彼の所謂、無分別の分別なる、切れ端なる言葉が現れる。

無分別とは、分別する力をも失つた茫然たる態度ではないのである。寧ろ分別に満ち切り終つた状態とでも云つたらよいであらうか。即決即答、全體作用、等はそれ等を現すべく努めた言葉であらう。昔の僧が或は座具を展べ、拂子を起て、一圓相を描く等々、互に商量したのも、眞に私心を去つて互の境地を示し合つたものでもあらうし、寧ろ、如何に私心を去り得たかを検討したものであらう。

正三に剃髪を乞ふた青年は、實に危機一髪の所にあつたのを、正三によつて救はれたのである。誠に佛の大法に一點の誤りはないのであるが、たゞ求むる者道を誤るときは恐るべき結果を生ずる。正三も佛法に入つたが故に狂人となつた、自殺した、としばしば人は云ふが、然らば佛法に入らずして狂人となり自殺するのは如何なるわけか、とまで云つてゐるが、それ程に道を誤れば懼れもあるのである。併しながら、それ程に險難である故にこそ、透過すれば自在の境地に翱翔し得るのもあるのである。實に正三こそ、その道に進む誤りなき方法を、最も懇切に我々に示してくれた人として、我々は深く感謝するのである。

正三も亦、佛像の機を受けると云ふことを古來沙汰した人はないが、これこそ最も適確な方法と信ずるが故に自分は之を唱へ出したのであるが、眞に機を受ける人の如何に妙い事であるかと嘆じてゐた。

近頃は色々の議論の上に於て實踐倫理と云ふ語がよく用ひられる。此語の用途も亦その場合に應じて種々の意味を齎すだらうが、今正三の云ふ所は假令それが一應は禪の語句に味到したにせよ、或は禪を究めんとする觀念にせよ、修行に志すほどのものは擧げて、果し眼となつてぐつと死を睨み据ゑる——それが、彼の唱ふる勇猛の機なのである——一切をそこに没入し切つた時に初めて佛法に志した所のものが現成すると云ふのである。或僧が正三の教へを受けた際、思はず『以來は差様心得ます』と答ふるや否や、正三は、『佛法は心得置くべきものに非ず、行するものなり』と喝破してゐる。茲に眞實の實踐倫理が存在するのである。

更に第二の理論好きの男に對する態度に於て、正三の面目は一層躍如として生彩を放つて来る。彼は先づ、己れの所に來る者が、他愛なき好奇心に驅られる者の多い事を嘲笑して、此男にも冷水を浴せてから、進んで、



『我れ佛法の能き事を知らず、たゞ我が悪き事を知るのみ』と唱へ出してゐるが、我れ佛法のよき事を知らず——の一句は、如何に鋭く吾人の肺腑を衝くであらうか。無論、寡聞の私ではあるが、斯の如き言は、古來の禪師の言としても、未だ聞かない所である。誠に我々凡下の徒には佛法の好き事は眞實知るを得ないのである。

端坐して自己の裡に見る所のものは、自己の醜愚のみである。正三ほどの娑婆を離れ、六慾を離れて殆ど修し詰めた程の人にしても、尙、此の糞袋が秘藏であると斷ち難き習氣と云ふか、生々たる躍動とも異なる單なる生そのものへの執着と云ふか、の斷ち難きことを死に到るまで嘆じてゐる。況や我々にあつて自己に見る所のものは、醜穢そのものばかりとなり來つて、遂には眼を背ける場所すらなきに困惑してしまふのである。

私は會つて此の意味に於て、禪を修するのは何事もすばく正直に云ひ切る境地に到達したい爲だと云つた。するとある所謂善知識は、人間何も一切正直に云ふばかりが能ではない、と嘲笑した。恐らくこれは、禪の修行を積めば厚顔無耻の惡平等、糞も味噌も一所にしてづけく語る事を正直に云ふと解釋しての非難であらうと私には受取れた。古人の洞然として藏す所なき境地、それに對する羨望意欲、然も坐れば坐るほど、自己の醜惡に

當面しながら忌避する事を許されない苦痛、等々は此人には判らないものと私は考へてゐたのである。

いま正三は之を、たゞ我が悪き事を知るのみと證明してくれた。我々は佛法の尊き事、好き事を、ほのかに心に感じてゐる。併しながら、眞實佛法のよき事を示すわけには行かないのである。佛法に對し、佛法を修すれば修するほど、知る所のものは我が悪き所ばかりである。

昔、印度の大天は父を殺し僧を殺し妻を殺して後懺悔して佛道に入り、當時の大徳となつたが、夜に入つて眠ると彼は『苦なる哉』と叫んだと云ふ。晝は法を説き、夜は苦を叫ぶ。人いぶかつて之を問へば、『聖教は言句のみ』と答へたと云ふ。甚だ多くの示唆を感じると共に、此際之れを聯想するも少しも唐突ではないと思ふ。

或る曉、正三は弟子達に對して、

『自分には時々切實に死が迫つて來るし、又、夜明け近く一定の時刻になると、大事臍下から起つて胸一杯となり、息もつけぬ苦しきになる』と語つてゐる。と弟子の一人が、『あなたの云はれる大事とは生死の大事を指されますか』と訊ねた。



『いや何が大事と云ふ事はない。たゞ大事なのだ』と正三は答へてゐる。

大鹽中齋は——深夜は男子の泣くべき場所である——と云つてゐる。

正三は曉毎に迫らるゝ大事、ある時は憂い機と言葉は變るが、機會ある毎に其の下に出入する人々や弟子達に述懐してゐる。正三の云ふ曉とは世俗的には深更の時刻であらう。大天はその時にたゞ一人——苦なる哉——と叫んでゐるのである。

曉は誠に愁の時である。私は作品を書き初めた頃偶然にも、曉の愁に堪へかねる心持を曉愁として發表した。然し一夜の睡眠に疲勞を恢復して、今日の活躍に出發すべき日出前の一刻が、何故にかくも憂に襲はれるのかは判らなかつた。東の空が白んで、曙の大氣を吸ふ頃になればそれは解消する。そして人は黎明の欣びを云ふが、曉の憂は一向に語らない。或は、我等の出生に當つても、斯の如き憂を抱いてゐたものであらうか。生誕の祝福に對して多くの一生は哀愁に満ち、朝の勇しき出發に比して、夕には無爲と徒勞の嘆きを多く持つのである。

正三も之れに對して適確な解決は與へてゐない。たゞ大事なのだ——と云ふばかりである。中齋の泣く場所、大天の苦なる哉——これ等は共に何を意味するのであらうか。

正三は——我れ佛法のよき事を知らず、たゞわが惡しき事を知る——と云つてゐる。惡しき事とは何であるか。當時の正三は已に五根の欲は殆ど全く離れた人である。彼のどこを叩いても、我等の意味する惡の意欲は殆ど見られない。彼が常に嘆く所は、今に到つても此の糞袋の秘藏にある。糞袋の秘藏とはその言葉の示す如く、單純に肉體に對する執着のみであらうか。まして、彼が常に自己の肉體に對して嘆く所は、痛い痒い熱い寒いであり、眼汗鼻汁の流るゝ不淨を厭ふ消極面のみである。飲みたい食ひたい、ではないのである。寒暑を避くる安樂な場所が得られない苦惱でもないのである。たゞ、生に對する執着がかゝる様相となつて現るゝ事を嘆くとしか受け取れないのである。

正三ほどに五根五欲のみか、名聞の意欲をも斷つて斷ち切つた人にして、しかも尙ほ、憂い機に襲はしむる所のものこそ、彼の所謂、惡しき事の當體ではあるまいか。此所に到つて、殆んど言語表現の域を絶してゐる。だから彼は、何が大事と云ふでもない、たゞ大事なのだ——と云ふのである。此の大事こそ中齋を泣かせ、大天をして叫ばした物と云つても間違はないであらう。

白隱禪師は六十歳を過ぎて初て園觀に遊ぶの境に出られた、と東嶺さんに語つてゐる。



然し、その同じ人が、更に老年の新春にも、——あゝかうして芽出度く新年を祝へるのも東嶺さんのお蔭だ、お蔭だ——と欣んでをられる。喜びに喜び、悲みに悲む、喜怒共に純一無雜であるべき事は、我々も常に教へられてゐるのである。けれども、高い境地に達した人の喜怒の対象は、我々凡下とは自ら異なるものがあるのではあるまいか、と思はれてならないのである。

正三は江戸に来てから以後は、殆ど喜びの感じを現はさなかつた人である。それは前に書いた大強精進勇猛佛の名號を教へられた時だけは、大いに悦び給ふ、と慧中が書いてゐるのも明かである。それ故正三には、世俗的な明朗或は潤達な笑ひといふものはなかつた。彼は弟子達に對して、修行者は一生大聲で笑ふやうな事はないものだと言ひ、非常な饗應にあへば、閻魔大王に腹を破られるだらう、と言つてゐる位である。

實に苦なる哉、である。が、我々にあつては、此の苦なる事を諦認する限りに於て始めて勇氣も生じ、明朗ともなり得るのではあるまいか。澤木興道師も曾て、吉田松陰の事を語つた件か何かに於て、人間はどんなになつても苦しい時は苦しいが、苦しければ齒を噛みしめてぐつと通るだけだ。といふ風な事を言つてゐた。誠にその通りと思ふ。正三は、死

ぬ事を習ひ切つて、命を捨て、死に得るやうになれ。命を惜んで死ぬ人は多いが、命を捨て、死ぬ人は稀である、とも云つてゐる。惜んでも捨て、死は苦であらう。ぐつと齒を噛みしめて死ぬ所に、古來敵軍の捕虜となつて、勇敢な死を死に遂げた人々の明朗さを見るものである。明朗といふ事に於ては、ニイチエの如き人々を連想する。

我々はニイチエに於て、高く峻しい冷徹な大氣の中に到達した人を想察する。然し現實に於ける彼の苦惱に満ちた生活は、餘りにも明朗と云ふ言葉から遠ざかつてゐる。孤獨、イタリーの小さなホテルを轉々して遂に發狂するまでの彼、然し、多くの人は、彼の冷徹な大氣の中にある明朗を求めてゐるのである。苦なる哉だ。そして此の場合、彼の孤獨と、今日の大同團結の現象とを對照的に連想するのである。孤獨だつた彼の思想は、今日も尚ほ世界の人々の胸を打つてゐる。が、宗教の大同團結は果して何者の胸を打つ結果を將來するだらうか。古人が折脚鎧内の己事究明に専一なるを重んぜられたのは如何なる關係にあるのかを思ふのであるが、今は話が餘りに脱線する故に止めておく。

『士となれ禪』を説いた正三は、其根底に於ては實に嚴肅を極めた態度を持して崩さなかつたが、一面に於ては我が惡しき事に徹すると共に、佛境界に到る事の甚だ遠い事を認め



た。然しそれは、彼が佛境界は確かに見届けた、と云ふ強き自信に位して始めて云ひ得る所だつたのである。『驢鞍橋』の言葉は甚だ斷片的であるが、六十餘歳の時、諸行無常の意たしかに移つたと云ふのは、或る一瞬、心身を擧げて諸行無常となり、普化の境界となり得たのであつて、思量念度や知見解會の對象として理解したのではなかつたのである。併しなから依然として糞袋は秘藏である、秘藏ではあるがその境界はたしかに見届けた、と彼は云ふのである。

一瞬の體得理解は、無論、その境界に到り得たのとは異なる。けれども、それによつて佛境界を理解し得たから、他の人々が果して佛境界に到り得てゐるか否かは判然と斷じ得ると、強き自信を以て云ひ得るのである。正三自身は、自分に普化の境界が乗つたお蔭で、自分の修行が足りない事を知り得たと己を告白してゐるが、彼から見れば道元禪師もまだ佛境界には到つてゐないし、臨濟には敎家の餘習が残つてゐるし、傳教も弘法も共に未だしである。たゞ釋尊のみが佛境界に到り給ふ、と云ふのであるから、その自信見識は誠に驚くべきものがある。

次に彼は普化を最も尊敬してゐる。正三が普化を賞讃して、仲々サツ／＼としたる活境

界、と云つた言葉は簡單ではあるが、普化の面目に接する想ひをさせられる。仰山は出世以前の臨濟に對して、將來普化が來て臨濟の敎化を助けるであらうと豫言した。と云ふ物語は残つてゐるが、普化自身はこの生れの人とも判らず、又、その行動も判然とした事は判らない。二三の言行と、末期の甚だ神秘的な状態が傳へられてゐるだけであるが、それであつて、普化の人心を引く事の強いものあるには驚く程である。

正三はサツ／＼としたと、松吹く風の如き形容を用ひてゐるが、普化は高僧とも聖僧とも云はれない。字書などには奇人と片附けてゐるのもある位である。或僧が爲人度生の沙汰のない事は如何なるわけか、と正三に問うたほど敎化の沙汰も何もない。が普化は幾多の人を度し且つ今も度してゐるのであらう。普化が末期に臨濟に棺桶一箇を買はしめて、自ら市に運び、市人に對して、自分は今夜東門で遷化する、今夜は南門で遷化する、と稱して更に遷化せず、第四夜、人の來て見るなきに至つて自ら棺内に入つて、通行の人に之れに釘打たしめて市に傳へしめ、市人來るに及んでは已に棺中藻抜きの殻で、たゞ空中に普化の平日鳴らした鈴の音ばかり隠々と響いて去つて行つた。と云ふ話は、誠に彼の一生を象徴するにふさはしい傳説である。



而して、これこそ佛境界の人と正三が讃へる普化の如くあるべく進むには、どんな修行をすべきか、と云ふと、正三はたゞ土になれと云ふのである。正三佛法にあつては、勇猛の機を堅持する事が一貫しての手段目的であり、土となる事は更にその眞諦である。

ある日正三の語るには、

『中古以来の人の修行は、身心を清淨にして先づ自らの淨體を作り立て、その内に佛法を取り込んで人々を濟度し、好上人となつて崇められてゐる態度である。それ故如何なる場合でも、世人からは一段上の位になつてゐるが、自分の説く所は全くこれとは別である。初歩からこの糞袋に眼を注いで、たゞこれを捨てることにかゝつてゐるのである。即ち、第一歩からラゾイ物、價値なき物となる修行である。かつた坊になつて修行するのが最上である。』

従つて、中古の人々の如き態度では自分の信念とは背反する。何故かと云へば、彼等は己を好くする建前であるからしてどうしても自我に執する佛法となつて来るからである。然し、己に心の底からかつたい坊になり切つた者にあつては、自我を立てたくつても、他人が立てさせてくれなくなる。だから古人は佛になる修行、自分は土塊になる修行だ。自

分は斯の如く信じて、この糞袋に離れるよりほかには何も知らぬ』

—又、ある夜の話に一人の僧が、

『此前、玄俊坊様が一心頂禮と施餓鬼を讀みながら舍利禮を始められた時は、堂内に居並ぶほどの者にして感涙を流さないものはないほど殊勝に見えました』

と語つた。玄俊坊とは正三と舊知の人であり、或は律の事は此人に學んだかとも思はれる筋もある人である。が、正三はこれを聞くと、

『誠にひどい迷執だ』と云つた。僧は更に、

『あの方は二百五十戒も保たれて世にも勝れた方と崇められてをられたのに、臨終の有様は實に亂れて、申すも御氣の毒の有様はどうも不思議に堪へません』

『律僧は、さうした事が多いであらう。威儀ばかりを佛のやうに保つから周囲の者も佛のやうに崇めるが、實の心は佛にはなつてゐない。之れを佛のやうに尊ばれては心の底では自と己を責めるであらう。正眞偽りのない死に當面すれば、自ら現れて醜態になつて來るべきだ。これは餘計の話だが、衲の甥に鈴庵といふ者が居つて僧となつてゐたが、誠につまらん性分で、掌から蓮の糸を出したりして様々の神通を使つて見せるので、世間の人



は之れを大層尊んでをる。衲から見れば何とも彼とも間違ひだらけの事なので、如何に意見をしてもどうしても止めると云はるので、とうとう衲も腹を立て、貴様の生れつきは出家して狐になる性分ぢや。みすく肉身の甥に對して、自分と云ふ者がありながら狐としておく事は斷じて出来ん。還俗をすればよし、さなくば叩き殺す。と云つて無理矢理に還俗させて醫者にしてしまつた事があるが、修行者は用心にも用心して、人に崇められぬやうにせなければならぬものだ』と言葉を切つた。

それからやゝあつて、

『その點に於ては正三は誠に心安いもので、人から尊ばれると云ふ事が、骨髓に透つて嫌な性分ぢや。何うしたものが生れつき他人に負ける性に出來とつて、どんな賤しい人に對しても遂ひ下になつてゐるやうに出來てゐる。自分は僧になつてからも、少しもよくなつたとは思はず、矢張り元の九太のまゝぢや。時にちつとは考て見ると、これでも少しは人に勝つた所もあり、古人の語の詮議などする場合には、何人の言葉を聞いてもどかしくなる位だし、古人の言句そのものさへ、さして有難いとは思はない事が多いほどだが、平素はたゞつまらん者になり切つてゐる。誠に變な事と考へる事もあるが、自體この

俺自身が悪く出來てゐると、又、人間は何ともならぬもの、と云ふ信念が本になつてゐるやうに思はれる』

正三は——何ともならぬもの——と常に云ふ。恐らく各自の業に従つて與へられた性格は如何にしても變化し難き事を嘆じてゐる言葉として、私は受取つてゐるが、彼は此時もかく語りかく嘆じてゐるのである。時に傍にあつた人の問ふに、

『古人の語に錯りがありますか』と、

『祖師と云つても佛でないからのう、錯りもあるぢやらうが、そこに到ると御佛ぢや、御佛の仰せには、何を伺つても非難すべき點がない』

又、ある夜話の時に、

『此頃、一言法談と云ふのを見ましたら、大善知識も餘りに徳の大きいのは怨になるとありましたが？』と、語ると、

『誠にその通り、たとひ悟得の人と云つても、自分によい事があれば楽しみともなるであらうし、何かよい事をしたといふ氣持も出るであらう。あゝお蔭で衲もよい事を聞かせて貰つた』と答へてゐる。更に、



『自分の経験した處によると、無欲に見えた人間で恐ろしく死際の悪い者がありますし、彼奴は欲張りと言はれた人間が、反つて末期のすきつとしてることがありますが、どう云ふ譯でせうか』と問うた人に對して、

『それは無欲のやうな振りをして、人に好く云はれたいと云ふ虚榮の強い者は死際も悪くなれば、欲張りに見えても案外執着の薄い結果だらう。徒然草の芋喰坊主の話などでもさうではないか。然し善人と悪人はその人の死んだ時に判るもので、善人の死んだあととは何となくさつぱりして清らかな機を受けるし、悪人の死んだあとは變に凄じいものだ』斯る言語は數多くある。中にも當時無頼の浪人であつたと思はれる無人と云ふ人を評して、彼は亂暴を働くが、人の爲に命を捨てる氣合を持つてゐる。世の中には、人に迷惑もかけずきちんと暮してはゐるけれど、自分の事ばかりにかまけて他人の事は一切考へない人間がゐるが、これに比べれば無人の方が遙に上だ。と云ふのは仲々面白い。

稍や脱線の傾となつたが、正三は出家しても高僧・傑僧・上人等々となる事を最も厭つたのだ。眞實徳高くして、其の生存中に、己の意に反して斯る待遇を受ける人もあるであらう。が世の多くは此の待遇を期しての高僧傑僧への修行に邁進する者ばかりである。

佛法本來の立場からすれば、凡ゆる場合に斯る待遇への機會を回避すべきであるし、更に進んでは、自ら斯る待遇に出會はないまでに修し盡すべきであらう。さればこそ、當時の臨濟は一院の主になり、臨濟の祖となるの名を江湖に轟かしてゐたのであらうが、飄然として來てその教化を助け、飄然去つて行つた普化に憧憬するのであらう。名利の二欲の捨て難きは何人も説く處であるが、名聞の事に到つては、世人と異なる種々相を深刻に持つ事を高僧のあとにも見るのである。

私は曾てある席で、其頃しばらく新聞に信念を發表する所謂宗教者の一人に對して、同席の新聞記者が、君の過去に於て爲したある事は賣名の一手段ぢやなかつたか、となじつたのに對して、賣名も向上の一段階だ、と答へたのを聞いた事があつた。何と云ふ事もなく心に沁みただであつた。名聞の爲によき事をするのは、せぬよりよいのであるか、よき事をしてゐる中に自ら纏ふ所の名聞にいつか心を引かれて行くのか、個々の問題は判らない。併しながら、求道者の態度としては、此の至難の道に進むのが本來である。かくて士となる禪は、その言葉の與へる包容に富んだ感じと相反して、その核心は實に嚴肅な非妥協のものとなつて來るのである。



我々も求道の眞の態度としては、斯くの如く目的しなればならないのである。けれども、此の目的に一點も添はない限り我々の救済は遂げられないとすれば、つひに失望して道を求める事をなげうたなければならなくなつて来るのである。これは實に由々しき問題である。我々は、我々の道を求める事に於て已に妥協は許されない。人々各自が、自分の根柢はこの程度だから、この邊の所が自分相應の到り得た境界である、と許したならば、それは求道の目的からは遠く離れたものとなつて終ふ。然らば何人も修行すれば、一跳直ちに佛境界に到り得るかと言へば、佛境界は道元禪師にして尙ほ達し得ない、と正三は認めるのだ。

然し斯る苦悶の原因は、一跳直入佛頂地、と云ふ文句の意味するやうな事を成佛そのものに對して抱く所で發生するのではあるまいか。人々具足箇々圓成など、云ふ文句を聞かされると、我々が一旦見性さへしたらば、釋迦達磨と同等になれるやうな心をさへ抱くのである。併しながら、多少の見性悟得などがあつた所で、それにこびりつけば、寧ろより深刻な煩惱を持つに到るのだ。正三は此事を、

『近頃見性したと云ふ人などは、反つてその態度が悪くなつてゐる』と云つてゐる位であ

る。假令一旦の見性あつても、それを以て修行成就とする事は誤りで、無論佛境界ではないのであるから、見性とは寧ろより眞劍な修行へ出發の基點となるべきで、更に強く修し透して、佛祖に一致の境界に到り得た時に、禪家ならば始て印可を受ける資格が出来たと云ふのである。然しそれでも尙超佛越祖と云ふ事がある。即ち古人未踏の境地に跳出しなければならぬ。此事たるや、よしんば佛祖の境界そのものに、觀念程度の思慮を絶して到り得たとしても、それはたゞ意が移つたと云ふばかりで、仲々五生や十生、生れ替つて修した所で修し盡せるものではない。と云ふのである。

誠に我々凡愚の人間が多少とも自己の心地を味得すればする程、煩惱業苦の深さを知る許りで、その煩惱業苦はいつ果つべきとも思はれなくなつて来る。逆に云へば佛法の大海の測り難き所以でもあるであらう。

斯ては遂に眞の救済、大悟徹底、或はまた大我爆發と云ふもよし、眞實解脱の境地と云ふものはないのであらうか、と云ふ疑惑に再び立ち戻るのである。これに對する正三の意見としては、次の説話が最も妥當してゐると思はれる。

『あなたが四民徳用に書いてをらるゝ浮ぶ心といふのは、我々の修行に對してはどんな風



にしたらばそれを作用させる事が出来るのですかと或人の間に對して、

「一言にして云へば、虎の口に臨んだと云ふ心だ。又、敵に對して果し眼になつて、じりじりと懸る時の心と云つてもよい。要するに、此の端的がなくては萬事に對して自在を得ない。物事に執着して物事に追廻されて、己が主となつて使ふ事は出来ないのだ。佛道修行と云ふ事は初めから終りまで一貫して、たゞ此の端的即ちこの機一つを以て生死を離れれば、それを成佛と云ふのである。されば結局此の機一つを以て成佛するので、別に何等の複雑な方法はないのである。或種の人の云ふ如き所謂見解など、云ふ事も、生死の解決には餘り用には立たない物で、毒藥變じて藥となると云ふのが反對に、藥が變じて毒藥となる結果にさへ立到る事が往々ある。だが見解などと云ふより、たゞ此の勇猛の心を以て練りに練つて行くがよいのだ。——悟りとは悟らで悟る悟りなり、悟る悟りは夢の悟りぞ、と云ふ古歌があるが、悟るといふ悟りは實に危険で、衲も悟らない悟りが好きだ。法然の念佛往生も悟らない悟りと云ふべきだ」

と、即ち我々の生活の一瞬一瞬は、勇猛の機を張り詰めて當面して行くより他に道はな

い。暑ければ暑く寒ければ寒く、悲みに悲み、喜びに喜び、他念なく相對して行く所を生死を離れたと云ふのであり、成佛とはたゞ斯く行ふのみである。と、然るに我々の悟りたると云ふのは、我々の妄想の所産である安樂の境地を求めてゐる場合が多い。冬も寒からず、夏も暑からずである。即ち我々の現實から遠く離れた所に何かあるべきを求めてゐる状態である。此の想念が坐禪修行の上に現れて來た時に、觀念の中に安樂を求める態度となる事が屢々ある。自己の出入する一息一息の中に、煩惱妄想のない、自己自身では清淨無垢と自惚れてゐる所の無心の状態をしきりと模索するのである。そしてその結果として、一念一息の呼吸の中に、甚だしく消極的な、煩惱妄想を抜き去らうとする如き息使ひをなすに立到る。

誠に妥當な説明の言葉がないので窮してゐるのであるが、具體的に云へば、先づは、あゝと溜息を繰返す如き有様である。何も思ひたくない逃避的態度である。此の状態を反復してゐる裡に無心に近い境地に出る事は出るが、實はそれは無心でも無念でもなく、一種の氣拔けに他ならないのである。然し行つてゐる者自身は、兎も角も妄念の生じない欣ぶべき境地として益々安樂を追求する。その結果は、正三の最も斥ける所謂機のすり減つ



た病的状態に陥つてしまふのである。是れこそ坐禪修行の最も陥り安き病弊である。正三はある日、此種の沈み坐禪をなす者を發見した。

『何だ、お前のやつてゐるその有様は。そんなつまらん事をやるよりは、たゞ死ぬ事一つ習ふがよい。他には何の必要もない、無理にも死を習つて夢の中でも死ぬ事を忘れぬやうになすべきだ。それと同時に、死ねば直ちに腐れ行く腐れ物を何の爲めに大切にしているのか。暑いにつけ寒いにつけ、痛い痒いの上、何一つとして苦でないといふものゝない、扱もいやな苦の身體かな、と此の糞袋をきつと睨みつけて、念々刻々の我が心境と張合つてゐる念を起すべきだ。納の事は他所からはさうは見えないが、納自身としてふと氣づいた時には、必ず奥齒を噛み合せて、きつと睨みつけてゐる状態になつてゐる。實にこれは青年の時から斯の如くして修して来た』

『猶注意する事は、奥齒と云ふが奥齒ではなく、奥齒と前齒の間を噛みしめて、じり／＼と睨みつけてゐるを果し眼の坐禪と云ふ。のう、それはかう槍をびたつとつけて、八幡と敵に懸つた時、こゝに据つた機合がある、その機だ。此機さへ用ひる事が出来れば諸念自ら碍る事が出来なくなつて來るのである。我が坐禪は斯うであるが、近來諸方の坐禪

を見ると、多くは念を起すまいと云ふ坐禪で、その起すまいと云ふ途端に起すまいの念が起る状態だ。』

『納も念起すまい坐禪もやつて見た。まだ石の平に居つた頃である。岩村にをられた萬安和尚を訪ねる途次、一念も起すまいと思へば一念も起さずに行けたが、これも結局は勇猛の機で保つたのであつて、お前のやうなその沈んだ、念起さず坊主では決してなかつたのだ。兎に角修行する以上、大念が起らずして諸念の休むといふ事はない。蓋し世間の修行は念起さず坐禪だが、我のは念起しの坐禪であり、然も須彌山ほどの大念を起させる坐禪である』

正三の意氣は實に雄である。願れば私が始めて修行に入つた頃、『坐禪をすれば無心になれると云ふが、無心にならうと云ふのが、已に有心ではないか』と云はれて、はたと當惑したのであつた。已に自分でも無心になれる事を證明出来ない道に、今に無心になれるさ、と云つて進むのは偽りのやうでもあるし、無心になれると信ずる事を證明する手段もなかつた。今書きながら當時の冷汗を思出したまゝに書添へたわけである。――



正三の説く所は實に親切を極めてゐる。禪は老婆親切を嫌ふと云ふが、これは第一義の端的に於ての事ではあるまいか。元より不惜身命の誓願を以て大死一番に向つて進むに當つては、爲らざれば生きてゐるも同じく死漢に終るので。肉體の生死は已に顧る所でないのである。されば夾山は華亭の船子の爲に水中に打ち落され、浮べば橈をもつて更に沈められ、眞に命の瀬戸際に逢著して忽ちに大悟した。然も夾山に慧命を傳へた船子徳誠は、自らの薄徳を知り、その師藥山に嗣いだ法を一人に傳ふることを命として道吾に約した通り、已に法を傳へられた夾山が船を上つて去るを喚びとめ、橈を擧げて叫んで曰く、  
——汝道ふ、別に更に在る有りや——

と云ひ訖つて、自ら船を翻して煙浪に没し去つたと傳へられる。誠に徳誠こそは身も以て法を傳へた人であり、潔さを過ぎてゐる。又雲門は陸州の爲に橈を折られて大悟した等、法の爲には師弟共に身命を顧ない例は無數である。がこの身命を顧ない白熱の状態に到達する爲には、身命を巧みに導く事が必要である。正三は初身の爲に荒修行をさせる事、機を減るのを心附かぬ事、沈み禪に落入ること等に對して、手をとる如くにして矯正に努めてゐる。誠に有難き師と私には思はれる。

斯の如くにして人々を導くのも、要は各人をして土禪に徹せしめたい念願の顯れに他ならない。此時の正三は、實に寸分の隙もない凛々たる風貌を示してゐる。そこには何等の苦痛の殘影もないのである。誠に勇猛の氣一面に漲つた氣魄を感じるのであるが、その正三が曉毎に憂い氣に苦み、時には大事起つて息もつけぬ苦に惱むのは、何としても不思議に感ぜられる所である。が、翻つて考へれば、これも亦我々が即今抱く妄念を基礎として、安樂の境地を望み見てゐる結果ではあるまいか。佛境界は我々の想像を絶してゐるが、大なる安心を得た者には大なる苦惱の伴ふのも必然の結果と思はれる。たゞ彼の人々はその苦惱に當面して惧れる事なく、超克の態度を以て臨んで、反つて苦惱を驅使して推進の具としてゐると見ても誤りではないであらう。

中齋の泣く場所も大天の苦なる哉も、斯く見る事によつてのみ、深夜の苦闘を理解する事が出来るのである。斯くして後に、始めて命を捨て、死ぬ事も可能となつて來るのである。故に、正三の佛法は死の恐怖を深く認識する所に出發してをり、これを克服する爲に勇猛の機を堅持する事が根幹となつて一切に現れるのをその場その場の成佛と云ひ、佛法を世法に用ゆると云ふ事となつて來るのである。誠に正三の云ふ如く彼の佛法は臆病佛法



であり、死にたくないのであり、この臆病を深く認る所に、始めて眞の勇氣の生ずるに到るを得るのである。血氣の勇は如何に強くも衰へる時があると云ひ、業にも恐れざるを大業人と云ふ、と彼は説き、進んで死ぬ機に迫らるを奨めるのも、此所に出發してゐるのである。

## 刹 那

勇猛の機を以つて修して修し盡し、浮ぶ心を以つて一切事象に當つて究め行く目的は何であるかと云へば、生死の一大事を解決する以外にはないのである。ソクラテスは哲學の任務とは如何に死すべきかの覺悟にありと説いた、とニイチエを深く検討した山元氏はその著書の中に引き、更に——ソクラテスを生の頹廢者と呼んで、自らは生の充實を恃むニイチエにとつても、没落が必至である以上は、唯如何に没落すべきかのみが、その哲學の究極の課題であつた——と云つてゐる。

此書に依つて、ニイチエが生の充實を説くに當つて死そのものを把握すべく如何に深く

追究したかを知り、又、ニイチエを批判する所の著書の生死に對する見解の周到なのに敬服した私は、左にその一節を引かせて貰ふ。

先に引いた一節に續いて著者は云ふ、

——そしてその解答として彼が教ふところに依れば、死のこなたには生くべき此岸はなく、死のこなたには希望を寄すべき彼岸もない故に、死に非ず生にあらぬ死に行く刹那そのものの中に、運命の究極の完成即ち回歸があるといふのである。併し乍ら、死に行く刹那とは何であるか。

凡そ如何なる刹那も矛盾の實現である。矛盾のないところに刹那はない。そこに在るものは持続か、あるひはその否定としての零か、何れにしても刹那ではない。刹那は時間の量ではない。と云つても量に對する單なる質でもない——と、絶對の異質者が互ひに矛盾するときに刹那であると、例を引いて説いてから、

しかし乍ら、ここに述べた如き刹那の一般的概念が、如何にして體驗の事實となり得るのか。ニイチエに依れば、人の體驗し得る刹那は死に行く刹那以外にないのである。既に前章で述べた如く、彼は人間の根源的事實を生きてゐることであると考へる。生に矛盾す



るものは死であり、刹那が矛盾の實現である以上は、生きて行く人間の體驗し得る本來の刹那に死に行く刹那のみである。死を決定せずして生き延びる人は、生の極微の持續は持つが刹那を知らぬ。既に死せる人もまた死の持續以外に刹那を知らぬ。たゞ生が死に轉ずる刹那、死生を共に含み乍ら生に非ず死にあらぬ刹那、そのみが生きた人間に許される唯一の刹那である。切り離された生と死との即自的分立は、分ち得ぬ兩者の矛盾に依つて對自的統一に高められるからである。生に非ず死にあらぬ刹那の矛盾が、生死以上の生死を産み出すと云はねばならぬ。寧ろ、かゝる矛盾の切迫に實現する生死以上の生死が、實は、生と死の最も具體的且つ根源的な自覺ではあるまいか。死なんとする時、人は始めて切實なる生の力を知るであらう。――

正三は命を捨て、死ぬる人になれと云つたが、何と強く此の言葉に對して響くではないか――生きんと足掻くとき、人は抗し難き死の牽引を自覺する。ニイチエ的に云へば、自己を滅す敵に依つてのみ、始めて自己自身もあり得るのである。生死の巖頭を知らぬ限りは、未だ本來の生死はない。その巖頭に於てのみ、我等が生き延びつゝあるときには夢想だにしなかつた生死の純粹にして大いなる姿がある――(山元一郎氏)

これを讀む時に自らニイチエが愛讀したといふドストエフスキの作品の一人主人公(名前を忘れたが)が斷頭臺に立つた一瞬、執行中止の恩命に接して反つて絶大な侮辱を感じて憤慨する心持も解る氣がするではないか。

かくてニイチエは、

『存在はすべての刹那に始まる』と書いたと云ふ。これに對して山元氏は、――失はれたるものはそれが失はれたる刹那に存在を回復する。過去を失ふては來し方もなき刹那の深さそのものが、過去の象徴ではないのか。同じ様に、刹那の高さそのものが、未來の象徴的回復ではないのか。『絶嶺と深淵、今こそそれがひとつに閉ぢてゐる。高さと深さに象徴さるゝ一切の矛盾を胎みつゝ、刹那はさながらに永遠である。それが彼の云ふ永久回歸説の萌芽であつた』(山元氏著)

『存在はすべての刹那に始まる』

『中央は到るところに在る』これ等の言葉に依つて彼の思索が、如何に佛教的な、特に華嚴思想に近づいてゐたかを我々は見るのである。

更に、



『私は必然的なものだけを愛しようと思ふ。しかり！ 運命愛こそは、我が最後の愛であれ！』必然を必然としての確に認識し、必然的なものだけを愛して進む心、それは古人の所謂、——心は萬境に順つて轉ず、轉處實に幽なり、流れに隨つて性を認得すれば喜もなく亦た憂も無し——に通ずるものがあるではないか。如何に避けんとしても我々に與へられた性格、才能、認識、一切は必然である。その必然を諦かに認め、それを愛し同化して生きて行く所に、生の自由はあるのである。

ニイチエは佛教の思想に甚だ近づき、佛教を最も優れた衛生學と云つたが、最後に彼れは發狂した。その發狂の原因が遺傳にあつたか、餘りに狂熱な思索の結果か、それとも周圍の迫害によるのか、自己を孤獨に驅り立てた甚だしく繊細な彼の神經がそこまで到達させずには止まなかつたのか、彼を知る事のすくない私には判らない。しかし、彼がもし眞に佛法を悟得したならば、と思ふ事がしばしばである。それは知性的な眞實の探求と、一切の智見、情識を絶つ所に大道を認める所の、探求の根本的態度の出發點の相違から、その結果を異ならしめるに到ると思ふからである。それに對して、正三老人は斯く云つてゐる。或夜の話、

——我々が人生を談ずる點に於ては、道教も儒教も印度哲學も佛道も理論は同一で些かも相違はない。どうだ諸君、此點をどう思ふ、——  
と訊ねてから少時して、

『何れの教へも皆な、理知の追求し得たその究極をたゞ究極として奉ずるのみで、理智の働き以外に心の開ける、と云ふ大切な事を知らない。我が佛法は之と別に、心の開ける事を根本の第一義としてゐる、此所に相違があるのである。然し佛法の中でも教育家にあつては、經典を理論的に検討し理解する事を建前として、理解の外に意の移ると云ふ事を知らない。たゞ此の禪法のみ、文字に依らず、理知を離れて、たゞ意を得る事を本意としてゐる。こゝに於てか、此の道は學問する程理知にわたつて根本の意に遠くなるが故に、禪宗では學的な判断を斥けてゐるのである——と云つてゐる。

勿論正三は讀書、學問を絶對に斥けてゐるのではない。讀書に對する態度を説いてゐる事もあるが、要するに一切は心の開けるが爲である。白隱禪師も、須く大死一番して大我爆發してからは、諸子百家、稗史小説にまで眼をさらして、應化接機の力を養へと説いてをられるのである。が茲に今云はんとする所は、心の開ける、と云ふ事である。心の開



けるとは生死に徹する事である。そして此の生死に徹すると云ふ事は、理知的に追求して達し得るものか、身を以て行じなければ到達し得ないものであるかを思ふ時に、ニイチエの發狂を一層惜む心になるのである。

此事は東洋の達人と、西洋の偉大なる思想家との相違によつて窺はれる。シヨウペンハウエル程の人にして、なほ彼の充足原理の何とかと云ふ書物の序文では、自分の發見した原理を誰れとかゞ、恰も彼自身が發見した如く平氣でその書物に用ひてゐるとか書いて、散々に愚痴を並べてゐる。

然るに禪門の人は自己の心境を吐露するに、古人或は近人の有名な語句を勝手に自己の表現の具として用ひて憚らない。そして之を見る者も一向に不思議としないのである。要するに一方は飽迄思想に執着し、一方は思想を離脱する事を欲してゐるからである。

併しながら、私は決してニイチエの發狂を冷笑するものではない。もしも彼がその熱烈な思索と、それに伴ふ種々の迫害と、更に孤獨の漂泊の結果からして狂人となつたとしても、彼が到達した『絶嶺と深淵』に於て、『生死ならぬ生死』を味得た法悦を思ふ時、恐らく彼もその孤獨にも寂莫にもかへ難き愉悅をそこに感じたであらうと、羨望に堪へない

のである。

會て、私は、ある禪家の人がトルストイの事を批評して、彼がもしも禪を知つてゐたならば、あの懺悔録を書いた程の彼であるから、あゝまで悲惨な最期を遂げなかつたであらう、と云ひ、我々は幸に禪と云ふ道あるが故に彼の如き迷誤に陥入らずに済んでゐる。と稍嘲笑的な態度で書いてゐるのを見て、甚だ不快に感じた事があつた。トルストイが禪のない土地に生れたのは彼の宿縁である。然し彼はその禪のない土地に於て道を求め、物質的に云へば安樂な境地にある自己を鞭つて探求の途に上り、何とか云ふ寒村の百姓家で野伴死したのである。その最後に到るまでの探求と熱意との態度は、關山古佛が末期行脚姿で樹下に立つて遷化されたにも比すべきと思つて私は尊敬して居るのである。

我々が今切に自己に欲してゐる所のものは此の熱意と勇氣、即ち願信である。殊に今は時代が知性的に何等かの解決を求めて行詰つてゐる秋である。近頃にとつてはあの漫才にすら、あげつらつて嘲笑される所の螺線的な物の言ひ方は、知性を追つて彷徨低迷する時代の苦惱の表現ではあるまいかと考へられ、語源を一とする觀念の語が理念の文字に置きかへられたのも、自主的解決を欲する現れであると私には思はれる。



誠に今はニイチエの所謂『歴史の地平圈』が崩れんとする時であり、そこに生れた苦惱の解決には、小ざかしき分別處置を以てしては當り得ないであらうが、それは知性を輕蔑する事ではないのである。何故に人が知性に頼るかは、時代の苦惱の底に横はつた問題である。我々は時代と共にその苦惱に徹した時、その解決の鍵を得るであらう。徒らに使用古した解脱の名藥の空袋を振舞しても、それは何の役にも立たないのである。寧ろそれ等一切の古ぼけたものを振捨て、時代と共に面貌を變へて行くことこそ我々の急務である。が又それは、單なる團結とか體制の變化とか云ふ、外廓の繕ひを意味するものでもない。要は時代の精神に徹する事であり、時代の精神に徹するには、共に苦惱を惱み抜かなければならないのである。

甚だしく脱線したが、生死の問題を究め知らうと欲する時にニイチエが當面した刹那、之れは、——絶對の異質者が互いに矛盾するときに刹那である——と山元氏は言つてゐるが、眞に我々が徹底、味得し體驗したく欲するのは此の刹那である。曾て私は『禪に生くる』の中に刹那について斯く書いた。

道元禪師は出家功德の卷に——しるべし今生の人身は、四大五蘊因縁和合して、かりに

なせり。八苦つねにあり。いはんや刹那刹那に生滅して、さらにとゞまらず。いはんや一彈指のあひだに、六十五の刹那生滅すといへども、みづからくらきによりていまだしらするなり。すべて一日夜があひだに六十四億九千九百八十の刹那ありて五蘊生滅すといへども、しらするなり。あはれむべし、われ生滅すといへども、みづからしらすること、この刹那生滅の量、たゞ佛世尊ならびに舍利弗とのみしらせたまふ。餘聖おほかれどもひとりもしるところにあらざるなり。この刹那生滅の道理によりて、衆生すなはち善惡の業をつくる。また刹那生滅の道理によりて、衆生發心得道す。かくの如く生滅する人身なり。たとひをしむともとゞまらじ。むかしよりおしんで、とゞまれる一人いまだなし——と説いてをられる。

我々は、泰平にあつても、亂世にあつても、實に斯くの如く刹那々に生滅してゐるのであつて、この刹那々の生滅の當體を、眞個に自己に究め切るのが實に、禪の目的であると思ふ。

刹那生滅の道理によりて、衆生善惡の業をつくるのである。泰平の時に惡の業を作り、亂世にあつて眞實自己に當面せざるを得なくなつて、己れを究め來る所に次で來る泰平の



素因をまた作るのではあるとすれば、宗教の時代による起伏も、また斯るところに原因が潜んでゐるのであらう。

然しまた、亂世に當つて禪の勃興するといふことは、禪そのものゝ中に原因を含んでゐるのであつて、それは禪の所謂斷の力である。が斷とは何であるかといへば、命根斷絶の斷である。生死を透脱して、一切の無明を斷つにある。私の苦む妄想を斷絶することである。人間が生死の問題に煩はされ、そこから派生する無限に根ざす形態のない妄想に執はれて、これと相對する時に、如何に論理を以てこれを征服しようとするか、對者に捉ふべき理論の根底がなく、たゞ無聲、無臭にして然もその威力が無邊に變化し得る限り、智情意の如何なる方法を以てしても、これを征服する事は出来なくなつてくるのである。自己自らが死に切るより他に道はないのである。死に切ることが即ち斷である。己れを斷つのである。

と、已に六七十年の昔に書いたのであるが、今に到つても生死の絆を斷ち切れず、當面するは益々醜惡なる己ばかりである點は、誠に慚愧に堪へない次第であるが、所信は毫末も變つてゐない。そして、世界はますます亂世となりつゝある。かくて益々、命を捨て、死

に得る要求は熾烈となつて来る。勇猛の機を養ひ、或ひは又浮ぶ心を以て一切に當面するものも、所詮は生死の問題を解決するにあると説く正三は、その方法も正しく示してゐるのである。

## 死に習ふ心

一日さる遁世者と云ふから僧でもなく俗でもなく、無職にして佛道専心に暮してゐる人であらう、が訪ねて来て、修行の用を問ふと正三の示す所は、

一切を擲つてたゞ死に習ふべし——と云ふのであるが、正三の云ふ習ふとは、練習ではないのである。また死を練習する、と云つたら通常の言葉に於てこれほど無意味な事はあ  
るまい。未だ死なないものが如何にして死を練習するか、これは誰れにも出来ない話である。ただ我々は、智情意の一切を擧げて、死そのもの一念となり切る事に努力するのである。先に正三も言つてゐる如く、死そのものは形態もなく、思念の對象とすべき慮知の手がゝりもないのである。



かくて我々の中から發生する所の實有の念なる執着・迷執・妄想、これ等も亦、發生の根源の把みきれない空漠たる場所から無限に群り起つて來るのであるが、更に一層、思念の形象をなさない死の中にはどうしても雲散霧消せざるを得なくなつて來るのである。その點を正三は、我々の修行は實有の念を以てするために、死は對象が空であるが故にやがては虚空一枚なる萬物と一體になり得るのであるが、もしもこれを逆に、我れは空だ、と云ふやうな生悟りを以てしたら、已に空だと思惟した一念は實有の執着に赴くより道はなくなつて、解脱の道は失はれるに到つてしまふ。それ故自分は、釋迦にも達磨にもなりた

いと思ふほどの大慾家がたゞ好きだ、とも云つてゐる。  
斯くの如くして一念たゞ死そのものになり得れば、死そのものも失せ果てる境地になり、其の境地を死の隙をあけた人と云ふ。隙をあける、といふのは禪の慣用語であつて、悟を開く事をひまをあけると云ひ、大悟の人を大ひまをあけた人と稱へてゐる。誠に愉快な響を持つた言葉である。小さな戸棚の中にしても物が一杯に入つてゐれば、物の出し入れは不自由である。況やそれが雜然と亂れた場合には手もつけられなくなる。我々の煩惱にしても、種々の想念がぎつしりと詰つてゐたらば、恐らく回轉の自由は利かなくなるであ

らう。頭の中に一杯に詰め込んでおくと云ふのは、それ等の想念に粘着してゐる事である。その粘着を斷ち切つた端的を隙を明けると云ふのである。

ニイチエの熾烈な探求は彼をして生死にして生死にあらざる刹那、絶嶺と深淵のひとつに閉ぢた思念にまで到達せしめた。ひとつに閉ぢた絶嶺と深淵、と云ふ表現は、古人の吐いた孤峰頂上に佛を呵し祖を罵る、なる言句と一聯の相通するものをすら感じさせる。更に進んで己れに徹し自己ならぬ自己を發見したその境地は、たしかに思想的にそれだけの解脱に達したものと思はれる。然もそれは彼自身の唯一独自の思索の苦闘の結果である事を思ふとき、古人の涎唾を嗜む我々のとやかく云ふべき事もなく、羨望に堪へない理由もそこにあるのであるが、死に習つて死の隙を明ける事と、死そのものを思想的に認識することの相違を感じずにはゐられないのである。かつて日本に於ける、最も熱心忠實なニイチエの祖述者であつた生田長江氏が、晩年佛道に精進された事を思ふと、長江氏をして永らへて今日あらしむれば、と云ふ感がこれを書きつゝ起る事を禁じ得ないのである。

さて正三に戻る。老人は更に語を續けて、——かく死の隙をあけて、眞實死に當面したときに狼狽えぬやうにする事、それが各人の修行である。他人を濟度したり、或は法を説



かうと思ふ場合にこそ知識は必要であるが、自分が成佛する爲には、一切の事を知ると云ふ知識そのものも怨となる。故にたゞ土となつて念佛を以て死を習ふべきである——と、するとこれを聞いた遁世者は、

『それならあなたの書かれた「盲安杖」を私は常に読んでゐますが、それもいけない事でせうか』と訊き返す。

『読んで覺えるといふ事は修行の邪魔になる。たゞ／＼念佛を以て死を軽くするだけ、それ以外には何もない』と、正三は答へてゐる。正三は決して讀書を否定しない。然し知識の獲得を目的とする讀書は否定するのである。讀書に對する態度を説いてゐる所にも、筆者の心を吸ふ事、即ち意の移る事を目的とすべきである、とも云つてゐる。

正三は彼の著した『四民徳用』、『麓の草分』、『盲安杖』等は、出來得る限りの丹誠を籠めた物であつて、正三佛法の眞髓が全體、そこに披瀝してある。從來の假名法語などとは全く異つた物であるが故に、自分の處に來て何かと無駄話半分に物を聞くよりも寧ろあの書を読めと云つてゐる位であるが、それでも、或は、それだからか、それ等の書物を読んでも、記憶する、と云ふ如きは修行の怨となると云つてゐる。

即ち知識に於て一切を求めず、自己の心身を擧げて書中の意に同化すべく努めるのが彼の讀書に對する心構へである。かゝる態度であるが故に、正三は古人の祖録にも猥りに感服しないのである。彼自身の心根にまで承服し難きものは、古人の言と雖も平然としてこれを斥けて辛辣な批評を浴せてゐる。宗教に携はる者の多くは、同門の先輩の言であればそれに非難を挾む事を、或は挾む見識もないのかも知れないが——避けて唯々仰迎する傾向の多い中に、殊に當時にあつてのその態度は誠に多とすべき者がある。

ある時正三は、門下の一僧に對して、自著の『四民徳用』と、『麓の草分』を如何に讀みこなしてゐるかといふことをテストした。そして、その僧が彼の筆意を一向に理解してゐないのを知るや、

『勿論自分の文章も行届かない點が多いが、お前達後輩の爲に能るだけ心を用ひ苦心して書いたものだ。然るに長年自分のそばに侍しながら、これが判らんと云ふやうな無道心な奴があるか、呆れはてた耻知らずめが、お前が此所にゐる目的は只々納をごまかしてその日その日を安樂に送りたい爲であらう。よくもその面をしてしやあ／＼と納の前へ出て來られたものだ。』



自分の所に来てゐる限り、他の事はともかくとして、衲の書いた書物位は讀破して疑問を正しておくべきに、文字さへ知らぬのがあると云ふに到つては、耻知らずと云ふも愚な位だ。汝の如き奴は、追出して乞食させた方が寧ろ慈悲である。貰へれば喰ひ貰へなければ餓死する覺悟で世縁を離れ身を捨て、乞食する方が、こゝにゐて氣樂に飲食し安閑と暮すよりも増である」と甚くその怠惰を憤つた。此所にも正三の讀書に對する態度が判然と現はれてゐる。吉田松陰は、讀書を精神鍛錬の具として鍛鍊したと傳へられる。一切は自己の心構へに歸して來るのだ。

遁世者は覺える事も怨と云はれたので、

『近頃は、悪心もなくなりましたし、物を欲しいといふ心もなくなりましたが』と、披露したが、

『人間といふ者は少しばかり欲でも薄くなるとそれで満足してゐる勝なものだ。どれ程人が好くなり無欲になつたと云つた所で、日々の生活を樂む心、それと第一自分を思ふ念と云ふ奴はなくなるものではない。是を離れなければ、これが一切輪廻の業となる。』

そこで、第一にこれを滅さなければならぬが、それには我がこの身心を怨仇として、

きつと呪詰めて念佛を以て責滅すばかりである。それ以外には別に何の道理もいらなければ、知識の必要もなし。又、人に頼んで成佛させて貰ふのでなければ、人が引張つて地獄へ落とし込むでもない。たゞ我がこの一念が地獄へも天へも追ひやるのだ。

お前が怒ればその心が即ち地獄、物欲しいは餓鬼、愚痴は畜生だ。これが即ち三惡道、これに修羅、人間、天上の三善道の加つたものが、六道であるが、此の六道の間を絶えず上に登り下に降つて止まない事を六道輪廻といふのだ。別に六道と云つて定まつた世界があるわけがなく、すべて人々の心の内に具有してゐるのだ。お前自身の心についてもよく観てみなさい。今善念を生じたかと思ふと直ちに惡念になり、惡心もまた善心に變じて、それが地獄から天へ、天から地獄へと、絶えず變つてゐる證據ではないか。

たゞこの一念頭を離れて、不生不滅の當體となる事を成佛と云ふのであつて、成佛を欲する限り、念根を修し盡すのだ。敢てはたからお前の念根を斷絶してやる事は出來ない。たゞこの念根をきつと睨みつけて、命を限りにひた責めに責めて切り盡すばかりである。然し、先づ大づかみな、どえらい惡心とか、及びもつかぬ野心など、云ふものは絶えるものだが、さて兎角何か有るものだ。念根を切り盡す事は實に容易ならぬ大業ゆえ、四六



時中この糞袋を仇にして、念佛を以て申し滅すこと、これが念根を切る修行であり、死に習ふといふことである』

『では修行と申すのは、此身を離れる事と心得て置く事でございませうか』遁世者が問ひ返すと、

『バカッ！』と正三は怒鳴りつけた。『心得て置くとは一體何んだ。それが第一に間違つてゐる。佛道に心得て置くことではない。たゞ、此の身心を擧げて修し盡すばかりだ』遁世者に對する垂戒はこれで終つてゐる。正三は一切の思索も理論の追求も斥けてゐる。これは勿論、禪家一般を通じてのことであるが、彼は念佛を以てひた責めに身心を責め盡せといふ。正三に於ての念佛は、放下着と同義語である。即ち他力の救済を欲せず、たゞこの念佛によつて、念根を斷絶せよと云ふのであり、それが死に習ふ方法である。死に習つてひまを開け得た限り、それはそれだけの解脱であり、それに相應して萬徳の働きが顯現するといふのである。即ち我身のあけ得ただけのひまは、我身自身に顯現される。思索の上に探求して到達した思念の上に於ける境地に止まらず、現實に我等の日常生活に現れる、それを正三は萬徳圓滿の働きと認めてゐるのである。

然らば萬徳圓滿とは何か、と問へば、無想無念と正三は答へる。そしてそれこそが、佛境界であり無縁の大悲を絶えず行ふ境地であるが、佛境界には仲々到り難い。けれどもそれを目指して修し行く裡に、一分の解脱は一分の働きとなつて現はれる。一言に見性成佛と云ふが、普化と臨濟の境地の相違も、此所にその原因があると正三は認めてゐる。かくて彼はこの萬徳の働きが、日常生活の上に如何様に顯現するかを重視する。即ち活機である。この活機によつて人々が、如何許り執着を離脱し得たかを計ることが出来るからであり、此點は矢張り古の禪家の門答商量に通じてゐるのである。

正三は彼の説く所の念佛によつて念根を切り盡すことの、實際的効果のあつた例を幾つか擧げてゐる。もとより自説を裏書きする爲に虚偽の事實を構へる如き人でない事は判り切つてゐる所である。死に習ふといふ事が、斯の如き結果に到達せしむるに、たゞ思念の上にあるものであるならば、我々は何も苦しんで無形の妄念と取組んだり、要もなき暇つぶしの坐禪辨道をする事もないのであるが、これあるが故にこそ、更に一層の鞭撻を自己に加へる事が出来るのだ。

ある武士が念佛を唱へる心構を正三に訊ねた。



『貴公は武士であるからには敵の陣立てを觀念の上に造り立てる。そしてその敵の備への中に、南無阿彌陀佛と飛込み南無阿彌陀佛と飛込んで、自由自在に飛廻れるほどに念佛をされるが好い』と正三は答へた。たゞ此所に云ふ觀念とは、近頃用ひらるゝ觀念だの、或は觀念的などの語とは類を異にしてゐる。眞實に念を觀するのであり、白隠禪師の夜船閑話にその結果を、唯心所現すると云ひ切つてゐる觀念であり、身心一如への道もこれによつて聞かれる觀念である。正三はかく答へてから、

『序故話をするが、此前尾州の百姓で、信心深い念佛者があつて、ある時衲に念佛の唱へやうを訊ねた事があつた。そこで、衲は、格別昔からの云ひ傳へと云ふでもないが、たゞ衲の信ずる所として、念佛の申し様に五種あると答へた。これは經文に、阿字は十方三世佛、彌字は一切諸菩薩、陀字は八萬諸聖教、皆な是れ阿彌陀佛と説かれてある。これは即ち、阿と云ふ時は三世十方の諸佛に通じ奉り、彌と云へば一切諸菩薩に通じ奉り、陀と云へば八萬の諸聖教を誦んだのに當ると云ふ事である。』

此の如く一切の功德は此の六字に籠りたる事を念得して申す、これを第一の功德の念佛と云ひ、第二には懺悔懺悔の念佛、これは身心の惡業煩惱を懺悔懺悔して申し盡す念佛。

第三に截斷の念佛と云ふのは、念佛の劍を以て善惡の念二つながら南無阿彌陀佛と切り拂ふ念佛。第四に末期の念佛と云ふは、即今念佛を唱へる此時を臨終と思定めて南無阿彌陀佛と死習ふ念佛。第五に平等の念佛と云ふのは、一切の事に執着せず、南無阿彌陀佛無阿彌陀佛と松吹く風とひとしく申す念佛である。

と説いて聞かせた所、聞いてゐた彼は我が言をひしと受けて、さて／＼氣味よい念佛、然し私はほかの念佛はいらぬ、たゞ截斷の念佛これ一つで有難い、と限りなく喜んで歸つて行つた。その後六年ほどの間、勇みに勇んで念佛してをつたが、ある日自分の息子を呼び、私は今日死ぬから、玄正坊を呼んで来てくれるように使を出してくれ、と云ひ出した。餘り突然なので息子も驚いたが、使をやつて玄正坊が來ると、親父は又、自分は今日死ぬ故にどうか今日は此所においで下さい、と云つて小豆飯など炊かせて御馳走した。玄正坊が喰べ終ると親父はゐすまいを正しくしたので、息子は内々病氣でもないのに死ぬ事はあるまいと思ひながらも、何か云ひ残して置かれることがありますなら伺つておきたいと存じます。と云ふと、六十年もたは言ばかりついて來たのに、それでも足りずにまだ死にたは言までつけと云ふのか、と云つて、ぶんとした態度でゐたが少時して、云ふて置く



事一つあるが、お前等には聞き得まい、と云ふので息子はぜひお聞かせ下さいとたのむと、いや夢ぢやさ、と親父が言ふ。誠に夢の有様で親と云ひ子と云ふも、夢の中の戯れに過ぎなくなりますが、と息子は嘆きながら答へたが、親父は反つて、そんな理窟のついた夢ではない、たゞ夢ぢやさ、と云つてその儘往生してしまつた』

と語つて聞かせた。これこそ正に死の隙をあけた人の證據である。然し我々は如何に之等の話を聞いても讀んでも、死の隙をあけるの文句を繰り返しても、眞實に修し盡さない限り死の隙をあける事が出来ないのである。

此の尾州の一老農は、正三の言を信じ言の如く行つて、眞實に解脱して世を去つたのである。彼の息子が父の發した、

『夢ぢやさ』の一句に對して、

『誠に夢の有様で、親といひ子といふも、夢の中の戯れに過ぎず』と云ひ出すと、

『そんな理窟のついた夢ではない。たゞ夢ぢやさ』と云ひ放つて、安住正念末後自在に此身を捨て了つたのである。千百の雲衲は、南泉一株花の話に參じ、夢の如くにして相似たりの句に熱汗を絞るのであるが、此の老農は截斷の念佛によつて、たゞ夢ぢやさ、の一句

に解脱の境地を的確に示した。

正三老人は先にさる遁世者に對して、

『他人を濟度したり或は法を説かうと思ふ場合にこそ知識は必要であるが、自分が成佛する爲には一切の事を知るといふことも怨となる。故にたゞ土になつて念佛をもつて死に習ふべきである』と説いたが、その説はいま此の老農に體顯されて、眞實に證據を示されてゐるのである。

禪に於て求むる所は、たゞ此の端的のみである。如何に學は古今に互り識東西を貫いても、此の一大事を究め得ぬ限り、所詮依草付木の徒に過ぎないのだ。されば白隠禪師も、於仁安佐美の中に——若し夫れ命根不斷底ならば、縦ひ三界の秘密を學得し、七宗の大事を明らめ得たりとも、陰に是れ妄想計較智解卜度の際のみ——と、喝破してをられるのだ。我らの目的とする所は此の見性の端的以外にはないのである。それ故に白隠禪師の寒山詩闡提記の講話の終には到る所に、須く見性すべし、の語が反覆されており、拔隊禪師の法語もその終りは見性の語によつて結ばれてゐる。

唯だこれ見性が一大事因縁なのである。併しながら、聖諦第一義と云ひ、的々の大事と



云ひ、般若の體と云ひ、その目的とする所は大法の極意であるとするも、已に文字に顯れた  
限りは差別に陷る。各人の境地にあつて各々これを判斷するは止み難き次第であり、遂に  
は見性の語も慣用してゐる中には垢がつき、やがてその眞意を去る事遠くなるも亦止むを  
得ざる次第である。かくて正三老人の時代には恐らく此の見性の二字が、生悟りのお悟り  
自慢の道具に使はれる事が多くなり、見性の二字を鼻の先にぶらさげて、狂ひ歩く人が  
多くなつた爲に、老人はその弊を見るに堪へかねて、見性の語を遠ざけたものと推察さ  
れる。

かうした事實は現に我々も、先輩から幾度か聞かされ戒められた所である。古人は大機  
大根であつたが故に、たゞ一句に參じて、徹悟に究め去る。一句の中に心身を擧げて究め  
るのである。一切の愚痴煩惱、妄想迷執が此の一句によつて檢討されるのだ。我々の日常  
に於ける顛倒した行動、あがき廻る痴態の一切が、一句によつて究め去られる。

斯くして眞實に此の一句に徹する爲には、それは何十年かゝるか、一生かゝるか判らな  
いのであるが、斯くして徹した曉に、初めて見性の語が許されるのだ。併しながら、近  
代に近づくに従つて、人間の氣根もだん／＼薄弱となつて來て、とても一句を守り通せな

い所から、白隠禪師は方便をもつて公案に種々の段階を設け、浅きより深きに、粗より細  
にと進むやうにせられたのであつて、これを罵るものは梯子悟りなどと云ふが、白隠禪師  
を恨むべきか謝すべきかは、各人自己の態度に歸する。

然し、須く一回見性すべしと云はれ、或はこれを初關透過とも云ふが、此の透關の見  
性にも、各人の願信の強弱、氣根の大小によつて深淺、厚薄の差別はあつても、ともか  
く一旦師家から見性を許されると、直ちに天狗となつてしまつて、所謂お悟り自慢なる手  
のつけられない禪病につかれてしまふものも屢々あるとの事である。現にある田舎寺の二  
個寺の住職は、二人ながらお悟り自慢で、顔を見れば互にお悟りの自慢を語り合つて飽く  
事を知らず、庭の草一本引くでもなく、寺は荒廢に任せて遂に二人ながら己れも荒廢の中  
に没し去つたものもある、と語られた事があつた。

正三老人時代にも、恐らくかうした見性の二字を振り廻すお悟り自慢か跋扈したもの  
思はれる。問題は見性の二字にある。そしてその本質に到達せしむべき手段として、同じ  
き時代の人々の生活の環境・様式・態度等によつて、能ふ限りの可能の方法が講ぜらるべ  
きであり、それが眞の應機接化でなければならぬ。この時代への順應は、徒らに時代へ



妥協し追隨する事ではなくして、これが眞實の方法である。そしてこの方法を發見するには、同じき時代の人間としての生活の苦惱、自己救済の要求に最も近く觸れてゐなければ、と云ふより寧ろ、自己自身が痛切にそれを感じてゐなければならぬのである。

正三接化の當時は徳川の勃興期である。武家は其の生活を確固安定せしめると共に、一般庶民の生活も、戦國時代の不安を去つて初めて安らかに自己の生活に當面する事を得た時である。そこに庶民の自己解放、精神安定の要求が生れ出づるのも必然である。

併しながら此時代の庶民一般の教養は、まだ水準の低いものであつた。所謂高遠な教理を究める要求もない代りに、煩瑣な理論の追求に魅惑される煩もなかつた。求むる所は自己の安心である。此の要求は正三以後白隠に到つて高調に達し、曹洞の天桂と相對して禪風天下に敷衍して、從來堂上武家の手にあつた禪は漸く庶民の手に移つたのであるが、正三はその初期の、云はゞ人心の白紙時代に現はれた人である。

されば彼はこれ等の人々に、所謂禪臭い、お悟り、見性などの境を説いて、禪の悪弊に陥入る事を避けようと努めたものと思はれる。今日の叢林でも、人々の態度を批評するのに、お氣取り、おすまし、などの語が往々用ひられてゐるのである。或人は、濶達自在、

豪放磊落、又専ら惡辣の師家の風を装ふのがあるかと思ふと、或者は、甚だ超然と、鼻の上で呼吸をしてゐるやうな態度の者もゐるといふ事を云ふのである。これでは禪の本質から、遠ざかること甚しい。正三老人が萬人に要求したのは、眞實自己に徹することである。禪の言葉で何と云はうが、そんな事には頓着しないのである。日々の生活に即しつゝ己れを離れること、即ち生活の根源に徹することであり、それを老人は、死に習ふ、といふのである。

己に他人を濟度する爲には種々の知識も必要だが、己れその者の解脱の爲には知る事は反つて怨となると認めた彼が人に奨めた實踐の方法は甚だ簡單である。武士には一陣に馳け入る心、即ち勇猛の機を養へ、それが爲には茫然とぬけがら坐禪をするよりも寧ろ、機を張つて謙をうたへと云ふ。そして更に境地が進んだならば、自分が『麓の草分』に説く捨身の位を習へ、と云ふ。商人には算盤を持ちながら、己れを捨てる事を習へ、農夫には一畝々々の中に南無阿彌陀佛と自己を打ち込み自己を申し消せ、と教へてゐるのである。正三老人の農家に對する尊敬の態度は實に到つたものである。今日高度國防計畫などが唱へられて、食糧生産の確保など、農家に對する尊重の念は昂まつてゐるが、正三老人の農



業尊重はもつと本質的なものである。がそれは又後に説く事とする。

見性とは、自己の心性の本源を徹見する事である。又、法の淵源に徹する事である。又、大我の爆發である。等々と云つても、要するに説明であり形容である。然も事は甚だ簡單に歸するのである。八萬四千の法門と云ひ、千七百則の公案と云ひ、何千何百の經文も要するに見性の一に歸してしまふのだ。そしてその到達した所を見性と云つてゐるのであるが、何も難しい事ではない、極めて簡單な事である。とは我々もしばく聞かされてゐるのであるが、然もその簡單な、自己の純化、純一無雜の境に達すると云ふ事は、八萬四千の法門を超越する大難行でもあるのである。簡單と云へば簡單、複雑と云へばこれより限りなき複雑の道はない。斯く云ふも、已に複雑への一步によつて複雑にとらはれてしまつてゐるに過ぎない。

それ故に正三は、遂に佛とも法とも云はなくなつて、

此の糞袋を何とも思はず打捨てる事——

強く眼を着けて、南無阿彌陀佛、々々々々々々と、命を限りにひた責めに責めて念根を切盡す事——

と説いてゐるのである。

正三の念佛とは、阿彌陀佛を頼み參らするにも非ず、たゞ自己の妄念を打消す修行である。だから彼は例の理論家にも、

『お前などもたゞ念佛申になられるが好い。法然等も念佛のほかは菩提の爲になる事を知らずと云つて、一枚起請二枚起請三枚起請まで書いておかれた。自分も此行をよく思ふ。

第一此行には病がつかない。大鐘を胸の中にぐわんぐわんと扣き込んで、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と力を出して唱へ、惡業を少しも面出しさせず、平生此の如く用ひて念を滅すと——』と肝要を説き、又ある時は衆に示して、

『ある男が法然上人に後世の願ひやうを訊ねた所、上人は、後世を願ふと云ふのは即ち直ちに頸を切られる者の心になつて念佛を申す事である、と答へられたと云ふが、これけ實に好き教だ。眞にかういふ態度で念佛しなければ、我執を盡すことは出來ない。——』と云つてゐる。

要するに目的が純一無雜にあるのであるから、その手段も單純なれば單純なるだけ好いのである。然るに人間は純一無雜になることが困難であるが故に、手段の單純も亦困難に



なつて来る。易行の道は難行であり、難行反つて易行の觀も呈して来るのである。

正三は生悟りの自己吹聴の具に用ひられる見性の語を避けて、見性の本質に到達の道として諺、念佛、その人達の境遇と性格に應じて何でも用ひて、此の尾州の一老農を解脱させてゐるのである。此他にも、ある夫人は正三から仁王の機を受くべしと聞かされてからいつか仁王の機を受けるやうになり、或る時正三が訊ねた際にも、召使がくどくどしてゐるのを見て、

『もつと心をしつかり、かうして仁王様となつた氣になつて』兩腕を張つて、仁王の姿をして見せたが、如何にも機が張りつめて、更に可笑しげな所もなかつた、と正三は語り、『これはその機でないものがやれば實に可笑しく見ゆるものだ。お前方誰れでもやつて見なさい。きつと可笑しく見えるものだが、あすこまで進んだのは、仲々えらいものと思ふ。殊に衲に、いつか阿字仁王の機を受けた時は、胸の中のものや／＼を皆な吐き出してしまつて心も清々しくなつたと語られたが、よくもあすこまで修されたものだ』と感服してゐる。

これ等の例は實に數多く『驢鞍橋』の中に出て来るが、さて、現代に於ける我々の修行

への困難は、何よりも此の單純な方法に安んじて従ひ得ない點にあるのである。一切の迷妄は生死の根源に徹し得ない所から派生すると聞いてかく信ずる。併しながら、と又考へるのである。生死の根源に徹し得たならば、果して一切の問題は解決するであらうか。彼の尾州の一老農は、最後に當つて、夢ぢや、さ、の一句によつてよくその解脱の境地を示してゐるが、それは果して彼が一切の問題を解決してゐるのであらうか。と、我々の疑惑を、彼の解脱の中にまで移入して考へてしまふのである。が、尾州の老農はそれ等の事は頓着なく、理窟を超えた夢の中に解脱してしまつてゐるのである、かくて、我々は再び我々の疑惑の中に取残されてしまふのである。そして、解脱とは一切の思想、疑惑を超越し、或はそれにバックする所の境地に心づくのである。

又、禪は一切の學問・藝術、云はゞ文武百般、我々の生活を擧げてその根底に通ずるものであるとしばしば云はれる。と直ちに、然らば大悟徹底したならば、哲學も科學も藝術も、欲するまゝに學び得られ、表現操作の一切が可能となるかと云ふやうな、誠に身勝手な考へにすら陥入り易くなるのである。

併しながら禪に云ふ所の、差別に徹して平等を體得するとは、この差別の當體を離るゝ



事ではなくして、差別それ自体を徹底認識する事である。此事は我々の修行の道程にもし  
ばしば現はれ、師家の鉗槌によつて辛うじて見性の如き境にでも出るや直ちに、所謂天地  
一枚鍋蓋悟の悪平等に墮し終つて、善悪、美醜、一切の差別をすら認め得ない状態にまで  
陥入つてしまふのである。正三老人の最も嫌つた、見性などゝ事もなげなる事を鼻の先に  
ぶら下げて、とはかゝる人を云つたものである。實に我々の個我に徹し、有限に徹し、差  
別に徹した時に、我々は平等・無限・絶對を體得するのであるが、絶對の體得の曉は、  
更に再び鮮明に、差別の相を認識する時なのである。正三老人は此の境地を、なんともな  
らぬもの、と道破してゐる。

併しながら何ともならぬとは、何も出来ぬと云ふ、消極的な宿命説ではないのである。  
なんともならぬ必然は、必然のまゝに、責めて責めて責め盡して高次の世界へ驅り立て、  
行く、そこに佛法修行の目的を認め、生命の進展を信じてゐるのである。かく行する事に  
よつて、我々は差別のまゝに平等であり、平等の體得に依つて差別の相は鮮明となり、そ  
こに純一が一層明らかになつて來るのである。

正三は正誓尼に與へた書の中にも、

一、常に心を持つべきやう、強馬に乗りたる時の心を忘れず晝夜守るべし、油斷せば、  
煩惱の激發り來て苦患惡業あるべし。

一、心をはりかけ眼をすへて、奥牙をかみ合せ、生死を急に守つて忽ち死する心を用ふ  
べし。

一、千騎萬騎の敵の中へ唯一人かけ入る心を守るべし、如此持つて此心純熟する時は  
心無事にして萬事に使ふに自由なるべし、藝能にも此心を使はずば上手にあらず、武勇  
の働も此心なくては不叶、人に交り公界へ出て物を云ふとも此心なくば不自由なるべ  
し。

と云つてゐるが、我が心を純熟すればするだけ、執着を離れ、自由となつて、思索にも  
表現にも操作にも純一無雜に打ち込む事が出来るのである。それを萬徳圓滿の働き出た境  
地とも説いてゐるのだ。

ある時一人の僧が、道元禪師の、

建長五年中秋

また見んとおもひし時の秋だにも今宵の月にねられやわする



と云ふ歌を取り上げて、

『是れは道人にも似合はない、月に執心を残した歌ではないですか』と云ふと、

『さうではない。道元禪師は歌道に達してをられるが故に、その道から遊ばされたのであつて、月や花には、それぞれの感を入れてよむものだ、それをお前達は、何でも彼でもただ莫妄想放下着と、すくひ捨てる様にさへ云へば好いと思つてゐるのであらう』

純一無雜とは、一本調子のからくな、融通の利かないものではなくして、個々の生命の躍動を自在ならしめるところのものである事を明らかにしてゐるではないか。即ち花に對しては明かに花を感じ、月に對しては明かに月を感じる、禪では之れを月に對しては月になり切り、花に對しては花になり切ると云ふ、英雄の胸中閑日月ありなどと云ふ文句に出會ふと、我々は何かかう、英雄の心の中は特別な餘裕が存在してゐるやうな、何かぼかんとした物があるやうに思ひ勝ちである。が、英雄はたゞ、忙しい一杯、ひまな時はひま一杯になり切れる事を現はしたものである。生也全機現であり、死也全機現である。生死交謝する刹那々々の當體顯現であり、その當體となり切つた所に、この顯現があるのである。

前にニイチエの刹那觀と道元禪師の刹那觀とを引いた。ニイチエはこの熱烈な思索の結果、生にあらす死にあらぬ刹那に到達したのである。これは確に彼の思索の上に於ける體得ではあるが、まだ判断の上には出てゐないのである。理智の探求し得た究極である。それに依つて、心の開ける事は遂に得なかつた。然も彼の思索の道程とその表現は、今尙ほ現に、世界の人の心に影響しつつあるのである、何故にかくもこの事を反復しなければならぬかはこの點にあるのである。

獨りニイチエのみでなく、最近その名の擧げられる事が頻繁になつたランケにしても、その世界、人生に對する態度は切實であつた。それだけに彼等が、現在のこの混亂した世界に當面する人心に影響する所も甚だ大きいのである。それだけに我々は知性的探求に驅り立てられる事を避け難いのである。殊にランケが、

——我々が世界歴史の發展のうちに見出すものは力であり、道德的精力である。それは定義せられ得べくもなく、抽象的なる規定に齎され得べくもない。しかし人はそれを直視し、知覺し得る——(高坂氏譯)

と云ふ、有名な『列強』の末尾の句の如きも、我々の胸を打つ事甚しい。が、我々はこ



れも反復讀誦する丈では何の力も得ないのである。こゝに知性と信念との間に横はる何物かがあるのである。かくて現代の多くの人々は此解決を禪に求める。併し乍ら一方の禪家は、此等の苦惱を苦惱として餘り感知してゐないのである。依然として白隠時代の儘の接化の方法を寸歩も出てゐないのである。求むるものは同じく自己の苦惱であるとは云へ、只己自身の身に纏らう苦惱の解決ではなく、もつと客觀化されたる云はゞ學的ともなつた苦惱である。

然るにこれに接する人は、何のそれしきのすだは言と斥けてしまふ。然も眞實にすだは言として斥け去るだけの信念を確保してゐるかどうか怪しい場合、求道者の胸にも仲々ピョンと響かないのである。と云つて、求むる者の理論的苦惱について廻つてゐては、一層解決はつかないのである。私は先頃足利紫山老師の臨濟錄提唱の末席を汚して、あの序文中の、銅瓶鐵鉢、掩室杜詞、松老雲閑、曠然自適の件に於て老師は、

『臨濟は晩年大名府の興化の所に行き、一室に閉ぢ籠つてじつとしてをられた。松老ひ雲閑にして曠然として自適す。近頃の坊主は顔を見ると、ヒツトライがどうしたとか何とかわい／＼云ふが、そんな沙汰の事ではない。松老ひ雲閑にして曠然として自適すぢや』

と云ふ意味の事を言はれたとき、何か烈しく心を打たれた。我々が政治を論じ、世界情勢を語り、學問に就て話し合ふ時は、已に我々自身を離れてゐるかの如き錯覺に陥入つてゐるのであるが、實は我々をしてかく語らしめる所のものは、我々の根底を揺がせてゐる所の不安なのである。

それと同時に、室を掩ひ詞を杜ぢて、默然端坐してゐる所の臨濟は、決して隱居の安逸を貪つてゐるのではないのである。自受法樂の中に無邊の大悲は溢れ出づる。松老ひ雲閑にして曠然たる境地こそ、最も人生に近くして、一切の葛藤を超越し、葛藤を自在に支配し得る場所ではないのであるまいか。

我々の最も欲し求める所は此の境地である。一切の能力を斥けず、然も能力に支配されず、能力を支配する境地である。道元禪師は支那に渡つて如淨禪師の下で、求法の目的を達して歸朝せられた時は、眼横鼻直と道破された。眼は横に鼻は縦に、眞に簡單明瞭である。が爾來、法を究むる事は愈々綿々密々、此所に無盡の理論が展開されてゐる。試に諸法實相の卷の中の應菴曇華禪師に對する、對實相の批判の如きを見れば、甚だ苛辣を感じる程に理論的に追求されてゐるし、また觀音の卷に於ては、觀音の道取の方法に幾段階



のあるを説いて、——いま佛法西來よりこのかた、佛祖おほく觀音を道取すといへども、雲巖道吾におよばざるゆへに、ひとりこの觀音を道取す——と云つてをられる位である。平等へ到達の極致は純一無雜であるけれども、差別の現象に現はれ來たれば千差萬別である。その對象に壓倒せられないのを正三老人は、萬德圓滿をよく使ふと云つてゐるのである。現在では、近き過去に於ける西洋文明流入の結果として知育尊重の弊が説かれてゐる。その傾向は正に多分にあるにはあるが、それは決して知識その物が悪いのではない。今日までの我々は要するにそれ等の食物に慣れなかつた、と云ふだけである。決して過食すらもなし得なかつたのである。そして此頃に到つて漸く、銀座の空を仰いで、ベルリンか東京か、と西洋と東洋の差別がなくなつたことを感ずる人すらも出て來るやうになつたのである。それだけに東西の文明は融合して來たのである。我々は何も向ふの文明を恐れる要は尠しもないのだ。素材が多ければ多いほど、人生は豊富になるのである。たゞそれ等の素材に壓倒される事を免れる爲には、どうしても對象を超越しなければならぬのである。これは我々個々の問題であると共に、又時代の問題でもあるのである。日本に於ける西田哲學の樹立、その門下と思はれる高坂氏の無明普遍

の説等も、發生の基因はこの點にあるのではあるまいか。

然らば、正三の云ふ萬德とは何であるかと云ふと、或時正三自ら衆に對して、

『萬德とは何が働いて出たものを云ふのか、誰れでも萬德その物を云つて見なさい』と云と、一人の武士が、

『出離です』と答へた。

『出離は出離であるが、無相無念を體とすると云ふが好いのである。何事も皆なこゝから働き出るものであつて、無念無相の時に一切に相應するのである。譬へば拍子に合へば自然とそれに乗つて來る。謠などをうたつても、これは諸國一見の僧にて候、と云へばびたりとその氣になる所を云ふのである。自分も扇の手は知らないが、謠に任せて夫れに成り切つて自由に舞ふ氣持はある。物に應じて形を現すと云ふのも無念無心の所を言ふのである。譬へば、踊りずきものがあつて、自分は踊りが好きであるから踊を踊つて成佛するやうに示してくれと云はれたのに對して、それを示すことが出來なければ已に萬德圓滿ではないのである。曾て衲にもこんなことがあつた。ある殺生好きの男があつて、自分には殺生を以て成佛するやうに示してくれ、と云ふのである。そこで衲は、成程さういふお



前は鳥などを殺す度には、ね狂つてきやツ〜と云つて死ぬのが面白いと見える。それならばお前が死ぬ時も亦きつと面白いであらうから、悦んで死なれたらば成佛である。成佛といふのは心安く死ぬ事である。それ故にお前が鳥を殺すたび毎に、胴骨をへし折られて共に死習ふて笑つて死なれるほどになれるが好い。かくして始て殺生の人と云ふ事が出来るのだ。殺生もこゝまで行かなければ武士として卑怯である。——と云つた所が、その者もびたりとつまつてしまつて殺生をやめ、其後は修行に進んで行つた。自分も萬徳の事は誰れにも習はないが、自由に死なれぬのを苦にして種々に鍛錬する中に、此考を悟つたのだ。だから衲の法と云へば先づ臆病佛法である』と云つてゐる。

更に正三の云ふ無念無心に就ては、

『今時の修行者は、皆な古人の説いた嫌道を脱する事が出来ないでゐる。大抵は無門の禪の箴とか、或は大恵の八種の嫌道などに落ち込んで、修行をして法を得たなどと思つてゐるやうである。それ故にぬげがら坐禪となつてしまつて、あつか呆然として物を思はない所を無念無心と思ふ人が出来て来るが、これは非常な誤りだ。こんな風で修行すれば、自ら機が減つて病氣となるか、氣違となつてしまふものである。夫れ佛法の無念無心と

云ふのは一切事の上にも用ふる無念無心である。悲む時も悦ぶ時も、萬事の上に使ふ無念無心である。釋尊涅槃の時に迦葉阿難を初め大衆方が悲まれたが、是をも有心と云ふであらうか。そこで此無念を用ひる坐禪の筋はと云へば、只勇猛心を用ふるこれ一つである。よく〜この點を吞込しておくべきで、此筋を辨へた人ならば、自分の修行は弱くとも、諸諸の修行者の爲には寶となるのである。』

と、即ち消極的に、物思はない境地々々と模索すれば機は減つて行くのみであるから、悦ぶ時は悦ぶ一杯、悲しい時は悲しみの全幅、それが眞實の無念無心であり、この無念無心によつて萬徳を働かす、萬象に對して一切を自在に驅使する事を得るに到る、と云ふのである。

云ふまでもない事ながら、勇猛の機とは自己の愚痴煩惱に對する勇猛であるが故に、正三自身は實に殺生が嫌ひであつた。彼は殉死を極度に嫌つて罵倒した程であるし、或る大身の武家が成敗好きの話を書いて一人殺すは容易ならぬ事、と出入を止めてしまつた程であるが故に、その教化にも實際に殺生を止めた例が數々ある。今殺生の例を引いた序にその一二を引いて活殺自在の手腕を見る事としよう。正三遷化後の思出話にある人が、



『師がまだ俗でをられた頃の知人に、辻斬りの好きな者があつた。ある時師は彼の武士に向つて、貴公は辻斬りをすると言ふ噂があるがあれはきつと嘘であらう。辻切りなど云ふ事は仲々出来るものではないからな、と言はれると件の武士は、いや私は實際にやる、といふ。いや辻斬りではないだらう。辻斬りは仲々出来るものではない。と師が重ねて云はれると、それならば出向いて實際に斬つて見せよう。と云ふので、連れ立つて人家を離れた場所に行つて物陰にかくれてゐた。と折から町人の二人連れが通るので、件の武士は、あれを斬らう、と云つたが、いやあれはいけない。私の云ふ者を斬つて見なさい。と師が留めた。する中に供を連れ千石取り程の武士が通りかゝるのを見ると、さ、あれを斬れ、と先きに立つて飛び出さうとしたので、件の武士は驚いて、あれはいかん、あれはいかん、と抱き留めて出さなかつた。そこで師が云はれるには、さてくでかい腰拔侍、私が斬らうと云ふのに其方は腰が抜けて斬れぬではないか。腰が抜けては辻斬りは出来ないと云つたのは此事だ。これ位の人間を切る事が出来ぬ程なら今後は辻斬りをやめなさい。先に通つた町人などを斬ると云ふのは比丘尼を斬るも同然、武士たるものがかやうの者を斬るものか。と耻かしめられたので、件の武士も腰の物に止め金打つて、それ限り辻

斬りをやめられた」と物語つた。

正三の著書及び『驢鞍橋』の中にも、正三自身の武藝については具體的に何事も語られてゐないが、一切を通じて武藝に秀でゝゐた氣魄は感じられる。が更にその武藝の背後にある、更に確然たる氣魄がなければ、かうした無茶な武士に身を挺して戒めを爲す事は出来なかつたであらう。かくして正三は出家後も、佛法世法一如の道に進んで萬徳の働きを個々の上にも、邦家全體の上にも顯現を望んで終生努力したのである。

### 佛法世法一如

佛法世法一如に就て、正三は強き自信を以てかく云つてゐる。或る晩の示衆に曰く、『昔から僧俗共に道者は多いが、大抵は皆な佛法知りに成つたばかりで、世法萬事に使ふと云ふことを云つた人は一人もない。或はあつたかも知らないが、自分は今まで終に聞いた事がないのであるから、先づ納が云ひ出した事と思ふ。』  
所で今迄の日本の僧俗と云ふと、或は頌を作り歌を詠じて、やれ名頌であるの道歌であ



るのと云ひ合つてゐる類が多いのである。かと思ふと又、やれ何と問をかけたなら何と答へた、これは誠によい答話だなど、人々がほめ上げるので、自分でも之れが佛法と思ひ込んで盛に醜句のやうなものを吐く者があるが、之れはデキ口佛法と云ふものだ。

その他にもかうした誤つた見解を抱くものはいくらもある。即ち、向上佛法、サビ佛法、活達佛法、ダテ佛法、悟り佛法、ヘゴ佛法（ヘゴとは泣面の事らしい）まだ様々に自分勝手な私佛法が多いが、自分は更に嫌ひである。我れにあつては只だ朝から晩まで、ひた向きにキツト果し眼になつてゐるのが好きである。自分も是の如く勤めてゐるし、人も是の如く教へるのを佛法修行としてゐる。我が法は果し眼佛法だ』

と、正三にあつては、果し眼佛法こそ、佛法世法一如の端的なのである。強馬に乗りたる時の心を忘れず、心を持つべき事、これ一つである。こゝから一切は働き出るのである。

佛法世法の事は、正三もしばく引く如く、華嚴、法華、その他の經文にも説かれてあるし、個々の上にあつては心身一如の顯現である。然し正三生存の前後に起つた、信長、叡山の焼打によつて、山徒が唯一の力の糧であつた祈禱佛法の神祕の影が消え失せ、妙心寺は上洛を志す武家の傳送方たる地位を失つて、貴族的色彩が漸く失せて、禪は勃興す

る民衆の手に移らうとしてゐた時代である。

儒學は藤樹、蕃山によつて實學の力を示し、神道は閻齋等によつて具象化されつゝあつた事を思ふと、誠に興味深きものがある。即ち正三の所謂世法とは、彼以前にあつた教義の上に於て、或は佛道修行の上に於ての心身一如に止らず、一般の日常生活、なりはいの上りまで浸透する事を唱へたのであり、その點に於て、正三は、自分以前に世法萬事に使ふと云ふ事を云つた人がないといふのである。

かくて彼れは『四民徳用』を著して、佛法世法一如を高調した。そしてその自著に對して、更に懇切熱烈にこれを説いた目的を布衍してゐる。これを以て見ても正三が、如何に佛法が現實に即さなければならぬものであるか、たゞこの現實に即する事によつて一切人の救済される事を信じて、説いて止まなかつた熱意は何はれるのである。

『驢鞍橋』に現はれた彼の此の言説を紹介する前に私は、老人自身が如何にこれを具體化して示したか、と、念佛に對する正三の説を數ヶ所に渡つて引いておきたいと思ふのである。

一日ある侍の來て云ふのに、



「某は先頃、無理に菩提を求る心を起さうとしましたが、勤めれば勤めるほど心が沈んで機が減ります故、近頃ではその心を打捨て、機をはずませ、調子に懸つて用ふる事として謡をうたひ、舞を舞ひなどして、少し飛び走るやうにしました所が、ふと機が勇しくなつて機の抜けぬ位を覺えました」

それを聞くと正三は、

『ほう全く見懸まで軽やかになられた。その位にまで進まれたら、更に勇を鼓して捨身の位を得られたら好いであらう。——捨身の位とは、老人の著「麓の草分」の中にある一段だが、要するに、身を思ふ心を除滅する、を説いてゐるのである——』と語つてから、折ふし同座してゐた、尾州大野の船頭二人に向つて、

『お前達も今此方の話された機を受けなければいけない。此機さへあれば、如何なる大難悪風にあつても少しも動ぜずに、自由自在に乗り切る事が出来るものだ。誰れでも此機が抜けてゐるから、さういふ際には慌てゝ無駄死をしまふのだ』と。そこで此の機を用ひやうとは如何なるものかと云ふに、正三はある人に、

『修行の心あひと云ふわけではないが、平生の機を用ひやうを教へよう』と云つて、『何事を

作さんと思ふとも、思ふたならば、思つたその儘に、分別なしに作すが好い。後になつてなど、思ふのは駄目だ。又、他所へ行かうと思つた場合でもこの通りで、機が發したらその儘にふと出て行くべきで、後にしようなどは思ふべきではない。雨降り、雪降るとも面白し、子供の時は雪遊びを面白がつたものだつたがと思つて出て行くべきである。萬事かくの如く無分別に仕習へば、殊のほか心の軽くなるものである』と、

以前にも書いた如く、爲さんと思つた端的に事を爲すまで、覺悟は平生に決してゐるのであつて、ふらくと心の移るまゝにあれやこれやとろつき廻るのではないのである。その正三はある日他行の際、小用を催して達し終ると、路の傍の溜り水で手を洗つて口を灌いだ。侍者の僧が、

『不潔な水で』と云ふと、正三老人は、

『衲の口よりは清いちやらう』と答へた。

『正法眼藏洗淨の卷』には、

しかあれば身心これ不染汚なれども、淨身の法あり、淨心の法あり、たゞ身心をきよむるのみにあらず、國土樹下をもきよむるなり、——



水かならずしも本淨にあらず、本不淨にあらず、身かならずしも本淨にあらず、本不淨にあらず、諸法またかくのごとし、水いまだ情非情にあらず、諸法またかくのごとし、佛世尊の説、それかくのごとし、しかあれども水をもて身をきよむるにあらず、佛法によりて、佛法を担任するに、この儀あり、これを洗淨と稱す。

等の句に照合する時、現代の衛生學を超越した何物かを感じるのである。

是の如くの機にある正三の平生は、如何なる態度を持してゐたかと云ふと、

『自分は若い時から總じて言句を持たない性分で、今に佛法を持つてゐない。世間の事に到つては名聞を始め、我が胸中一物もない。それであるから人に會つても咄すこともなく、たゞによんとしてゐるばかりである。人が何事か持ち込んで来れば應對に事を缺かぬが、こちらからたくみに出して云ふべき事も持たないのである。併しながら、佛法の筋を直したく思ふのと、人をよくしたいと思ふ念は強くある。たゞこれだけ、この他には何もない』と自ら語つてゐる。

前に正三老人が殺生好きの武士、辻斬好きの武士を戒めた事をあげたが、こゝには又た鳥指に對する訓戒がある。ある鳥指が、

『私は親代々の鳥指で、これをやめれば餓死するより道がありません。どうか此業をもつて成佛出來ますや、御示しを願ひます』

『地獄へはな、心が落つるのだ。それだから鳥を殺す度毎に、自らの心をひつつかんで殺して殺す、是の如くして一切の心を殺し盡してしまつたら、それが即ち成佛ぢや』

又、一日何某殿と云ふ人來つて、

『某も所司代となりましてから以來、心に隙がなくなりました。如何にしたらば安心を得られませうか』と尋ねた。

『何がそんなにお忙しいのか』

『家人共を對手に、色々と公事を作つて互に裁き、又裁かせて練磨してをります』と今ならば法科の刑事演習と云ふやうな事をやつてゐる答である。

『左様に物事を工んでをられては決してらちの明くものではない。たゞ心をハツンと用ひて、一切のもさくさを吐き出してしまひ、いつも隙をあけてをられるのがよろしいのだ。いざ訴訟事のあつた場合には、ぬんとした一物もなき心で双方の是非を問はれるべきだ。さすれば、鏡に影の移るが如くに、聞くと同時に我が胸でらちが明きます。』



總じて私のひいきがあるから裁く事が難しくなるのである。正直にさへ裁いたら何の暇もいらぬ事ぢや。兎角、くどついでては、裁けるものではない。若しも裁き損じたらば、罷り出て腹を切らうと思ひ定めて、自分の心一杯に是非に任せて裁かれるべきである。それには畢竟つね日頃、心を守る事が何よりも肝要である』

前の鳥指への訓戒に比べて、一讀してこれは一寸調子の低い感じがするが、もとこれ第二義のことであり、第二義への佛法顯現こそ正三の説話の目的である。此所に到つて、腹切らんずと思ひ定め、の語が強く響いて来る。彼自身も、出家の當時、曲事と思召されたら罷り出て腹切らん、と思ひ定めた人である。一切の事象に生死を賭し、生死を超えて當る覺悟、と云つていけなければ、生死を任せて當るところに、所謂、切れ端が働き出づるのである。

それ故に正三は、或る僧がその附近の寺から理不盡の事を言ひかけられ、言語に絶えた仕打を受けた揚句、その寺まで追放されようとしたので、遂に憤慨して公儀に訴訟に出る途中、正三の許に立寄つて此事を語つた。すると正三は、

『これはその方に意見を申すのではない。然し我ならば、御公儀に訴え奉り、それでも

是非が叶はぬならば古脇差を一つ買求めて、相手の長老と指違へて死ぬであらう』と云ひ放つてゐるのである。

出家して世間に入り、世間に入り得て始て佛法の全きを説く正三の生活は、八十に近き末期に到るまで、一面にはすり上げすり上げて行く否定への邁進であり、一面には全的の肯定である。その端的がある時は、殺生好きの武士に對して、自分が鳥を殺す度毎に、胴骨を推折られてともに死習つて打笑つて死なれる程になりなさい、の言となり、ある時の鳥指に對しては、鳥を殺すと共に我心を殺して殺し盡して、心盡きた時を成佛とするの言となつて現はれる。

已にぬんとして世事一切の心にかゝるものなき生活に達してゐる、と深く自ら信じてゐる老人ではあるが、それでも尚ほ山中に一人取り澄してゐるよりは、世中にあつて己れの足らざる所を顧みさせられる事を喜ぶ人である。彼にあつては此の世上こそ練磨の道場であり、この道場を淨潔にして莊嚴することこそ、自己の解脱への道なのである。

ある僧が、

なか／＼に深山の奥ぞ住みよけれ草木は人の是非を云はねば



の歌を呈して、是なりやとたづねた。すると、老人は、  
「一字正したい所がある」と云つて、

なかくに深山の奥ぞ住み憂けれ、草木は人の是非をいはねば——と讀み直した。

然しその正三も若き頃は、潔癖一徹な性格が、純潔な山居の生活への深い魅惑を感じしめたやうである。老年に及んでも幾度か山居を欲した頃の述懐をしてゐる。その一に、  
『自分も以前は山居すきにて、一寸した森や林を見ては、そこに庵を結ぶ心があつた。そして度々山居はしたけれども、天道に許されずして遂げる事が出来なかつた。然し今では反つてそれで好いと思つてゐる。その儘山にゐたらば、必ず獨りぎめの好き佛法者になつて、我れ獨り上となつて錯を顧み知る事もなかつたらう。以前は山居を好いと思つてゐたが、今は悪いと思ふのは、多少修行が上つたからとも思ふてゐる。今思ふと、山居を好むは、異風を好むダテ好きであつて、在家の者が庭を作り座敷を飾るのと二つ心と思はれる』と。

鈴木大拙師は山林佛法を説くに當つて、山林に入る僧の足音にも浮世戀しい響がある。と云ひ、正三老人は行脚する僧に對しては、淨潔な山川に接して己が心身を淨潔にせよ、

と示してゐる。山林のみの山林は意味を爲さず、世間だけの世間は混濁に過ぎてゐる。世間の眞只中にヌンとして坐り込み、土になり切つた正三老人に、深い山林の大氣を感じる所にも、佛法世法の一如の道を見出されるのではあるまいか。

正三老人は此の佛法世法一如への道として、しばしば念佛を説いてゐる。然し、正三老人の説いたところの念佛は、禪家が攻撃する所の念佛禪とは全く趣を異にするものである。自隱禪師は、實に猛烈に念佛禪を攻撃した。その攻撃の的となつた念佛禪とは、自力を以て坐禪を爲し、自力の足らぬ所は、念佛して佛にすがると云つた風の、捨身放命一切を擲ち來つて一念頭に坐斷するの坐でもなければ、ただ一佛に歸依しまゐらせるの念佛でもなく、努力もなければ信仰もない、全くぬえ的な存在である。

佛道修行とは斯の如く安逸怯懦、足が痛くなつたら坐禪をやめて念佛を唱へ、念佛に飽きたら、また坐禪をする、生にあつては死を思ひ、大死を念じては生に引かれる二筋道をたどくしながら、念佛の功德、禪の法力の名目に自己安慰してゐるやうな状態では、到底、達し得るものではないのである。尊ぶべきは一念頭の坐斷にある。

併しながら、在家の多忙な家業にいそしむ人々にあつては、改めて一炷の坐に坐ること



は已に仲々行ひ難いことであり、志あつても怠り勝になり易いのである。

或は又、自己の職業に没頭し、利慾を忘れ自我を離れた三昧に入る人もあるであらう。これ等を悟らぬ悟りと云ふか、悟つて迷ふ人と云ふか、私には判らない。然し彼のマユリー夫人がラジウム発見の瞬間の光景などを讀むと、眞に彼女が試験物なのか、試験が彼女なのか、誠に鞍上人なく鞍下馬なき感であるが、それによつて彼女の心地の開けた事には接するを得ないのである。此所に佛法の不可思議な働きを仰がなければならなくなつて來るのである。即ち法の筋を違えれば悟つて迷入るのである。

正三老人は、此の佛法世法の契機として、念佛を選んだものと解せられる。従つて正三は、自己の禪家の立場から、念佛を以て坐禪にかへたので、決して坐禪しながら念佛を唱へよ、とは説かない。たゞ大鐘を心の中にぼし込んで、ガン／＼と打叩くごとく念佛せよ、と云ふのである。

佛になりたいと思つて念佛するのは慾かはきの念佛故、遂には輪廻の業となる。たゞ強き機を引立て、煩惱妄想を打消し打消し唱ふべきのみであつて、かくすれば、忙しき家には客も長居は出來ない如くに、絶えず唱ふる念佛には、煩惱妄想も面出ししかねて、やがては影をひそめ、菩提心も起り、禪定の機も修し得るやうになる。と説くのである。

無道心の者も、念佛を申し申して申し盡して行く中に、菩提心も起る、と云ふ所に、念佛三昧と、職業的三昧の相異が現はれて來るのであつて、佛法なくして世法の救ひ難きを痛切に感ぜしめられる。

正三は坐禪と念佛に對してかく云つてゐる。

『坐禪修行を爲す者は、常に禪定の位になつてゐる程に坐禪を仕習ふべきである。淨土宗にては念佛を以て信心を申し起し、禪宗にては坐禪を以て無相無念の本心を修し出すのである。されば強く眼をつけておのづから勇猛精進の心湧出るほど修し出だすべきである。さなくんば、煩惱に打負けて、坐禪常住とはなり得べからず』

正三の説く坐禪念佛、共に歸する所は一つであり、之によつて見ると正三は、自分の下にあつて修行する雲水には専ら坐禪をなさしめ、彼の許に出入する道心者や在家の人々には、念佛を以て禪定の機に入らしめようと努めたと解される。

尾州の老農の如く、念佛に依つてカラリと解脱した人もある。又、白隠禪師がしばしば語る獨潭老人に謁した二人の念佛僧が、已に大死の域を透脱してゐたことも有名な話であ



る。要は熱烈な願信と、不斷、全くの不斷、即ち利那を離れない努力以外には達すべき道はないのである。それを正三は勇猛の機と云ひ、強弓をはり懸けた如くと云ひ、強馬に乗った心と云ひ、何とかして人の心に植ゑ付けんとする熱意が、言葉をかへて反覆されてゐる。また、ある時の述懐には、

『何と勤めても眞實無我にはなれぬものぢや。各々も修して見たらば合點される事であらう。然し自分はたゞ一つ取りかへ物があるおかげで、少しは無我になれたと思ふ。それはたゞ人をよくしたいと強く思ふばかりに、我を忘れるのである』

ある時、正三のもとに出入する人が来て、こんな話をした。

『此頃めづらしい話を聞きました。私共の方のある町に六十を越してひどく胴慾で無道心な親父がをりましたが、息子はこれと反対で、いつも親父に佛心のないのを嘆いてをりました。所が或日ふと思ひついて、

「好い金儲があるのですがなあ、私ではどうも忙しくつてやる事が出来ないし、と云つてお父さんはさつぱり道心がおありでないし」と申しますと、親父も金儲と聞いたので、「何だ、何だ」と頻りに訊ねます。そこで息子が「いえ大した事ではございませんが、あ

る人が自分の代りに三年の間日に六萬べんづゝ念佛を唱えてくれる者があれば十兩で頼みたいと申してをるので」親父は十兩と聞くと、「それはお前わしに丁度好い仕事だ、他へは頼みなさんな、早速やるから金を取つて来なさい」とえらく乗氣になりました。息子は心で喜びながら「きつとお唱え下さいませるか」と堅く念を押してから十兩父親に渡したさうです。

すると親父さんその翌日から、朝から晩まで珠數を放さず念佛しまして一年半ほどたちましたが、ある日息子をよんで申しますのに「どうも私も老先短く何もいらぬ身でありながら、何と思つてあの金を受取つたのか、近頃自分でも解らなく誠に浅ましい限りと思つてゐる。自分の後世の營みも遅いのにそれを忘れ、人様の後世を願つてゐたと云ふ事はうつけた限りだ。出来る事なら去年からのお念佛を、自分の菩提の爲にしたいと思ふ。わしがお金を添えても好いからあの金をお返ししたい。どうかお前からお詫をしてくださいか」と涙を湛えて申すのでした。「さあ先方で何と申しますか」と息子は父から金を受取りましたが、それから後はますます菩提心を起して念佛を唱え通してをると云ふ事でござい



それを聞くと正三は、

『さてもよい方便の仕やう、全く貴い人だ。それほどの業人が、菩提心を起すといふのも念佛の功德で有難ききはみだ』と云つてから、

『ところでどうだお前達』と弟子を顧みて、

『皆もさうして二年三年と勤めた所を、千兩にも萬兩にも買ふといふ人があつたら賣られるかな、恐らく賣られまい。して見れば大した功德が備るものではないか』

正三は禪宗の多くが嫌ふ所の念佛をかく尊び、法然上人の唱へ方を常に人に説いたが、浄土眞宗の事には一言も及ぼさない。そして或日、衆に向つて、

『此頃の人は一尙宗を誹る者が多いが、一體一尙宗の短所とは何であるか云つて見なさ』

と一僧が、

『肉食妻帯を致す破戒の故』と答へた。

『それは在家一同と建てた宗旨であるから、そのやうな事を云へば、在家人は入佛し難くなるではないか。先づ佛法建立と云ふものは、一國一宗となつたる時に天下の事が缺けぬ』

やうに建立しなければならぬものぢや。然るに一尙宗の教へに到つては、神社を破壊するとは云はぬが構はぬといふ。それでは、もし日本一國擧げて一尙宗となつたらば、神社は盡く廢壊し斷滅してしまふではないか。

それ日本は神國也。神を斷じて何として國を保つ事が出来るのか』

正三は實に徳川に對しても盡忠の人であつた。これは葉隠れにも現はれてゐる如く、當時の武家の正しい思想であつたのである。然しその心の奥には、日本は神國なり、の信念は堅く植ゑつけられてゐたのである。かくて正三から白隠を経て日本の禪はますます日本化されて、純乎日本の禪となつたのである。

かくして正三の佛法は、佛法世法の一如に向つてますます進む。

——佛の御言葉に、世間に入得すれば出世餘りなし、とあるが、これは即ち世法その儘に成佛するの理を示されたものである。さすれば、世法は即ち佛法に異らないではないか。又、華嚴經には、佛法不異世間法、世間法不異佛法とお説きになつてゐる。もしも世法をもつて成佛する道理を用ひられないやうな人ならば、その人は、全く佛意を知らない人と云はなければならぬ。と云ふのは、いま此の佛の説にすれば、世間をそのまゝ



佛法に用ひなければ、佛法に非ずと仰せられてあるのだ。さすれば、世法即佛法となるべきこと、これぞ納の念願である。——  
正三は自著『四民徳用』の巻頭にかゝげられた、修行の念願の一節に對してかく述べてゐる。

世法即ち佛法なるが故に、世法をして益々佛法ならしめる事、かくして佛法即世法となり、此所に一如の顯現がある。煩惱即菩提である。然しそれは、修行の上の見地である。即今我々にあつては、世法は世法、佛法は佛法と離れてゐる。此所に世法佛法一如への強き念願が、一層働かなければならない基因があるのだ。

正三は事一度びこれに及ぶや、實に熱烈に説くのである。『韃鞍橋』第二卷末尾の『四民徳用』に對する自注的説話は、正三老人としては珍しき長廣舌であるのもその故であるであらう。正三は一日これを説いた。

『四民徳用』はさる人から、佛法を武勇の上で用ひるやうに書いてくれ、と云はれたので書いたものであるが、武家の心得を説くとともに、農工商の三段を添えて、四民日用の爲めとしたのであるが、その本筋たる用ひやうは二つであつて、たゞそのなりはひに従つて

かへた許りである。

『さて納、武士の日々の生活の上に於て、佛法世法二つに非ず、と云つたが、これは世間日常の生活を、佛法修行の上を用ゆる事を説いたのであつて、即ち日常生活そのものが佛法の修行である、と云ふ事である。かく修行して行く事によつて、初めて、だん／＼と世間を自由に使ひ得るやうになる。佛法なくしてはどうしても、世間を自由に使ふ事は出来ぬ事だ』

と正三の意は、佛法即ち執着を離るゝの事である。世間に即して世間を離れ、世間を離れて世間に即し、世間を離れず世間に即せず、此の境地に到るべく、日常生活の上にあつての練磨修行、これ一如への第一歩である。次に、

『佛法も世法も理を正し、義を行つて、正直の道を用ふるの他なし、と説いた。これは近頃の人々は善悪をも辨えず、人に打たれても顔をさすつて黙つてゐるやうな人間を、正直な人だなど、云つてゐるが、決してそんな次第ではないのである。下世話にも正直坊の腹立たず、と云ふが、事實こんな人間は何の用にも立たないものだ。又、異國には、父羊を盜めば子是を以て現す、を正直とし、又、父羊を盜めば子是を以て藏す直き事その中にあ